

らず。是より又素の如く疎々しくこそ候べけれ。とて御暇申して出でぬ。されば年頃忠興、東照宮と親しからずして、利長を諫め争はれし故に、利家も一向我家の事思ふなりと心得て、忠興の申す旨に従はれしとなり。

○七人の大將石田を討たんとせられし事

慶長四年大坂に在りたる諸將の中、福島正則、淺野幸長、黒田長政、已下七人石田と不和なりし人々、使ひを以つて、朝鮮に有りし時、各力を盡し軍せしに、目附に定められし福原右馬助直高、垣見和泉守家純、熊谷内藏允直陳、大田飛騨守政信等私曲を構へ、太閤に達せざりし事どもを憤りて、罪科に處すべき由申し遣られしより事起りて争論甚しく、使度々に及べり。七人の諸將、此事只に止むべきや。石田を討亡しても必ず所存を遂ぐべし。との趣を石田聞きて、上杉景勝に、如何すべきと問ふ。上杉も案じ煩ひしに、佐竹義宣、日頃三成に親しかりけるが、是を聞きて伏見より大坂に赴き、三成が許に到りて、別に存する旨も無し。たゞ徳川殿に告げて、和平の事を頼むべき外、謀有るべからず。とて三千許の兵を以つて三成を伴ひ伏見に赴きければ、諸將、事を延したるゆる石田を逃しつるよ。とて既に追駈けんせられ

しに、早伏見に著きたらん、と聞えしかば、齒を噛みてさて止みけり。東照宮聞し召し、太閤在世の時は、寵を頼みて權威に誇り無禮にも有りぬべし。今に當りて諸將の申さるゝ處其の理無きに非ざれども、罪の疑しきは軽くすとかや聞きぬ。とて強ひて宥め給ひけれども、尙止むべからざれば、さらば今世治りたるに弓箭を起さんとや。力無き事共なり。我石田と心を合せ諸將と軍すべし。と仰せられしにより、止む事を得ずして怒を押し、さて止りぬ。其後今世の亂となる可きも又穩かならん事も、一己の所存に有るべし。暫く佐和山に退きて、公の萬事に相たづさはる事無くて然るべからん。子息隼人正の事は、我能く家を全うせん事を計るべし。と三成に仰せられしかば、忝なき由謝して、佐和山に歸るべきや否や景勝に相計りしかば、景勝、我會津に歸りて上らずば、内府催促有らん。其時侮りたる體を顯はして罵る程ならば、必ず軍を出さるべし。行がかりに容易く打破られんや。固く支へて戦はん其の間に、大坂に討つて出でて、素より心を合する諸將を集め旗を揚げられよ。是に過ぎたる謀有るべしと、覺えず。と計られしかば、三成佐和山に赴くにぞさだめける。三成が士大將、島左近昌仲三成に勧めけるは、秀家、秀詮も兩端を持するにや、覺束無く候。佐和山の軍兵を計るに、一戦を決するに不足候まじ。一千餘をとめて佐和山を守らせ、蒲生備中、舞兵庫、高野越中

と某各二千の兵を率ゐて風上より火を掛け、所々を焰となして攻め懸かる程ならば、内府拒ぎ兼ねて引退かれん處を、追詰めく軍せば争か打洩すべき。萬に一つも志を遂げざるならば、潔く御腹召れ候へ。空しく佐和山に退きなば後悔するとも益あらじ。居ながら可惜圖を外さん事口惜しく候、と言ひけれども、三成は景勝と相策りしゆる。昌仲が謀畧を納れずして止みぬ。三成既に佐和山に赴くに及んで、七人の大將猶憤深かりしかば、道に俟ちて討取可し、と言ひ振らす。東照宮聞し召し、今は打ち捨て置ばや、如何すべき、と本多正信を召して仰せあり。正信熟々思慮して、今日日本を取つて徳川家に獻する者は石田にてこそ候へ。其の故は、三成奸曲ある故人々惡みて候へども、又三成に與する者も多く、容易く打亡し難し。故に言を禮儀に託し、手を徳川家に借りて止さばやと存する人々候へば、三成今ほろびて後悉く平均に歸せんや。諸將外には殿を敬すと雖も、内には隙を伺ふ人も候はん。故太閤の恩を得たる豪雄秀頼に背くに忍びず。三成を憎むの心を移して殿に懐き申すべし。三成有らば殿を敬し重んぜん事愈厚かるべし。三成久しく人の下に屈むべき者に候はねば、頓て弓箭を取るべき事掌の中に有り。三成敵とするに足らんや。其時三成に打勝ち給ひなば、殿自然に勢を得させ給ひて、誰か靡き従はで候べき。日本三分の二は殿に歸服すべく候。只三成に御心を附

けられ、暫く彼を立て置かれ候こそ然る可からめ、と申しけるを聞し召し入れられて、三成が旅程心許なし、とて結城秀康卿をもて送らせ給ひけり。

○東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立たせ給へる事

東照宮景勝を征伐に關東へ向はせ給ふ時、江州水口に御泊あり。その明の朝長束大藏大輔、御膳を奉るべき、と申して御約束有りしに、夜四つ頃俄に水口を打出させ給ふ。御輿を昇く者出合はざりけるに、渡邊忠右衛門守綱草鞋脚掛にて御輿の片々を昇きけるを、誰ぞ、と仰せられしかば、渡邊忠右衛門にて候、と申すを聞し召し、何とて斯く不意に打出づるを知りたるぞ、と御尋有りければ、若年の時より御傍に仕へ奉り候身の、これ程の事を仕るまじく候や。情なき御詞なり、とぞ申しける。忠右衛門宵より斯く有らんと推計りて、御輿の椽を枕にして臥居たりけるとかや。其夜土山に著かせ給ひて、翌日水口へは、昨夜時を取違へて早く立ち候ひける、と仰せ遣されけり。

○東照宮花房助兵衛に起請文を書けと仰せられし事

東照宮景勝征伐の御時小山にて、石田兵を西國に起せる告を聞き召し、前には景勝が勇將なるあり。西國は皆敵なり、と人々驚きたりしに、花房助兵衛職之を召して、汝は近年佐竹が許に有りて義宣が心は能く知りたらん。斯る亂に二心有りて軍をいだし、我が歸る道をや塞ぐべき。又義宣謀叛の志有るまじとならば、起請文を書きてわれに見せよ、と仰せられしに、花房承り、義宣は極めて信の厚き人に候へば、別の子細候ふまじ。只人心の反覆は、父子の間も計の難き事に候。起請文は御許されを蒙るべし、と申す。東照宮、助兵衛は浮田が家の長臣と聞きたりしに、器量の小さき男よ、とて大息吐かせ給ふ。花房斯くと後に傳へ聞き、我起請文を書くならば、佐竹二心あらじと軍兵の疑を散せん爲の仰なりしに、察せずして起請文を書かざりけるこそ口惜しけれ。假令義宣軍を出したりとも、我何の罪の有るべき、と深く悔みけるとぞ。

○下野國小山にて上杉入庵議論の事

景勝を征伐せさせ給ふ時、七月二十四日、東照宮下野國小山に御著陣ありける處に、其日伏見よの石田三成佐和山を出でて大坂に至り、諸大名と相謀り、亂を起すの旨告げ奉る。則ち先陣

の諸大名諸將を召され、東條法印、津田小平太、本多中務大輔、井伊兵部少輔を以て、今度三成兵を擧ぐる間、定めて妻子達を悉く押籠むべし。心中の難義察せられぬ。且豊臣家の爲めに企つる旨申し振らせば、秀吉の恩を請けたる人々多ければ、疾く大坂に赴き妻子の形附け、又は三成に心を寄せられんも少も遺恨に非ず、と仰出されけり。皆疑惑や有りけん兎角の詞無かりけるに、上杉義春入道入庵、末席に有りしが進み出で、福島正則、加藤嘉明、黒田長政に向ひ、各思慮にも及ぶ可からず。人質を三成に出し置き、只今御味方申して其質を棄てば、妻子の恨世の誹も遁る可からず。秀頼公へ出し置きたる人質を三成横取にしたるなれば、三成と一戦に及ぶとも妻子の恨世の誹も有る可からず。人は兎もあれ我は先御手を引き討死を遂ぐべし。斯く申されければ、皆一同に御味方仕るべしと決定しぬ。其座に是程の事辨へざる人は無きに非ざるも素よりなれども、時に當りて義春の片言拔群に聞えけるとなり。

又一説に、一座未だ兎角を申さざる處に、福島正則、何とて石田に従ひて弓箭を取らんや。秀頼公に疎遠だに御座しませば、神明に誓ひて正則御味方たらん事勿論なり、と言はれし故、皆一決したりともいへり。  
入庵は上杉彌五郎とて、越後上條の城主、後民部少輔といひて景勝の姉婚なり。

義春は能登の畠山義則の弟なるを、五歳の時よの謙信貫ひ置かれて、上杉定實の養子とせられしなり。

謙信の先陣の大將にて武名世に高し。景勝新發田因幡守治長が謀叛を討ちて、新發田の城下に押つめらるゝ時、治長切つて出で、景勝の先陣を放生橋まで追崩し、景勝の旗本へ押懸る。此時義春、景勝の旗本の先に有りしが、日の丸の旗を取りて三十間許先へ押出し、手廻の士共折り敷かせ、鎗を作りて待ちかけた故、治長引退くを追討にしたる勇將なり。大坂冬陣に二條の御城御書院に諸大名出仕の時、東照宮入菴を召し、上杉家の武者押の事ども御尋ねあり。入菴詳に答へ奉るを聞き召し、上杉家の軍法素よの聞及びたる事ども深く感じ入りぬ、と仰有り。諸大名列坐の真中に、入菴小男なるが言語分明に、其次第誠に懸河の如くなれば、諸將何れも武功智謀の人々なれど、詞を出す者無く、深く感じ入りたる色なりけるとかや。

○渡邊惣左衛門野中市左衛門忍びて大坂に使用する事

同じ時國清公參議輝政朝臣の事 小山に御座しまし、大坂の北の方に誰か使すべき、とて、慶長五年七月二十四日長臣を召して、其姓名を書きて出せ、と仰せらる。各承りぬ、とて其明る朝書附けて出す

に、渡邊惣左衛門とぞ記したる。公も左の袖より出させ給ふに、同じく渡邊を記させ給へり。如何なる患難をも堪へて事能使すべき人なり、と人々思へる故なり。然らばとて渡邊を召て此旨を仰せられしに、此は大事の御使にて候、と辭し申す。衆議一決したる上は兎角の論に及ばざる、との仰を蒙り、さては今一人添へられ候へ、人は病と申す事も候へば、と申ければ、野中市左衛門を相副へらる。書二通を渡させ給ひて仰を承りけるが、程無く東西の戦有るべきに、大坂に赴く事快からぬ色の見えければ、公容易く關所を通り得じ。若し殺されたらば吾馬の前にて討死したりと思ふべし。謀りおほせて大坂の屋敷に到らば、今度の一番首取りたるにも勝るべし、との詞により、二人下人も召具せず、七月二十五日小山を出て、其比三河の吉田は公の領地なりしに、己が宿所へも立寄らず、笠を傾けて忍びて打過ぎ、尾州熱田に到れば、船著に大竹の虎落を結ひて守りたり。神職の大原左衛門大夫は渡邊が知れる好有りて、潜に立寄りたり。爰にて大夫が下人竹を傾け藁一把を括り附けて、七八町許先達て此を標に案内者として、伊勢の堺に行きて、夫より野も山も皆敵の中を忍び通れば、飯を乞ふべき様もなく、あら米を咬み關の地蔵に行き著きぬ。行會ふ人毎に怪み、あはれ關所にて殺されなん。能く心得られよ、と口々に云ふ。關の有様傳へ聞くに、中々通るべき様は思ひも寄らず。伊賀越にや掛るべき、淺間越にや

行くべき、と二人打談ひて、先伊勢の大神宮の祝上部左近が許に行きて宿を借らん、と立寄りければ、今何方より参り詣づる人の有るべき、とて取合はず。左近立出て、一宿の事はさて置きぬ。疾く出でよ。棒にて叩き出せ、と罵りけり。二人、憎き奴かな。正しく池田家の恩を請けたる身なるに、と怒れども詮方なく、空しく立ち出づる時、左近追ついで、何國の人ぞと問ふ。池田三左衛門尉が士なり、と答ふ。左近、然らば其處の川堤の下に乞食の棄てたる筵を冠りて待たれよ、と小聲にいへば、二人、さる様も有らん、とて言ひつる詞の如くしたり。夜に入りて左近來り、晝の乞食は何處に在る、と言ふを聞きて、爰に在り、といふ。扱密に相約して、左近が家の裏の戸口より内に入り、奥の一間に暫疲を休めたり。左近、今の時家に有る下人も打解く可きにあらねば、晝の頼母し氣無き事を申したるよ、とて急ぎ飯を認め出し、夫婦給仕をしたりけり。扱道の事を問ふに、淺間越は人の往來稀なれば、此頃は女、乞食をも殺し候。中々通り難かるべし。只一命を賭物にして伊賀越を通られ候へ、と言へば、然らばとて荷俵を負ひ做れたる綴に身を借し、御祓箱を笠に著け、刀をも左近が許に置き、いと見苦しき小脇差を求め出して指したりけり。斯くて曉に宮川を打渡り、關所近くなりて見れば通るべき様ぞ無き。聽て一封の書をば深田の中に深く秘し埋み、其日は行暮れて山に伏し、明る朝一通の書を紙捻にして、青草を取りて一二

三の印をし、笠の緒として一の關所に行き掛る。固めたる士共、斯る大亂に伊勢に詣づる者やある。それ打殺せ、と斬きけり。二人は騒かず、疾くより伊勢に詣でて此騒に及び、一夜の宿をも貸す可からずとの法令により、何方に泊るべき様も無く、進退谷りて候。大坂の妻子も心元なく、天照大神を頼に任せて歸り候ぞ、と謀りけり。然らばとて荷俵御祓箱脇差の鞘を打碎き、髪を解かせ帯袷草鞋までも改め見て、怪き事も無きよ、とて通しければ、夫より次の關所をも事故無く打過ぎて、大和の奈良に出て寺に入り、酒を求めて飲みたりけるに、住持の僧、看參らせよ、とて別に良き酒を出し、又薄茶をも出しければ、悦んで二人腰に著けたる錢を與ふるに、小僧多しとて請取らず。其時住持の僧の曰く、能くも謀りて爰迄御座したれ。たましく爰まで忍び來る人も候へど、皆關所にて殺され候。能く謀り給へ。故有る人と覺えたり、と語れば、二人心の中に打驚きたれども、伊勢に参りける物語して、天照大神に助られて無事に下向するにてこそ候へ。此より後も斯く有らんと氣支しくも候はず。と答ふ。僧熱々と聞きて是を信ぜず。然あらんには別の事も候まじ。關所を事故無く通られたらんには、朋友達に奈良の出家は見附けたるもの哉と語られよ、といふ。二人見知られじと打笑ひ出て行く。奈良と大坂との間に關所有り、何者ぞ、と咎めければ、又前の如く、伊勢に参りたる歸路に候、と言へば、然らば、とて改めたり。怪き事も無きに通

さばや、といふ所に、番の座上に有りける老人、物な言はせそ。是非を論ずるに及ばず斬つて捨てよ、と下知しけり。末座より、眞の參宮の者と見え候を斬つて棄てなば、神の祟と恐あり、と再三言ひしかば、二人危き所を遁れて大坂に行き著きたり。東國方の諸將の屋敷には虎落結び廻し、大坂の兵士門々を警固して内外の出入も絶えたれば、兼て知りたる材木の商家に行きて大根を買ひ、若や聲を聞知る、と打廻りて大根を賣る眞似しけり。久保田市大夫窓より見て、如何に渡邊に似たる人もある哉、と言ひて大根と一聲呼べば、渡邊、久保田が窓の下に行き、笠を取りて大根を差し出すうちに、宿を問へば云々なりと答へて、材木屋か許にぞ歸りける。野中に斯くと告げて悦び合へり。若原勘解山北の方に屬きて有りけるに、久保田斯くといへば、門を守る大坂の士に斷りて薪を荷ふ人夫三十五人を出し、其中一人を残して渡邊を其代とし、薪を荷ひて門を通る時、警固の士、此男は今朝出でたる者に非ず、と押留めたり。久しく煩ひて打臥居たるが、快くて今日出たる人夫なり、と言へ共更に聞入れず。勘解由立出でて様々にいひ斷り、通り得て北の方の前に參り、公の仰を細々と述べて笠の緒を解きて奉る。北の方は簾を隔てて對面あり、其後渡邊に祿増し與へ給ひ、賞せらるゝ事大方ならず。誠に危き所を遁れ得たる事共なり。

○上杉景勝會津表手配の事

東照宮會津を伐せ給ふ時、景勝は謙信の影堂の前にて、諸將士卒に一心有るまじきとの起請文を書かせ、妻子をば會津に籠め燒草を積置けり。敵寄せ來らば逆寄にせん、とて所々に地形を均し、白川に安田上總介を先陣として島津下々齋を二陣とし、景勝は只一騎背灸の嶺に登り、樵夫を案内者にして山中を通り、白川の境の明神に出で兵を分ち、不意に討て懸るべき道を計られしに、上杉方にも此を知らず、況し寄手は露も知らず。東照宮の先陣大田原に陣して白川より一日の行程なり。景勝大に悦びて、其勢八千を率る長沼に陣し、寄手白川に攻入らん時、山中の間路より思ひも寄らぬ後に廻り、東照宮の御旗本に切つて入り、萬死一生の軍せんと謀られしに、石田兵を起すの由聞えて、東照宮宇都の小山より引返させ給ひけり。

○東照宮小山の途中にて竹を伐らせられし事

會津征伐の御時、東照宮下野小山の途中にて、左右の近習の人々に向はせ給ひ、我塵を忘れたり。彼なる小竹林に串になるべき細竹を切れ、と仰せられしかば、則切つて奉るをたたう番を取り

出させ給ひ、鞍の前輪に押當てて切裂きて括り附け、二つ三つ打振り給ひ、景勝などを打破らんに、是にて事足りぬ、と宣へり。實に塵を忘れ給ふには非ず。上杉家は父より已來武勇の家に、景勝驍將なれば人々危む心有る故、景勝を侮らせ給ふの機を示させ給ひしにや。然る處に西國、中國一同に御敵なり、と言ひ振らし、小山より引返させ給ふ時、又彼竹林を過ぎさせ給ふに、上方を攻破るには此塵も無用の物なり、とて棄て給ひけり。前後に大敵有れば人々愈々疑ひ懼るゝ故に、猶々恐るゝに足ざるの機を示し給ふなるべし。

○伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事

同じ時、伊達左京大夫政宗は急ぎ本國に歸り、搦手より攻入るべき由仰を奉り、大坂を打ちち夜を日につぎて馳下る。白川より白石まで皆仇の中なれば道塞りぬ。常陸國を廻りて岩城相馬に差懸つて國に歸らんとするに、相馬また累代の仇なり。然るに政宗僅に五十騎ばかり引具して常州を經、岩城と相馬の境に到り、先相馬が許に使をたて、此度徳川殿上杉を征伐し給ふにより、政宗搦手より向ふべき由の仰を承りぬ。路既に塞り候ひし程に、やうく此地に馳著きぬ。あまりに早めて道を打ちし故疲れ候。願はくは城下に旅館を賜はらばや。馬の足休めて

明日國に歸り入らんと存ず、と言はせたり。相馬長門守義胤之を聞き、天晴運の盡きたる事ぞかし。さらぬだに伊達は相馬が年比の仇なり。ましてや味方討たん一方の大將承りたると言ふ者を、いでく今宵一夜討して、案内知らぬ奴原を一人も残らず討取つて年比の仇に報い、又今度の賞にも預らばや、とて頼て民家をしつらひて迎へ入れ、人々集めて夜討の評定したりけり。爰に水谷三郎兵衛といふ者遙の末座に候ひけるが進み出で、末座の異見恐入つて候へども、既に僉議の座に連りて候へば所存を残すべきに非ず。抑窮鳥懐に入る時は獵者もこれを殺さずとこそ申候へ。政宗程の大將年來の恨を捨てて君を頼みて來りしを、謀りて闇々と討たれん事勇者の本意に非ず。長き弓箭の瑕瑾ならずや。又彼が國境駒が峯に至らんに行程僅に二里、今日日未だ未の時に下らず。政宗が國に入らんとだに思はば日夕ならざるには至るべし。それに僅の勢にて止る事深き慮なからざらんや。只此度はよきに警固して國に返し、重ねて戰に臨まん日、勝敗を天運に任せらる可きにや、と申しければ、一座の人々此議に同じ、兵糧秣藁鹽魚に至るまで積み置き、篝を焼きて夜廻す。義胤が士共、政宗餘に靜り返りたる體こそ心憎けれ。いざ試みん、とて夜更て後馬二匹取り放ち、人々走り散りて以の外に騒ぎ罵る。政宗小童一人に燭持たせ、白き小袖を上打掛け、左の手に刀を提げて立出で、相馬殿の御人や候、と

いふ。是に候、とて行向へば、物音高く候。政宗が下人原狼藉候はんには、能く鎮めて給はり候へ、とて又内にぞ入りたりける。夜明くれ共立ちもやらず。巳の時ばかりに成りて、義胤の許に使用して一禮し、扱静めて馬を打つて行く。密に人を附けて窺はしむるに、彼の國の境駒が峯の彼方に、伊達家の軍兵雲霞の如く充ち満ちて出迎へぬ。斯くて關が原の事終りて、相馬既に上杉に心合せたれば亡ぶべきに極る。政宗訴へ申されしは、相馬は年比政宗が仇なり。石田、上杉に與したるが一定ならんには、政宗彼が爲に討たるべし。然るに君の仰奉りて馳下る由を聞き、深き恨を忘れ新恩を施しき。彼が逆謀に非ざるの證に候はずや。又累代の弓箭の家永く斷えん事不使の至なり、と度々歎き申されしかば、後には本領を相馬に賜はりけるとぞ聞えし。

○竹村半兵衛田中長胤を押止むる事

關ヶ原の時、三河岡崎の田中兵部大輔吉政の子民部少輔長胤は、父大坂方に同心したりと言ふを聞きて、宇都の小山を忍び出で、居城岡崎に歸りけるを國清公聞し召し、竹村半兵衛を召され、吾吉田に歸る頃まで民部を牛窪に押へ留め置け、と仰せらる。竹村、是は安き事には候はね共、いかさま計ひて見候はん、とて道に出迎へ、鐵炮の者を百姓の家に隠し置き、具に支度を言

含め、其身は山の峽に出でて待つ所に長胤來れり。竹村、池田三左衛門尉密に申せと申す事の候て是に出候、と言へば、長胤馬廻の人を遠ざけられしかば、竹村靜に歩み寄り、別の子細も候はず。押留め申せと三左衛門下知したるよ、と云ひも敢ず、左の手にて長胤を袴と捕へ、一尺許の脇差を抽いて長胤に押當てたり。從者共、こは口惜や、と怒れ共詮方なし。竹村詞をかけ、近く寄られなば吾は殺さるゝとら民部殿をば刺貫き申さん。唯押留め申すのみにて別の事は候はず、と呼はりける處に、百姓の家に伏せ置きたる鐵炮の者共駈集り、鐵炮を長胤に差し當て、竹村を討たんとらば忽ち民部殿を打落し申さん、と聲々に呼はりけり。長胤力無く竹村に従ひて百姓の家に入れば、押止めて四方を堅く守りけり。斯くて東照宮聞し召し、父既に味方に成れる上は許し候へ、と仰せられしかば、長胤則ち出でられけり。後に公に遭ひて、手荒き有様にも會はせ給ひけるよ、と言はれしとかや。

○岐阜城攻の事

岐阜の城を攻むる軍評定の時、國清公、大手に向はん、と仰せられけるに、福島左衛門大夫正則聞いて、吾こそ今度の先陣なれ、とぞ争はれける。井伊、本多、公に向ひて、内府の御縁者なり。



譲られ候へ、と有りければ、正則は尾越より西美濃に入りて大手に向ひ、公は河田の渡より寄せさせ給ふに定りけり。稍有りて正則、搦手へ吾こそ向ひ候はめ。尾越は城に遠く、河田は遠淺なれば馬にて涉り易かるべし。大手に向ふも城を早く攻破らん爲なれば、只搦手より寄せんものを、と申されけるを、井伊、本多、正則の領地なれば大手より船筏を以て渡されん事安かるべし。三左衛門尉は搦手より向はれ候へ。既に定めつる上は今更變へんも然る可からず、と申されしかば、正則、扱は吾敵地に入りて相圖の煙を上げて後、池田殿川を渡されよ、と言ひて大手に向はれけり。頃は慶長五年八月二十一日の未だ宵暗きに、公は清洲を打出で、河田の邊に陣して、明くれば二十二日の曉に川涯に押寄せ給へば、伊藤五郎右衛門と云ふもさへり、岐阜より津田藤三郎を始として新加納村に押出して陣したり。味方の軍兵勇み進んで早川に打入らん氣色なり。公馬を乗廻し、今暫て、と下知せさせ給ふ。此時具福右衛門、時は能かりぬ、と申せば、公、然るべし、と宣ひける。詞の下より逆巻く波に馬をさつと打入れ、一三間歩ませ、鞍坪に落り下り、具に川水を汲うて打うつし、如何にも高く吹き出す寶螺の聲諸陣に響き渡る。是より一同に打入りて一騎も残らず向の岸に打上る。

須賀平四郎物見たりしが乗歸り、敵の多少は蘆原に隔たりて見え分かず候へ共、一三千里に

はよも過ぎ候はじ。軍は味方の勝と申す。子細は如何に、と問ひ給へば、須賀敵の後陣續かず、後に兵を伏すべき地十町許が程に有る可しとも存せず。遙に駆け來りなば人馬の息切れて能く勝なるべし、と申しも果てぬに、伊木清兵衛忠次、味方の旗は前に傾き陣の色黒みたり。敵は後に仰ぎて人の面白く候。必定味方の勝なり、と勇みけり。公、味方の陣を整へよ。濫に進むな、と下知有りけれ共、などためらふべき、吾劣らじと進み行く事三町許。公、今は時こそよけれ、と腰に挿したる鷹を取りて一振振らせ給へば、一同に嘯と打つて懸り、忽ち敵を撃破られけり。八田太郎兵衛久次、北ぐる敵を追駆けたる所に、朱色の物具著て紫の母衣懸けたる武者一人、息吐ぎ居たるを見て馳寄りたり。彼の武者は歩立なるがひたと折り敷く。八田馬より飛下り鎗を合せ、遂に討取つたり。是前田半左衛門なり。半左衛門は德善院の従子にて、岐阜中納言秀信の近習の臣なり。打見たる處は勝れて溫柔にして、常によく論にたへたる人なりしかば、人々、男子に非ず、と笑ひしに、此日の軍に、敗軍の中に武市忠左衛門と二人踏止り、引立てたる味方を勵まし、續けや續け、と呼はりて、目を驚す働して武市も討死す。日比前田を侮りたる者共、今日前田に及ぶべき様も無し、と言へり。八田は父を彌三右衛門正久といふ士大將なり。太郎兵衛今年十八歳、父の陣代たり。

前田を討取りたりしに、從者柏原李右衛門、尾關彌五左衛門駆け來りて、八田を馬に乗せて歸る。八田後に人に語りて曰く、我年若し、血氣弱きに非ず。敵一人討取りてさのみ疲るべきに非ざりしに、其時援け來る敵有らば、小兒にも生捕とせらるべし。死生の間に立ちて敵を討ち得て、却て勇氣の衰へたる故なるべし、とぞ語りける。慶長六年祿二千石を増與へられ、同八年公參議に任じ、參内の時久次太刀の役たり。從五位下に叙し丹後守と稱す。後豐後守と改む。前田利長、久次が武名を聞き、一萬石にて招かれしかども行かざりしとなり。

福島正則は大手の惣大將にて、素より他人に超えられじと思はれしに、公既に新加納にて敵を撃破りたりと聞き、怒り悶へて二十三日の朝先陣して攻寄せたり。池田家の軍兵朝日口より攻入りけるを、惣構の土手の上より見て人の功名を嫉み、道全と言へる法師武者に下知して町口に火を懸けさせたれば、搦手の軍兵烟に咽びて進み得ず。公是を御覽じて、こは心得ぬ仕業なり。火の消ゆるを待つべきにや、とて桑木畑を廻り、長良川より後の水の手に押寄せ給ふ。池田吉左衛門は、公此城に御座せし時水門に居て、案内は能く知りつ、水拔の有りけるより入りて水門を打破り旗を差上げ、池田三左衛門尉本城の一番乗と呼はりけり。正則の道を妨けられし

は、却て池田家の幸なり、と後に人いへり。東照宮御書を賜り、敵軍川を隔てて相支ふる所に輒く打破り、岐阜を攻落されし功名賞するに詞なし、とぞ書せ給ひける。

○森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事

岐阜中納言の士飯沼小勘平と云ひつるは、四天王と世に言はれし剛の者なり。新加納の軍破れし時、小き堤を前にして居たりしに、池田家の士大將森寺政右衛門忠勝が弟四郎兵衛長勝、飯沼を目がけ、一間餘ありし溝を馬に聲かけてひらりと飛ばせたり。飯沼が左右より鐵炮を打懸けけれども、甲冑に中つて其身は手負はず競ひかゝりしが、敵は多勢つゞくとや思ひけん、飯沼が者共散りぐゝになりぬ。森寺馬を乗り寄すれば、飯沼、名乗れ、と詞をかくる。池田が内の森寺四郎兵衛、と名乗る。飯沼、池田が内の森寺ならばいざ、と言ふより刀を抽いて森寺が馬より下りんとする處を、右の膝口を切つたりしかば、森寺左の方に飛下り、馬を隔てて切り合ひけるが、又左の腕に疵を蒙り、今は叶はじと思ひて白刃を握り、掌をくらわれながら無手と組み、飯沼を抑へ透さず刺通せしが、疲れ果て、首を取りたれども既に人に奪はるべかりしに、從者久兵衛といふ者走り來り、近づくものを追つ拂ひ、馬に搔き乗せて興國公此時新祿と稱し申す十四五騎にて

控へ給ふ處に、參りて斯くと申す。又國清公の御前に參りて、飯沼を組んで討つて候、と申しけり。飯沼が冑は小田原鉢、刀は行光の作、脇差は菊一文字なり。森寺が從者分捕して今森寺が許に有りと云へり。森寺が飯沼を討ち取りし事、關ヶ原記、其の餘の書にも、池田備中守として録せるは謬なり。

○南部越後母衣串をぬかざりし事

岐阜の城攻に、池田家の士南部越後門際に押詰めたるに、門の潛戸狭く、懸けたる母衣に支へて入り得ず。側より、母衣串を抜いて入るべし、と言へ共、否々假令入り得ずとも此母衣は脱くまじ、と呼はる。其中に門開きて馳入りたり。其武者振甚だ見事なりし、と其時の人言ひしとなん。

○兼松又四郎一柳の陣見切の事附兼松武功言上の事

岐阜の城に諸將押寄する時、一柳監物直盛の兵一騎先駈して、川に馬をさつと打入れけり。直盛に附けられける目附兼松又四郎正儀、九尺許の十文字の鎗を提げ、鹿毛なる馬に乗りて堤の上控へて是を見、天晴剛の者よ。老武者か若武者か、と問はるゝに、直盛聞きて、安井新九郎と

て今年二十二三にや成り候はん、と答ふ。正儀、我ならば功名を遂ぐべきに、若武者なれば惜き事よ、と言ひも終らぬに、安井向の岸に待ちかけた敵の中に駈け入りて討死しけり。直盛馬を蹴立てて進む氣色に見えしを、正儀押し止め、早く候、とて稍有りて、こゝぞと云ふ儘に馬を川に打入れられしかば、直盛も劣らじと渡されけり。敵敗北しけるに、正儀閻魔堂の此方にて追駈くる味方を押し止むる。直盛、など追討たざるや、と問はるゝに、敵はや陣を整へたり。引返へさは一定味方崩るべし。百々木造は岐阜の古兵なれば、踏止らんと思へども、地の理無くて退くならん。今見られよ返す可し、と言ひも終らぬに、竹林に據りて鐵炮を打懸る。正儀少しも騒がず、相向ふ事暫く有りて、城兵遂に引退く。

一説に、津田藤三郎光房は秀信の士なり。敗軍の中に引返し、朱の物具し赤母衣かけ、鹿の角の立物打つたる冑を著、月毛の馬に乗りて引色に成りたる味方を勵し、散々に戦ひけるを兼松見て、よき敵なり、と目をかけて追駈けたるに、其間十間許になりける時、津田光房引返して城に引取りけり。黄母衣懸けたる武者取つて返し、正儀とわたり合ひ戦ひしが、相引に引くといへり。此時にや、又前に川を渡したる時の事なりや詳かならず。正儀、敵是にて一面目有るに似たり。此より返さじ、と言はれけり。直盛岐阜の町口にて將机に倚

りて鎗を横たへ、敵出ば一鎗せん、と正儀の方を見やられしに、正儀、吾敵は出で候はじ、と云ひしに果して軍は無かりけり。亂鎮りて後直盛正儀を襲し、今度の軍毎事仰の中りて候。中にも安井が討死を察せられしは如何なる子細に候、と問はれしに、正儀聞きて、死生有命と申し候ひて如何で人力の及ぶべき。然りながら川を涉りて先陣する時に、馬の上け場二三十間も置きて敵の前を横様に乗り、後に味方續く時大音に名乗るべき事に候。左も無くて唯一騎岸に打上り、敵の真中に駈け入りて討死すれば、敵に利を得さするにて候。時に依り地に依り進退の仕業變り候物なりと、能老兵に承り置きて候程に、六十に及びて猶存命へ武功をも遂げ候、とぞ語られける。

台徳院殿御上京の時、熱田にて國士御目見に出づる時、兼松も同じく出でらる。土井大炊頭利勝を以て今川義元合戦の時功名、利根山にて信長より足半を賜りし事、猪子内匠、兼松と年はいづれ増たるや、と御尋あり。御覺には猪子を年増と思召すとの事なり。兼松承り、信長、義元合戦の時朋輩七八人一所に打立ち候が、馬を乗り損ひ、いな事と見候へば鎧を逆に掛けたり。心中に不吉と思ひ、其日勇み無く進み兼候へば、功名したる者手をふさがず見苦しとて、朋輩共取つたる首の血を甲に塗り、草摺に泥を塗り、朋輩の中に交り信長の前に出づれば、義元の首を信長見て悦はるゝ時に参り合ひたりき。利根山にて前夜觸有り

しに怠りて、信長はや打立たれける故、草鞋履く間も無く跳にて駈附け、首取つたれば信長見て、太刀の鞘に附けられたる足半を賜り候。別にさせる事も無し、と申し上ぐる。利勝猪子と年は如何に、と問はるゝに、それは御見違なり、内匠は我より二つ若し、と答ふ。利勝御覺を御自慢の事なれば、若しと申されなばよかりなん、といふ。兼松、否々詐は申されず、と答へたる儘に利勝申されしかば、大に御感有つて時服に黄金を添へて賜はりけるとぞ。

○山田多門兵衛幼年功名の事

河田の渡を越して岐阜に向ふ前、堀尾信濃守忠氏川岸に陣せらる。池田家先陣の士大將伊木清兵衛心次使を以て、池田が者共川に打入りて後渡され候へ。今度の先陣は池田が承りたるにて候、とぞ申しける。忠氏聞きて、暫く馬より下立ちて吾下知を待ち候へ、と言はれければ、山田多門兵衛十五歳、軍は今日を始なり。馬より下りんとするを、従者、馬より下る事や候。鞍の前輪に取付き俯に成りて待たせられよ、と教へしかば、山田しかしたりけるに、稍有りて忠氏の旗本に寶螺の聲せしかば、我先いと馬に乗りしに、山田真先に川に打入りて渡しけるが、遂に一番首を取つたるは従者の物慣れたる故なりけり。後に吉晴此日の勝軍の告を聞き首帳を見られしに、首一

つ山田多門兵衛、と録したるを讀みも終らず、近き頃まで竹馬に乗りたる童の早功名しけるよ。父存命へ居たらんには加何ばかり悦ばんに、とて涙を流されけり。又梯權八が功名の無きは如何に。討死せんは知らず、功名は二三人の中を外る者には非ず、と怪まれしに、聽て飛脚來りて、權八一番に續いて首を取りけれども、手負ひて帳に記す事遅かりし、と告げたりければ、吉晴、吾見る所よも違はじと思ひつるよ、と云はれたり。

常山紀談 卷之十三

○米田助右衛門見積の事

岐阜の城攻に、細川忠興七曲口へ向はれしに、米田助右衛門、あれ見給へ。彼の門矢倉は容易く打破るべし、と申す。忠興、子細は如何に。米田、今朝より矢倉より搏出す箭玉次第に少くなり候は、本丸に引入りたる故に候、と申せば、聽て軍を進めて七曲口を攻破られけり。

○後藤又兵衛決斷の事

岐阜を攻破る時、黒田 田中、藤堂等の諸將は犬山を押へたりしに、犬山の城明退きける故、岐阜を指して打向ふ所に、大垣より石田、島津二萬餘打出でて押來る。頃しも八月雨の後、合渡川水嵩増りたり。諸將香が島の札の辻に控へて、各將机に據りて、川をや渡す。待ちてや戦ふ、と評定して決せず。高虎銀の天衝の立物打つたる冑を著、黒母衣掛けたる武者は黒田家の士大將後藤又兵衛なるべし。存する旨を聞かばや、とて扇を揚げて招かれしかば、後藤母衣を揺り駈けて來

り跪く。高虎、如何に此川を渡るべきか。待ちて利有る可きかと、先の程よりいへども決せず、言はれしかば、後藤打笑ひ、評定も時により候。今日岐阜の城攻に後れまた爰にて一戦無くば、内府に御面目は候まじ。川を討死の場と極められん事然るべし。然らずば男子にては候まじ、と大言すれば、諸將尤なりとて川を渡されけり。

○台渡川合戦黒田三左衛門毛附の功名の事

合渡を渡す時、長政の士大将黒田三左衛門可成、川の東より遙に敵を見渡して、長政の側に馬を乗り寄せ、朱の枝釣の指物指して、黒き馬の遅けなるに乗りたるは能き敵なり。必ず討取るべし、といふ。長政、勝敗は運命による事なり。など容易う敵を討つべき。さな言ひそ、と言はれしに、可成耳にも聞入れず、川に馬を打入れ向うの岸に馳せ上り、遂に彼の武者を切つて落し、首に指物を添へて得たりけり。石田が物ぬし村山利介といへる剛の者なり。可成が此功を、昔より毛附の功名とて類少き譽なり。

○神谷小介先登の事

合渡の軍に長政の内神谷小介先駆して川を涉り、待ちかけたる敵の中に喚いて駈入りければ、鎗玉に揚げられ既に危かりし時、長政の軍兵進み懸りて敵を追つ立てければ、小介流るゝ血に朱に染みたるを戸板に載せて、長政の前に来る。小介、今日我と先を争はん者長政ならでは有る可からずと思ひ、長政を屹と見て、小介より先立ちて鎗を合せ候者一人も候はず、と申しければ、長政、汝ならで誰か先駆すべき。手負ひ候者の氣を張りて物言ふは悪しき、と言はれけり。小介後に有馬の温泉に浴して創癒えけり。

○藤堂玄蕃赤坂町を鎮むる事

合渡にて東國方の軍北ぐるを追ひて赤坂まで進み行く時、高虎の士大将藤堂玄蕃、赤坂の町口に駈入り大音あけ、百姓商人を悩ますに非ず。悪逆の輩を討ち平け、誹謗を致さん爲なり。皆ちつとも騒ぐ可からず、と觸れ通り、其後小家一つ二つ引壊ち、東の方の町端にて相圖の煙を立てけり。高虎大に悦んで、傳へ聞きし古の王者の軍を學べる玄蕃哉、とて其日著られし唐冠の冑を脱ぎて與へられぬ。

○寺澤廣高加藤嘉明 度量の事

關ヶ原にて東照宮未だ岡山に御著陣無き已前、諸大將地の利に據りて面々陣取りたりしに、或夜諸陣俄に騒ぎけり。寺澤志摩守廣高臥ながら徐に、我既に聞きたり、と言ひて厭かいて寢られけり。廣高士六人歩の者六人を物聞とす。三番に互に代りて途を異にして、少の事も必ず告げ來る。今夜告げ來らざれば夜討に非ざる事を元より知られたる故なり。其明くる夜忍びて加藤嘉明の陣所を通る者あり。捕へて、忍びか火附か切つて捨てよ、といふに、嘉明、其士は主君の爲に死を顧みず。吾陣所の備忘らず、彼如何にして吾を窺ふべき。殺すと殺さざると勝敗に關らず、と追放たれけり。

○春日九兵衛見積の事

丸毛兵庫が弟春日九兵衛、大坂より大垣に到り、諸將の内に一心有る人の候。陣所の有様必定味方敗北すべし。陣替せられよ、と三成に勸むれども是を用ひず。果して敗れたり。後に前田利長春日を招かれしか共、江戸駿府を憚り仕ふる事能はず。京極若狹守高次は東照

宮の婚なる故に、強ひて乞ひ招き寄せ、祿千石に過ぐべからず、との仰によりて京極家に仕へけり。後岡飛驒といふ。岡越中は飛驒が子なり。

○村上彦右衛門先見の事

關ヶ原の時、大坂の舟手村上彦右衛門、菅平右衛門、九月十二日の夜桑名に著き、十三日諸將に對面し、安國寺に向ひて、味方陣所の體見及びたる所心得られず、といふ。安國寺、吾もさこそ思ひ候へ。され共關東者一人に上方勢十人の積りなれば、四五日持ち堪へなんには必ず勝つべし、と答ふ。村上、味方山どりの有様高くとりあがり疎なり。戦ふべき色に非ずとて下り會ふ事も叶ひ難からん。東勢は物師故陣所厚く見ゆ。一兩日を過ぎずして合戦有らん。覺束無し、と言ひて歸りしが、果して計りし如し。村上は、敗軍の時阿濃津より九鬼大隅守嘉隆の許に行き、夫より上方に上りけり。

○土方三九郎武功の事

關ヶ原の軍の前、有馬豊氏、大垣と川を隔てて陣せしに、豊氏の兵土方三九郎を始め十騎川を

涉り、敵少し出でたるを追立し、大垣の矢倉の下に馬を立てて聲々に名乗りければ、弓鐵炮を搏懸けたり。三九郎左の肩先に手負ひぬ。續く味方も無ければ、十騎の者共、靜々と馬を引返したるを、東照宮も聞き召しけるとなり。

賞功薄かりしかば土方、岡本彌一右衛門、渡邊佐左衛門、上田丹波と言合せ出奔しけり。土方が養母を百姓の許に隠し置きたるを、豊氏番人を附けて守らしめられしかば、三九郎歸りて、養母を人質に召捕られし上は、兎角の事を申すに及ばず腹を切らん、といふ。豊氏尤なり、とて許されて元の如く仕へ居しかども、同じく立去りしもの思ふ所も有り、とて養母を打具して又出奔し、加藤清正に五百石にて仕ふ。豊比かまはれしかば落ぶれて年月を経る所に、外舅中内惣左衛門といふ者、豊後に有りて招き寄せたり。中内は長曾我部が長臣なり。大坂の事起るに及びて、長曾我部と共に大坂に籠りしかば、三九郎も打具したり。元親旗を二つに分け、國澤掃部と土方に預く。三九郎此時六左衛門と言ひけり。五月六日に矢尾の堤森有る所に東に向きて押しける時、朝霧深く物色定かならず。森の南より紺地に白もち附けたる旗を押し立て敵寄來る。堤狭ければ旗を引下して立つる處に、敵は藤堂の先陣にて旗を堤の下に押下すを見て、敵は逃ぐる、と言ひて馬よの飛び下り突いて懸るを、元

親大音あけ、鎧を横に持ち引附けて突崩し候へ。一人も猥に懸る可からず、と下知し、十分敵を引受け一同に嘯と起立ちて、切崩し追討にしける所に、渡邊勤兵衛押來る。六左衛門散々に戦ひ鎧も歪みけるが、後には敵の鎧を奪ひて働きけり。斯る所に元親先陣敗北し、掃部も討たれ。大坂の諸陣皆破れしかば、三里許が間援くべき味方も無く、元親も久寶寺を指して引退きけるに、勤兵衛慕ひ來り、鐵炮を搏懸くる。三里が間に旗竿過半打折りけれども、旗帛は一つも捨てず、皆絞らせて城に持たせ歸りけり。落城の日元親僅に士十二人打具し、八幡の方に落ちたりしを、六左衛門も従ひしに、元親、汝等疾く是より思ひ思ひに落ちよ、と言へ共、何地までも附添ひ申さん、と言ひけるを、元親、志はさる事なれども、遂に我爲によからざる間落ちよ、と言ひしかば、中内一人留りて其餘は落行きけり。六左衛門、其子孫今池田の家に仕へてあり。

○小栗又市谷々見廻の事

東照宮岡山に御著陣の夜、小栗又市露に濡れて御前に參り、谷々心元なく存じ打廻り見て候に、上方者何の手段も無く候、と申すを聞召し、井伊兵部に下知して、宵より菅澤次郎右衛門を山陰



谷々見て歸れとて遣りつる、と仰有りけり。

○秀家夜討せんといはれし事

關ヶ原の時、東照宮岡山に御著陣を秀家見て、敵の陣所あさまに見ゆ。夜討せん、と言はれしに、三成、斯る大軍にて夜軍は利無きものなり、とて止みけるを、秀家後まで悔まれけるとかや。

○株瀬川合戦の事

關ヶ原の軍の前、九月十四日浮田、石田軍を出し、一色村に兵を伏せ株瀬川を渡り、中村式部少輔の軍兵の陣所に押寄せて鐵炮を打懸くる。中村が士竹田五郎兵衛先驅して打て出づる。有馬豊氏も陣所相並びたれば兵を出す。竹田は討死し、伏兵に射しらまされ敗北しけるに、中村が士大將野一色頼母白母衣かけ栗毛なる馬に乗り、崩るゝ味方を勵し返合せたるに、藪内匠引て通りけるを詞をかけ、何とて返し合せざるや、といへば、藪振返り、手負ひたり、とて川を渉す。頼母は鐵炮に中り馬より落ちたりしを、其組の士松村清介頼母がわたかみを取りて引すり退きけれども、敵追來れば頼母が上帯を切り、刀脇差ばかり取りて退きけり。其後富村といふ者頼母

が首を取る。

其前の日野一色、藪二人、國清公、福島正則等の諸將の前へ出で、岐阜攻落され功名致す可き様も無く候。扱此よりは中村が者共軍始仕らん、と言ひけるに、軍始は我々共が業なり。いはれざる事を言ふ、とて不興なりし。其中に正則目を見出し怒られける故、左様にも仰せられざるがよく候。大夫殿の押附羽織の後紋を見申したる事も有りき。式部事太閤より以來先陣を勤め、何れの軍にも功名遂げ候。兎角仕りて御目に掛けん、と言ひしとぞ。浮田、石田等が軍兵競ひ懸れば、矢野助之丞金の團扇の指物、林文大夫は赤母衣懸けて、一騎面も振らず駈け向ひ、進む敵を追崩したる有様目を驚かせり。赤坂の御本陣より御覽せられ、井伊直政、本多忠勝に御下知有りて人數を纏めらる。此を株瀬川の競合といへり。

○稻次右近功名の事

株瀬川にて三成が兵勝に乗りて進む處に、有馬の士稻次右近、烏毛の半月の指物にて殿しけるを、横山監物といふ三成が士馳寄つて引組んだり。稻次が従者助け來り、横山を引伏せたる處に、敵走り寄つて稻次が胄を取り引仰ぐ。稻次振り放さんとする時、従者又助け來りて敵を一

太刀斬る。斯る處に堀尾忠氏の母衣の者馳せ寄つて誤つて、稻次が手の者を切伏せて首を取る。稻次は終に横山が首を取り又敵をも打取り、馬を靜に歩せて東照宮の御陣所に参りけるを御覽じて、先に此陣の傍より敵に向ひたる武者功名したるは誰が者ぞ、と仰せ有りしに、有馬法印側に有りて、豊氏が手の者にて候、と申す。稻次首帳を記す處に行きて、從者を味方討に打たせて候。其首帳をば消して給はり候へ、と云ふ聲を聞し召し、何事ぞ、と問はせ給へば子細を申す。斯る大軍の亂合ひたる戦ひには、味方討も有る物よ、とぞ仰せられける。

其後稻次には六千石祿増與へられ、八十五歳島原の城攻に討死せしとかや。堀尾の母衣の士共味方を討ちたる者と同じく、母衣預り居らん事口惜し、と申せしかば、忠氏の父吉晴是を聞き、彼士をば母衣を取返して、別に弓の足輕二十人預けられけり。

○淺香庄次郎働の事

淺香庄次郎馬介は奥州葛西大崎の木村に仕へ、其頃關白秀次の不破萬作、蒲生氏郷の名越山三郎と共に天下に聞えたる美少年なり。木村家滅びて石田に仕へたりしが、咎を蒙らる事の有りしに、株瀬川にて鮑の皮の羽織著、銀の大釘の立物打つたる胄にて、中村が母衣の士梅田大藏

が首を取り、大垣に馳せ歸り、三成隅矢倉に居たる下に行いて、勘氣を許され候へ、と呼はる。三成聞きて、能こそ軍したれ、と言ひければ、又馳行きて三成が軍兵を引揚げたり。後に加賀利常に招かれて奉公しけり。

○林半介殿の事

林半介は美濃安八郡青柳村の百姓なりしが、石田に仕へて祿七百石使番たり。石田兵を起すの時、佐和山の城中に軍兵を集め、書院にて饗禮を行ひ、吾今斯る一大事を思ひ立ち、運を天命に任すと雖も、汝達が武勇を偏に頼む處なり。其旨を存して軍忠有らば、賞は功に依るべし。其約束の印とて酒盃を座の中央に出しける時、林遙の末席より進み出でて、軍に臨みて一番は知らず、二番は斯く申す半介と知し召されよ、とて其盃を取りて飲みたりければ、皆、憎き振舞よ、と言ひしが、株瀬川にて一番首を取りぬ。斯て兩軍物別する時、稻葉助之丞は金の切裂の指物にて秀家の軍士の殿し、林は白じなひの指物指して乗り退り殿しけるが、猶も本多忠勝が兵に向つて只一騎輪をかくる有様、敵有りとも思はざる體なりしを、東照宮御覽じて、天晴不敵者哉。武功に志す者は彼の武者の草摺を戴け、と仰せ有りけり。

○伊藤金左衛門三宅平大夫後殿の事

關ヶ原の軍の前日、伊藤長門守至孝が大藪の陣所に、石田使を以て、疾く大垣に入りて一所に  
 なられよ、と言ひ送りしかば、至孝大垣に行く所を、徳永左馬助壽昌、市橋下總守正舒慕ひける  
 に、伊藤金左衛門紫母衣に蛇の目の紋附きたるを懸け、三宅平大夫と唯二騎殿しけるが、十四  
 五騎許追駈けたり。伊藤大音上げ、大事の殿よ勝負なせそ、と言ひて引退く。三宅は馬より下立  
 ちしが、関の聲に駈きて、馬は口に附きたる下人を踏倒して駈け出しぬ。歩立に成りて靜に退く  
 に日は暮れたり。斯る處に正舒の兵、市橋勘左衛門追つて詞をかけ、鎗を合せんとせしに、三  
 宅とは昔より親深かりければ、互に其聲を聞き知りて、夜中誰も知らざる處に行會ひぬること  
 幸なれ。爰にて戦ふとも何の功名か有るべき。いざ、とて立別れけり。至孝大垣に入りて、三宅  
 は討たれしならん、と惜む處に、歸り來りて云々なりといへば、至孝悦んで、鹿毛なる馬によき  
 鞍置きて與へ、三成は黄金三十兩引出物にぞしたりける。伊藤は十六七の頃より功名ありて、赤  
 き手拭を鉢巻としければ、敵例の赤手拭又出でたり、と世に言はれし者なり。或時軍破れて川岸  
 を只一人引退く時、餓疲れけるに、敵一人腰なる兵糧を遣ふを見、走り寄つて斬伏せ、腹を裂いて

飯を取出し、川水に浸し洗ひて打喰ひ、陣所に歸りけるとなり。

○毛屋主水物見の事

關ヶ原にて諸將物見を出されしに、馳歸りて、敵或は八九萬又は十萬許も候らん、といふ所に、  
 黒田長政の物見毛屋主水、敵は一萬によも過ぎ候はじ、といふ。聽て東照宮の御陣所に參りて申  
 せば、敵は大軍なる處汝が詞こそ怪しけれ、と仰せられしかば、主水承り、凡敵は七八萬もや候ら  
 ん。されども、兩軍の勝負を計りて、己が身に懸けて軍に志し候兵は幾程も候はず。石田、小西等  
 が頼切つたる者共、彼是合せて一萬許に過ぎ候まじ。一陣敗北せば餘は戦はずして敗れ候可し、と  
 申しけるに、東照宮、主水は敵の内通を知りたるにや。軍の情に能く通じけるよ、と感させ給  
 ひ、御手づから饅頭を賜はりけるを、踏壇に有りて此を食して出でける後、彼は本姓は何と言  
 ふにや、と仰せ有りければ、側より、毛屋と申す、と申せば、否とよ。北國の毛屋といふ所にて功  
 名せし故、毛屋と姓を更へつると聞きたり、と仰せ有りけり。主水元山崎源太左衛門に仕へ、後  
 黒田家に奉公し、朝鮮にて平安道の小川を渡せし時、味方は濫に渡せるにや、と云ひけるに、主  
 水、味方は川上を渡し候。子細は馬の沓草鞋の流れ候故に察し候、といへば、長政、尤なり、とて渡

されしとかや。主水後千五百石の祿なり。此時は旗奉行たりしが、合渡の軍に如何にしたりけん、長政の旗しどろに成りし時、主水馬より飛下り、鎗の罅を以て旗竿を俯け、汝等もし旗を仰げなば、忽ち切つて捨てん、と下知して、岩巻と言へる旗さしの強力の者に取分て固く戒め、主水もえい／＼と聲をかけて押立てたり。又關ヶ原にて長政の旗卑き所に立てたりければ、長政、あとの高き所に立てよ、と下知せらる。主水、進んだる旗を退くる程ならば、敵に勢を附け候ひな、とて遂に旗を立直さず。長政後に此二事を賞せられけり。

○關ヶ原合戦島左近討死の事

黒田長政はもとよりの石田と不和なりしかば、關ヶ原合戦の前選り立てたる士十五騎、明日の軍に拔懸す可からず。吾が馬の廻に引添ひて軍せよ。石田と手を取組みて討取らんと用意せられけり。石田が陣の前に柵あり。島左近昌仲左の手に鎗を取り、右の手に塵を執り、百人許引具し、柵より出て過半柵際に残し、靜に進み懸りけり。長政馬より下り立ち、鎗を提けて睨み合ひたる處に、菅六之介政利少し高き處に上り、五十挺の鐵炮を透間なく横合に打たせけるに、眞先に進んだる敵手負ひて、左近も死生は知らず倒れしかば、ひるむ所を、長政嘯と押懸り切り崩

されけり。左近は肩に掛けて其處を退きぬ。菅後に六千石の祿賜はり和泉と稱す。長政筑前の國領せられて後、關ヶ原にて撰に合ひ、長政の側に有りて軍しける人々集りて閑話しけるが、石田が士大將、鬼神をも欺くと言ひける島左近が其日の有様、今も猶目の前に在るが如し、と云ひけるに、其物具の事を言ひ出して更に定かならず。人々口々に言ひしかば、其軍の頭石田が方に有りける士の筑前に仕へけるを、三人呼寄せて問ひければ、左近、胃の立物、朱の天衝、溜塗桶、革胴の甲に、木綿淺黄の羽織を著たりし、と語る。人々驚きて、近々と語寄せたるに見覚えざる事、能狼狽たるよ。口惜き事なり、と云ひしに、其中に取わき剛の者の云ひけるは、見違へたるは我ながらも理哉。左近が引具したるは皆優りたる物師にて、七十許は柵際に残し三十許左右に立てて、塵を取り下知したる有様、熟々と案するに、三十人許の兵共鎗の合ふべき際にさつと引取り、味方ばらくと追駈けんを近く引寄せ、七十餘人の者共えい／＼と聲を揚げて突きかゝり、手の下に追崩して残りなく討ち捕らんとの手段なりき。今思ひ出れば誠に身の毛も立ちて汗の出づるなり。斯酒汲交して、心安き朋友と物語するとは大に異らずや。人々大方目の魂は失ひたるにぞ。若其時横合より鐵炮にて打ちすくめずば、我等が首は左近が鎗に指し貫れなん。見違へたりとて必ずしも恥に非ず、とぞ言ひける。

○飯尾甚大夫一騎先驅の事附成合平左衛門が事

關ヶ原にて飯尾甚大夫安信只一騎、黒田長政の陣の前に馬を乗寄せ、大音上げて名乗りけるを、いざ討取らんと早雄の若者共進みけるを、野口左介、益田與介見て、只一騎先駆したる志、昔をいはば一の谷の木戸口にて、熊谷、平山が終夜名乗りつる體なり。平家の士出合はざりしも、志の者を助けんとするべし。容易う討つべけれども、夫は情なし、後を見よ、と鎗を横たへて制しければ、飯尾度々名乗つて馬を引返しけり。飯尾は豊後國富來の垣見和泉守が兄利右衛門が子にて、五千石の祿にて秀家に奉公し居たり。

株瀬川の軍に、中村の士成合平左衛門利忠、牛の舌の指物にて眞先駆けたるを、飯尾討取りけり。其後黒田家に仕へ千石の祿鐵炮預りしに、長政成合が首取つたりと聞き、彼成合は世に隠なき勇士なり。其首を取りたれば、とて三千石増與へられしとぞ。成合元中村家の士の少きに困りしかば、秀吉下知して、日本國中の士主人に不足ある者共、或は主人構有る面皆兩家に行きて祿を得べし。主人咎めなば秀吉相手をたらんと札に書きて立てられしかば、

成合は和泉小木川の一番鎗を合せ、秀吉の感狀賜りけれども、一氏僅に三百石與へられし故、木村が許に行きて三萬石、佐沼の城代たりしが、木村が家亡びて後復中村が家に歸りて仕へ、株瀬川にて討死したりけり。

○蒲生備中父子戦死の事

蒲生備中眞令は石田が内にて聞ゆる勇將なり。關ヶ原の前軍評定の時、眞令、明日は偏に必死と思ひ定めらるべし、と云ふ。島左近、明日先陣に進んで忠義を胃として打勝つべき物を、と言へば、眞令又、昔よりの利を得るは天の祐に依ると雖も、軍の正しきと法令の厳しきとの二つにあり。能く内に省み給へ。偏に必死と思ひ定められなば勝の半なるべし。左非ずば復御目見致さじ、とて座を立ちけり。眞令元より敗軍を覺りて、三成に必死を究めし詞を出したり。斯て關ヶ原にて只一騎三成が陣に乗りきて何事にかいひけるに、三成打領く。眞令駈歸り、競ひ懸る敵に向ひて散々に戦ひけるが、織田長益に合ひて、昔は蒲生の家にて横山喜内、今は石田が内にて蒲生備中として人に知れたる者なり、といへば、長益、神妙に候。我に降參せよ、と言ひも終らぬに、こは何事ぞや、とて拜み打に斬つて打落す。長益の從者千賀文藏鎗を以て突通すを、其柄を握り

て引組んだるに、文藏が弟文吉刀を取り直し、眞令を刺して遂に打取りけり。眞令が子の大膳は戦ひ半に首一つ提けて父に見すれば、功名も何にせん、と言ふを聞き、又東に向ひて、押懸る敵に駈合せんとせしが、父討たれたりと聞き、

ましてしばし我ぞ涉りて三瀬川あさみ深みも君にしらせん

といふ歌を高らかに唱へ自害したり。大膳幼より戯を好まず。關ヶ原に出陣の時、母、我汝が富貴を頼はぬには非ざれ共、弓箭の家を生るゝ身は昔より名を重んずる習なり。凡物二つは兼難し。身を全うして名を忘れよとは言ふ可からず、と言ひしかば、父と共に死して母の戒に違はざりけり。

○大谷吉隆平塚爲廣最後合戦和歌贈答の事

越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆は、會津征伐に従はんとて兵を出さんとせしに、石田三成よりの榎原彦右衛門を便にて、強て佐和山の城に來られよ。密に評議すべき事有り、と云はせけるに、此は心得ずと思へども是非を論ぜず強ひければ、止事を得ずして佐和山に至る。三成悦んで、今度關東を討つべき謀を語りける。大谷驚きて、故太閤常に徳川殿の智勇の備りたるを崇敬御

座しましき。今徳川家を打亡さん事思ひも寄らず、と言ひければ、三成、我上杉景勝と計りて景勝旗を揚げられたり。其約を變じて景勝一人を攻殺せん事本意に非ず。運を天命に任するの外道なし。豊臣家の恩を厚く蒙りたる身なれば、秀頼公の御爲に斯く一大事を思ひ立ちたるぞかし。など豊臣家の恩を忘れられしや、と言へば、大谷、さらば力なし。命を秀頼公に奉りて、今度の軍に討死すべし。但し斯る一大事を思ひ立たれんには思慮すべき事二つ有り。申出して見ん、用ひらるゝや、と言へば、三成、如何で所存を防ぐべき、と悦びしかば、大谷が曰く、世の人石田殿をば無禮なりとて、末々に至りても快からず言合へり。江戸の内府は只今日本一の貴人なれども、卑賤の者に至るまで禮法あつて仁愛深し。人の懐き従ふ事大方ならず、是一つ。次に大事は智勇の二つならでは遂げ得難し。石田殿は智有りて勇足ざるかと存じ候。今度毛利、浮田も皆假に同意したる人々なり。必ずしも頼みとす可きに非ず。水口の長束と計り、内府關東に歸路の時、石部邊にて旅宿の時夜討して火を掛け、十死一生の軍せば勝利疑無きに、可惜圖を外されぬ。内府關東に歸られけるは虎を千里の野に放つが如し。十全の勝を計られなば又圖を外して悔むとも益あらじ。此上は命を秀頼公に奉るの外他の道なし。士卒は皆平塚に下知せさせて候へば、其志許し難しと雖も、よも別の事は候はじ、とて伊益の驛に至り平塚に告ぐれば、平塚大に驚

き、三成志大なりと雖も大軍を率うべき將畧なし。然るに斯く與せられしは禍を招くと言ふべし。然れども既に許諾せられたれば如何とも爲べからず、とて三成が送り來りし使者には、心得候、とぞ答へける。吉隆教賀に歸りしに、關東勢岐阜を攻落しけると聞きて、敦賞を打出でて關ヶ原に到りしが、秀詮の裏切を元より悟りければ、僅に六百餘の陣を一手になし、關ヶ原に押し出し、鎗衾を作りて秀詮に向ふ。吉隆は目を病みて士卒は皆平塚に下知せさせ、練絹の小袖の上に村蝶を墨にて書きたる鏡直垂を著、四方取はなしたる竹輿に乗りたるが、秀詮裏切して討つて懸られしかば、大谷齒を噛み、秀詮の不義骨髓に徹せり。敵の旗本を目にかけて切つて入るべし、と下知しければ、木下山城守、大谷大學、戸田武藏守重政、平塚因幡守爲廣、今日を最後と思ひ定め、面も振らず切つて懸りしかば、秀詮の先陣立足も無く敗北す。され共藤堂高虎を始め、東國の軍押駈け進み來れば、秀詮の先陣盛返して討つてかゝる。されども死狂ひする鋒先に、秀詮の先陣又追立てられけり。爲廣敵數多討取り、其首を吉隆に送り、此首自ら討取候。冥途の苞に參らせ候。日比の約束只今討死し候ひなん、とて自害候て、人手にかゝらざれ、と言遣し、外に歌一首書添へたり。

名のために捨つる命は惜しからじつひにとまらぬ浮世と思へば

一説に、秀詮の土横田半介を討取り、其首を吉隆に送るともいへり。吉隆使に向ひて、武勇といひ和歌といひ感ずるに餘有り。早や自害して追附け再會すべし、と答へて、甥の祐玄といふ僧に返を書せて使に渡しけり。

契りあらば六の巻にしはし待ておくれ先だつ事はありとも  
斯くて平塚は戦ひ勞れて、畔に腰かけ息吐ぐ處に、小川土佐守祐忠が兵糧井太兵衛鎗を提げ歩み寄る。平塚立上り、我は平塚因幡守なり、とて散々に戦ひけるが、終に倒れながら十文字の鎗を投出し、汝が重寶にせよ、とて討たれけり。戸田重政も思ふ程切つて廻り討死したりければ、大谷が軍敗れて吉隆自害しけり。行年四十二歳とかや。岩佐五介首を羽織に包み、其邊の田の中に埋み、先手に向ひ討死しけるを、藤堂の士大將藤堂仁右衛門其首を取りて御旗本に奉りけるに、東照宮、五介は聞ゆる者なり。缺唇なるべし、と仰せ有りけるに、然有りしとぞ。

○瀧川内記功名の事

瀧川内記辰政は左近將監一益が末子なり。秀詮に仕へて、松尾山にて秀詮の軍敗北の時、勇み懸る敵を支へて従者に首五つ取いせ、秀詮に許へ持たせ遣り、其所を去らで吉隆が兵に鎗を合せ、

岸より下に敵を突落したれば、山田喜内其首を取る。敵猶競ひ懸りけるを、笹地兵庫と俱に散散に戦ひて首を取りたり。後池田の家に仕へて祿三千石、士大將たり。此軍の時二十四五許の年にや。

辰政其始織田上野介信包に仕へて、十六歳の時小田原の軍に、信包、織田常真に對面せんとて從者を遠ざけ、辰政只一騎を具して赴かれけるに、江川の丸より横筋かひに鐵炮を打かくる。辰政、信包の矢面に乗り塞りし故、母衣に鐵炮の玉三つ中る。信包大に感賞して脇差を與へらる。辰政此時七郎といひけり。池田家に仕へて丹波と稱し、又出雲と改む。

○本多正重の事

關ヶ原の戰九月十五日辰の刻過ぐる迄は、東照宮桃配に御旗を立てられつる所に、本多三彌正重來りて、今少し先へ御旗を進め給ひ然るべし。是は敵合遠し、と申すを聞し召し、口脇の黄なる男にていはれざる事を、と仰せければ、三彌御後の方に廻り、口脇は黄なるにもせよ、遠きは遠し、と獨語申しけり。

三彌は佐渡守正信の弟にて、若き頃武者修行して度々功名あり。長篠の後は瀧川一益の許

に有り。何の軍にや、諸浪人皆働有りしに、三彌手に合はざりしかば、一益、さしも譽高き人の今日の事は如何に、と云ふ。此答は明日こそ、とて其明の日首二つ取て、昨日の答是なり、といへり。甚だ風流を好み、物敷奇賤氣なる事無く、常に身に薰物をとめたり。前田家にも暫有り。慶長元年伏見にて東照宮に仕へ奉りけるが、以の外に直言する人なり。或時幸若八九郎を召され、高館の舞終りて後、武藏坊辨慶は世に優れたる者なり。今の世に無かるべし、と仰せ有りしに、三彌承りて、今の時辨慶は有るべけれども、判官に似たる主君の候まじ、と申せしとなり。大坂冬の陣の時台徳院殿に仕へ奉りけるに、東照宮、三彌は能く勘る者なり、と仰せられけるが、其後一萬石賜りけり。東照宮御前に召出され、如何に思慮したるや。人柄をたしなみて勘ざる由聞きたり、と仰せ有りければ、三彌、將軍様は仕へ奉りよく候。彼の如き主君に勘申すは狂者にこそ候へ、と申しけるを聞し召し、又持病起りたり、と笑はせ給ひけるとぞ。七十二歳、元和二年病死せられけり。

○梶左馬助御書を認むる事

同じ時祐筆梶左馬助、兼て御書の九月十五日の日附にて、今日巳の刻御勝利、と認め置きけり。



東照宮御感有つて、十五日と指したるは尤なり。巳の刻とは如何に。左馬助承り、敵は大軍なり。巳の刻を過ぎたらば御敗軍と存じたりき、と申しけり。

左馬助は上田善四郎が四男にて、祿四百石、後千石賜はりて御使番なり。

○田邊甚兵衛幼年功名の事

田中兵部大輔の士田邊甚兵衛、十四歳にて關ヶ原に出で、從者敵を突伏せ、田邊を馬より抱下して首を取せしとなり。幼少にて武功世に名高かりければ、黒田長政、田邊に逢ひて大に感賞し、田邊をとりかひたる從者を呼出し、其事を問はるゝに、馬より抱下したるに、刀を抽いて振ひければ恥しめて首を取りたり、と云ふ。長政、さては勇士なり。振はずに懸りたらば途方なき故と言ふべし。恥しめられて首を取りたるは、勉め勵ますによりて勇氣を致す所なり、とて彌褒められけり。

○辻小作中黒道隨が事

辻小作は福島正則に仕へしが、可兒才藏と親しみ深く、共に世に聞えたりし物なり。中黒道隨

は石田賓客の如く遇し置きけり。關ヶ原の軍敗れし時、中黒唯一騎落行く兵の中に踏止り、散々に戦ひけるを辻見て、いざ討ち取らばや、と言へば、可兒情無き事をも言ふもの哉。助ばや、と云ふ。辻、さては生捕とや。可兒に好まれて辭し難し、と言捨て馳行く處に、中黒馬を深田に打入れて、諸鎧を合せて更に動かす。辻詞をかけ、日頃の好に助けんするよ。早く取附け、とて鎗の樽をさし出す。中黒、斯る際に命助かりても何にかせん、とて已に自害すべく見えしかば、辻、何と謀可きや。神明にかけて偽らじ、といへば、取著きたるを辻主従引上げて陣所に歸る。可兒見て大に悦びけり。さて辻は物具脱ぎて裸になり、仰に打臥して、只今まで敵なりし中黒を物とも思はぬ有様に物語す。中黒、餘に侮りたるよ、と心中に怒りけれども、命を助けたりし恩を思ひてさて止ぬ、と後に中黒此事を語りて笑ひしとなり。中黒後井伊直孝招きて、祿二千石與へられけり。或説に、丹羽山城、谷出羽、篠野才藏、稻葉内匠、中黒道隨、渡邊勘兵衛、辻小作、兄弟の約束して武勇を勵み、天下七兄弟と云ひしといふ。

○島津義弘關ヶ原退口の事附大坂の商賈義氣の事

關ヶ原の軍敗れし時、島津義弘眞丸に成りて、福島刑部少輔正武の陣の前を切抜けんとい文字に

押通る。正武十六才、駈合せんとする處を、梶田又右衛門、死狂する敵に軍はせぬよ、とて追留めたり。東國勢押駈けしかば、義弘の従子中務大輔豊入、義弘の馬の側に乗寄せて囁く體なりしが、馳て大敵に駈合せ討死す。義弘今は是迄なりとて取て返されけるに、阿多長壽入道成淳、義弘の馬の前に打塞がり、大將は千騎が一騎に成候ても猶死せずして、謀をめぐらし候を道とこそすれ。疾、打破りて引退き給へ、といふ儘に馬の首を引直し、島津兵庫頭島後の合戦をするぞ、と呼はりて、散々に戦ひて討死しけり。成淳が義に勵まされ、踏止り支へ戦ひ討死する者多かりける。其暇に義弘又士卒を集め、列を整へ引退く時、松平忠吉、井伊直政刺すな、とて追駈けたり。義弘が兵ども種ヶ島の鐵炮を腰に挿したるを拔出し、ひたくと折敷きて打懸けたるに、忠吉、直政共に手負ひて、夫より物別したりけり。

一説に、本多忠勝追駈けたるが、馬を鐵炮にて搏たせ、馬より落つれば梶金平馳來りて、己が馬に忠勝を乗せし其間に、島津が軍隔たるといへり。又河上左京が従者柏田源藏が搏ちける鐵炮に、直政中るともいへり。又松田某といふ朝鮮陣の時連て歸りし小兒の成長したるを組にして有りけるが、鹿の角の立物の胃こそ兵部よ。打留めよ、と下知しければ、鐵炮を差向けたるに、直政肩尖刀を横たへて馬を乗り懸けられしに、彼兵松田某と名乗りて打ち

しに肩尖刀に中り、其玉腰骨にかすりて馬より落ちられけり。さて亂鎧りて後薩摩の許に直政を饗せられしに、直政松田を呼出し盃を指し、關ヶ原にて既に死すべかりし身の幸に存命へて、今日對面する事を得たり、といひて後、我片足をなやみぬ。斯る武功の人に少祿こそ不足に候へ。今日の遇饗に祿を増給はり候へ、と言はれけり。彼の物頭後に、直政の呼出されて對面に及びし時の迷惑なる、一生に覚え、といひけり。

義弘、近江の甲賀にかゝり、老翁一人案内者にして道しるべさせ、伊賀の山路を経て上野まで行き著かれたり。爰は筒井伊賀守定次の城なり。使を以て、島津義弘唯今打過ぎ候、と云ひ送りて行く處に、野武士四五百人が程山の中に待ちかけたり。義弘物の數ともせず打破り、二人生捕りて上野に立歸り、大手の柵の木に搦め附け、偕て夫より奈良に出で、彼の老翁には刀に差添へられし赤銅の筭を與へ、此を證に必ず薩摩に來れ。今度の勞に報せん、とて大坂に至り船に乗り、鹿兒島に歸られけり。

一説に、左近丞と云ふ姓薩摩に有り。是は慶長の頃大坂の商にて、年久しく薩摩の米を商ひける者なり。關ヶ原破れて後、義弘大坂に著かれしに、士一人先達つて彼の商家に行きしかば、彼商待ち侘びたる體にて、君は如何に御座まし候、と問ふ。いやとよ。討死有りしよ、と答へけり。

れば、商家涙を流し、年比厚恩を蒙りし事なれば、關ヶ原破れぬと聞くより、必ず爰に渡らせられんと相計りて、船を設けて待ち居たる甲斐も無く、口惜き事なり。せめて御供に参らんとて水中に飛入らんとせしを押留め、今の時なれば人心の計り難くて斯くは言ひしなり。實は一方打破りて爰に御座せしなり、と言へば、斯疑はれしは恨なれども、夫を云はんには時移るべしとて、船に乗らせられん様をこそ、と言ひも終らぬに、義弘來られしかば、酒樽を積み其間に隠し乗せ、其身も附添ひて直に薩摩に赴きし。其者の子の中、一人薩摩に仕へし其子孫なりといへり。

彼老翁薩摩に行かばやと思へども、道遠ければ空しく過ぎしに、程經て人に誘はれ、鹿兒島に行きて筭を出しければ、など疾く來らざりしぞ、とて種々變し、黄金五百枚與へ、誘ひし人にも黄金數多與へて、人を添へて送り歸されけり。

○東照宮勝関の儀を延べ給ひし事

關ヶ原の軍敗れしかば、金森法印、とく勝関の儀式行はれ候はばや、と申しけるを、東照宮、諸將の武功により斯く敵をば打破りたれども、諸將の妻子大坂に人質となりて敵の中に有り。此を事

故なく歸し與へざらん間は我心を安んぜず。勝関を争で行ふべき、と仰せられしを、聞く人愈感服しけるとぞ。

常山紀談 卷之十四

○細川忠興の北の方義死の事

細川忠興の北の方は明智光秀が女なり。父謀叛の時忠興に向ひて申されけるは、父ながら斯る企事能く成るべしとも思はれず。瀧川、柴田など申す人々多ければ必ず軍敗れ候べし。女の浅き智慧にも口惜くこそ存候へ。男の身ならんには鎧の袖に縋りても諫め申すべきを力なし。君もし與せさせ給ひなば、世の讒争でか免れさせ給はん、と涙に沈まれしかば、忠興、光秀に同心無かりけり。其後程經て秀吉伏見に有りて、諸大名の北の方を呼入れて饗されし事の有りしに、忠興の北の方斯と聞き、女の人なくて一間に入りて他人に見ゆる事やある。我も召されんとならば、とて懐に匕首を用意せられけり。此より秀吉の悪行は止みてけり。石田西國の諸將を談ひて兵を起す時、諸大名の北の方を大坂城中に入れんとするを、北の方聞きて、傳に附けられし河喜多石見、稻留伊賀、小笠原正齋を呼びて、吾此所を出でん事思ひも寄らず、城中に取籠められんは耻辱なり。よく斷を申候へ。猶聞入れられずば是を限と思ひ定むべし、と語られしかば、正

齋、殿東國に向はせ給ひし時、思ひかけざる事の有らんには、正齋計ひて武將の恥な晒しそと仰せ置かれ候ひき。敵奪ひ取らんとするならば、其時思召切らせ給へ、と申しけり。斯る處に、城中に入れよ、と使を以て言はせしかば、再三斷の旨を述べけれども聞入らず。七月十七日の未の刻ばかりに、大坂の軍兵五百餘り玉造口の屋敷を取巻きて、疾く城中に入り申されよ。さらずば亂入りて奪取らん、と呼はりけり。女房儕狼狽て泣悲めども、北の方は騒ぐ色も無く、斯く有らんとは兼て思ひ設けつる事ぞとよ。正齋介錯せよ。我生る世に見えざりし人々に、死しての後も見られんはよからじ、とて面に覆面打かけ括袴著て、刀を抜き胸に突き立てられしかば、正齋眉尖刀にて介錯し、其儘其處にて腹を切らんとせし處に、正齋が小姓走り來り、殿の北の方と同じ所に自害有らば、後の誹の候べき、と云ひければ、正齋、餘の情しさに忘れたるよ、とて障子の外に走り出で、家に火を懸け、石見と共に腹切つて炎の中に死したりけり。伊賀は光秀より附けられし身なれば、遁るべき道も無きに、人に紛れて落ち失せけり。

忠興後に探し出して誅せんとせられけるを、松平忠吉、伊賀は無雙の鐵炮の妙手なれば、助け置きて若者に教へさせん、と強ひて乞はれしかば、忠興力なくて止みけり。伊賀は世の交も無く髪を剃り一夢と言ひけり。百發百中の手練なりしかども、人多き中にては大きなる

物も中らざりしとぞ。

忠興の北の方形見とや思はれけん、手ずさみのやうに書き捨てて硯の中に入れられし歌に、

先だつはおなじ限りの命にもまさりて惜しき契とぞしれ

落出でたる女房の取傳へて世に残りけるとなん。北の方は兼て斯く有らんと思はれしかば、幽齋の妹年老て宮川殿と申せしと、忠隆の北の方長前利とに、吾は人質に取られんと世の物いひの候程に、落失せばやと存するなり。同じく伴ひ参らすべけれど、人多くては中々憂き目や見る事の候はん。疾く此隣の築地一重踰えて落ちさせ給へや、とて宮川殿は建仁寺忠隆の北の方と浮田秀家の北の方に忍び行きて、此禍を遁れたりとかや。誠に義烈のみに非ず、謀も由々しき人なり、と語り傳へて袖を濡さぬ人もなし。

○安養寺門齋三成を生捕らんとせし事

附姉川合戦の時門齋生捕られし事並遠藤喜右衛門討死の事

三成兵を起す時、大津の城に入りて京極高次に對面し、彌秀頼公の味方有る可し、とぞ申しける。高次の士に安養寺門齋と云ひし者、黒田伊豫に向ひ、今三成城中に入る事誠の天の與ふる

處なり。搦め取りて關東に奉らん、と云ふ。黒田聞きて、三成を生捕るとも、西國の諸將大軍にて攻圍むべし。争か防ぎ術の有る可き、とて聞入れず。門齋冷笑ひ、三成は譬へば亂の首なり。其餘は手足の如し。首を砕く程ならば、手足何の恐の候べき。假令押寄せ候とも固く守りて戦ふべし。軍せずして三成を生捕るならば、天下に名を揚げ勳功誰か並ぶべき。吾年老ぬれど三成を搦めん事は容易からん、とて今村掃部をも勧めしかども、争論に時移りて、三成城を出でにけり。門齋は元淺井長政に仕へ、姉川の軍に生捕れ、龍ヶ鼻の陣にて信長の前に引出す。信長の曰く、今日勝に乗りて小谷を打破らんと思ふは如何に。汝が命を助けなん。此勝敗如何なる可き、と問はるゝに、安養寺承り、長政が父下野守小谷に有りて、其兵三千許もや候ひなん。然るに疲れたる兵を以て輕々しく攻められ候はん事然る可からず、と申す。信長打領いて、今日取りたる首共出して、安養寺に見せて其姓名を問はるゝ中にも、竹中久作が取りたる首を見て、遠藤喜右衛門直繼と申す者にて候。如何なる有様に候ひし、と問ふ。

久作は元齋藤家の士信長に奉公しけり。姉川にて淺井の士遠藤喜右衛門直繼云ひけるは、信長晝は固く守り、夜々横山の城を攻む。信長の本陣龍ヶ鼻を一夜討せば勝利疑なし、といふ。長政是を用ひず。然らば斯る圖を外して淺井の家危き事朝夕にあり。軍敗れん時信長を討

たん者は吾なり、と言ひしが、言ひつる詞に違はず首を刀の鋒に貫き、大將の實檢に供へん、と云ひて、信長の旗本に來りけるを久作討取つたり。久作兼て、必ず遠藤を吾討取る可し、と人指したりけり。如何なる故ぞ、と問ふに、其子細二つ有り。我江州にて遠藤と相知り、能く見知りたり、是一つ。彼は聞ゆる剛の者にて、力あくまで優れたり。常に進むに先だちて退くに後る、是二つ、と言ひしが、果して直繼が首を得たり。

竹中聞いて、首一つ提げ、殿は何處に座ますぞ、と云ひて近き進み來りしまゝ、敵の紛れ入りて、殿を切り奉るならんと思ひ、引組んで討取りし、と語りければ、夕部大依山にて若し軍破れ候ならば、必ず生きて歸らじ。信長を一太刀恨み申さん、と遠藤が言ひつるが、果して其詞の如くなりきといふ。

遠藤は浅井家に名有る剛の者なり。信長江州佐和山にて始めて長政に對面あり。公方昭の歸京の次に、佐々木承禎を攻打つべき事を議し、長政も力を合す可き由の約を定め、岐阜に歸らるゝとて江州柏原に宿せらる。浅井縫殿、中島助九郎、遠藤喜右衛門、三人馳走の爲柏原に行きしが、遠藤早馬にて小谷に歸り、信長を見るに武勇猛にして謀逞しき人なり。浅井家を覆すべき事疑ひなし。今日決斷せられ候へ。臣信長を刺殺し申すべし。其勢

に乗りて美濃に攻入り候へかし、と云ふ。長政聞きて、一度約して變せん事本意に非ず、とて聞かざれば、直繼再び柏原に赴き、信長を襲し、信長無事に岐阜に歸られたり。直繼常に是を悔みける故、姉川にて獨進んで信長を討たんとしけり。

其次に出せる首を見て、是は安養寺が弟にて彦六甚八と申す者にて候。死なば一所と契りしに、先立ちつる事こそ口惜しけれ、とて、首を刎ねられよ、とて其後は物も言はず。斯る所に秀吉其比は藤吉郎と云ひしが、栗毛の馬の汗かきたるに諸鎧を合せ、白沫嚙せて馳來り、いざ小谷へ押寄せ攻破る可き、と言ひしに、信長 否とよ。輕々しき軍は危し、とて許されず。秀吉、後悔有らんものを、急ぎ寄せ給へ、と強ふれ共、信長聞入れずしてさて止みけり。安養寺は、只首を刎ねられ候へ、と言ひけれども、吾に奉公せよ、とて様々宥め申されけれども降參せず。遂に許されて小谷に歸りけり。安養寺に謀られて信長軍を返されしかば、浅井三年經て小谷の城落ちたり。其後安養寺、浅井と京極と一族なりし故高次に仕へけり。若き時三郎左衛門とぞ申しける。

○大津城合戦京極家の士戦功の事附赤尾伊豆が事

高次は關東に素より心を寄せられしを、大坂より朽木河内守元綱を使にて、秀頼公の外戚たれ

ども江戸大納言殿にも縁有れば、人の疑を散ぜん爲に幼息熊若丸を人質に出され候へとなり。高次、軽々しく敵の色をも立て難し、とて止事を得ず熊若丸を出して北國に軍を出されけるが、岐阜の城落ちたる由を聞きて、北國に向ひたる人々大垣を指して引返されしかば、高次北の庄より直に海津にかかり、九月二日の夜半に大津に歸り、立花宗茂、筑紫廣門、粟津に陣せしを夜討にせんと謀られしに、黒田伊豫同心せずして止みぬ。さらばとて關寺の門を閉ぢ城下の兵糧を取入れ、専ら防禦の支度せられけり。宗茂、廣門、石部より引返して勢多に陣取り、輝元の陣代毛利元康等は三井寺に陣し、久留米秀包、南條中務を始として三萬七千餘四方より押寄せたり。中にも宗茂の軍兵は激しう攻めつめて、死人をふみ越えて乗入らんとす。防兼ねて京口の旗を絞りければ、多賀出雲守眞先駆けて堀を打破り、三の丸に関を作りかけてひたくと押し入りけり。山田大炊、赤尾伊豆、足輕頭には井口左京、大橋肥後、安養寺門齋、使番山田三右衛門、横山久内、田中茂兵衛、茨川口を固めたるに、京口より敵亂入りしかば、二の丸指して引退く。高次使を以て、何とて三の丸を捨てて早く二の丸へ引取るや。仕寄を附けられなば、防ぎ難かるべし。早く敵を追出せ、と下知せられしかば、門を開いて切つて出る。山田大炊十文字の鎧の罅を片手に取つて胃の上にて振廻し、参るくと呼はり懸けて、一番に鎧を合せ敵二人突伏

せたり。此を山田大炊が茨川口の鎧と世に稱しけり。赤尾は猩々緋の羽織を着て長身の鎧にて數人突伏せ、山田三右衛門も散々に戦ひけるが討死せり。二の丸に引取る時、山田と赤尾と代る代る六度まで返し突拂ひたる殿の振舞、目を驚しけり。二の丸の門際にて、赤尾、山田已下踏止りける時、唯少齋門をたて關貫をさす。赤尾ちつともひるまず、長身の鎧を傍に置き、敵の方へ足を投出し草鞋の紐を結び直す。其武者振を敵見て少しためらふ時、少齋門を開けば中に入る事を得たり。赤尾、棄殺さんとしたるよ、といひしに、少齋、敵追絶りて二の丸に攻入らんとする故にこそ門をさしてけれ。各を助けん爲に城の危きを忘るべきや、といひければ、さばかりの伊豆も答ふるに詞なかりけり。黒田次郎兵衛、尼子宮内、安養寺長門、三田村安右衛門、今村掃部、赤尾久助、中井民部、小豆掃部、油井周防等は京口を防ぎけるが、三の丸へ攻入り、敵と戦うて討死少からず。銚子五郎兵衛は始め關白秀次に奉公せしに、飽まで酒を好きけり。或時朋輩に語りけるは、殿下の側に立置かれし白熊、色白く丈長し。あはれ胃の上に亂しかけて軍の先駆せん物を、といひしを秀次聞きて銚子を呼びて、是を肴に酒を呑め、とて彼白熊を與へられしかば、銚子、誠に有難く存候。戯れに申せし詞知召されて候やらん。若し此の後軍の有らん時先に申せし詞を如何にせん、といひけるが、今日栗色のしほ草に金の筋附けたる羽織を着、彼の

白熊の雪の如くなるを胃の上に亂しかけ、十文字の鎗を横たへ、尾關甚右衛門と共に亂れ入る。敵五六人突伏せて胃の鏝を傾け、一足も引くまじいぞ、と呼はり討死したりけり。事ふる君は異れども、賜ひたる白熊にて、敵味方の目を驚す討死をぞ遂けたりける。尾關は元柴田勝家に仕へしが、後高次北國より歸られし時、尾關を近づけ夜酒を酌みて密に囁かれけるは、吾石田に與するに非ず。歸りて大津の城を守らんと思ふなり。敵の眞中に小勢を以て軍せん事尤難き事なり。汝が智勇を頼む、と語られしに、尾關涙を流し、人々いくらも候中に、何と思召されて斯仰せ候ぞや。此上は二つなし、と答へければ、高次、汝討死すべきや。我爲に命を捨てんと思ふ者多けれど、謀を同じくする者稀にこそあれ。汝偏に討死とのみ思へるは吾志に非ず、といはれしかば、尾關、斯く身に餘り候御詞を承りては、骨を刻まれ候ほどの堪へ難き事ありとも、此恩に報じ奉らん、といひしが、此時銚子と俱に戦死せり。後高次城を出でられける時、赤尾と山田と高次の輿の左右に供しけるを見て、寄手の軍兵指をさし、彼の大膽者よ、と云ひ合へり。

一説に、伊豆茨川口の敵を追拂はんとて出でける時、跡をば弟の久助、内田太郎左衛門、多賀孫左衛門等守りけるを、寄手きびしく攻むる。久助手負ひて、吾は本丸に引退かん、といふ。内田聞きも敢ず、昔熊谷が子の直家薄手ならば討死せよ。痛手ならば自害せよといひし事、

弓箭取る身の詞なり。爰を逃けんとは口惜しき事よ。大剛の伊豆が弟に汝が如き人の有りけるこそ怪しけれ、と罵りけり。内田は銀の馬櫛を胃の立物にしけるに、銀の馬櫛よと褒めける程の物師なり。敵今村掃部が持口を破りて亂れ入りしかば、伊豆ふり返り見て、三の丸は取られし、とて引返す。人々、敵既に攻入りて入るべき方なし。京洲の丸より入らばや、といへども伊豆少もひるまず。初出でたる所より入りなんこそ由々しかるべけれ、とて鎗を提けて敵に向ふ。伊豆に従ふ者四十五人、下部は皆逃散りて、伊豆が若黨一人、平野藤兵衛と云ふ足輕一人残り留れり。伊豆群立つたる敵を物ともせず、蜘蛛十文字に追立て、散々に戦ひけるに、敵尙烈しく進み來りしかば、尾關甚右衛門、銚子五郎兵衛二人土橋の上にて返し合せ、大音あけて、存する子細ありて討死するよ。寄つて首を取れ、とて面もふらず切死にぞしたりける。其隙に赤尾そこをつと行過ぎて城際に至る。門の外の柵に簀戸有り。赤尾簀戸を締めよ、といへば、平野靜に簀戸を締めたり。門を開けよ、といひしかば、少齋法師武者にて門を固めて有りしが矢倉に上り、味方とは知りたれど敵附入りにすべし。人は軽く城は重し。爰こそ死すべき處なれ。華かに討死せられよ。是より見物せん、といふ。赤尾石に倚りかゝりて息を吐き、九尺許なる鎗を下に置きて脚胼の紐を結び直す。敵簀戸を破り



て押寄する處を、八十餘人の兵ども爰を限りと面も振らず突きかゝる。赤尾靜に緒を締終りてつと立上り、赤尾伊豆とは知らずや、と名乗りて、亂れ入る敵を念なく突退け追出す。少齋矢倉より鐵炮を厳しく打出させれば、立花の勢も餘に手いたう防がれて引退く。斯くて少齋跪いて鎗の穂先を門の潛戸に當てて、一人づつ靜に入れてけり。斯くするは無禮に候へども門を守る法なり、といふ。皆入終りて伊豆と平野と二人門外に殿して残りけるが、平野は赤尾に、先づ入れよ、といふ。赤尾は平野に、汝先入れよ、とて終に赤尾後れて入りけると云へり。

赤尾伊豆は美作が子なり、信長に滅されて、

信長江州小谷の城を攻む。淺井長政勢盡きて既に自害せんとする時、不破河内を以て、縁者の好降參あらば疎意あらじ、と云はせらるゝに、長政降參すべき志に非ざるを、近習の士共、よも別の子細も候まじ。城を出て運を開かれ候へ、といふ。さらば父下野守も共に疎意無くば降參せん、とて城を出づるを、信長見て、長政何の面目有りて今更の降參ぞと高聲に呼はせられしかば、長政忿りて赤尾美作が宅に入りて自殺せり。淺井石見、赤尾美作、いざ切死せん、とて駈入りけるを、多兵押隔て生捕りて信長の前に出す。信長、汝等長政を勧め朝

倉に與して吾を敵となす。なれる果を見よ、と罵らるゝに、淺井居直り、事新しき事を承り候もの哉。義景を別事なく立置かんとの誓文、其血も未だ乾かざるに越前に軍を出し、是によりて長政義の當る處にて義景に與したり。今日城を出でよ。疎意有らじ、と偽りたる詞を押しはかり、只自害と一筋に決したりしに、若天運によりて家を立つるならば、信長を斯の如く搦めんと思ひしに斯く成りたり。義を知らず恥を知らざるは信長こそ人面獸心なれ、といへば、信長彌怒りて、汝詞にも似ず、生捕れたるは如何に、と罵らるゝに、年老ぬれば力に及ばず。昔より士の生捕となる事恥に非ず。武勇を以て敵を討ち得ず。偽りたばかりて人の國を亡すこそ恥なれ。見られよ、必ず下人に首を切らるべし、と罵り返せば、信長杖を以て打たれしに、石見打笑ひ、搦めたる者に斯るはからひ、天晴良き大將の禮儀かな。如何程も打てや犬坊、と罵りけるが、石見も美作も終に殺されけり。

伊豆幼かりしが僧と成りて多賀に匿れ居しに、十二歳の時多賀明神の鳥居の邊にて遊びける處を、いづれの家の士にや十二人打連て通りしに行當る。士怒つて、小僧め無禮なり、とて拳にて頭を打つ。伊豆飛び懸り、其士の刀を抽いて只一打に切りはなし、つと走りぬけて赤尾に匿れ居たりしが、後京極に仕へけり。

○十時傳右衛門山田三右衛門死骸返の事

立花宗茂使を城中に立てて、今日味方討死の中に十時傳右衛門と申す者あり。取り別きて不便に存するなり。骸を返し給はり候へ、とて物具の色を書きて云ひ送られしかば、聽て返しぬ。又城中よりも、山田三右衛門が首を返し給はれ、と望まれしかば、胃を添へて送られけり。此を大津の死骸返とて、勇士死後の譽としたり。

○高次大津の城を出でられし事

高次大津の城を守りて固かりければ、高野の木食上人を以て和平を執行ふ。高次更に同心無かりしに、さしもの長臣黒田伊豫、寄手に心を通じければ、力なく和平して城を出で、京都大佛の養源院に立寄り、それより高野に赴く。關ヶ原記に三井寺に立寄るといへるは謬なり。三成亡びて後、東照宮高次を召しけるに、今度諸將皆大功有りし人々なるに、吾城一つ守り遂げざりし身の立ちまじらん事口惜し、とて出でられず。又使を以て御物語有りたき事あり。尙出られずば我行かん。年老たる身を勞せられんよりは若役に、と仰出されしかば、高次辭し難くて出られけり。東照宮、此度城を攻

めける敵兵大垣に到る程ならば、關ヶ原の軍危かるべきに、九州の大軍を數日隔てられし故、我軍の援となりし事、大津城中の軍兵残りなく關ヶ原に來りしよりも遙に優れり。敵より乞ひたる和平なれば恥に非ず、と仰せらる。大津にての事なれば近江にて四十萬石賜ふべし、となりしに、高次聞きて、斯く賞せさせ給はば、關ヶ原にて大功の人には百萬石を賜はるべきか、思も寄らず、と固辭申されけり。

一説、關ヶ原の軍敗れて、東照宮大津の城に入らせ給ふ。山岡道阿彌供奉しけるが、京極宰相よく持堪へ候に、今少の事にて本意を遂げず、と申しければ、御答なく奥平が長篠にて武田を防ぎしに、戸障子に鐵炮の玉の痕鹿の子をゆひたるが如く、土も落ち板も脱けたるを、筵を張り疊を立て持堪へたり、とぞ仰せける。又高次の使者多賀孫左衛門大坂に参りけるに、御前に召して京口の旗を早く絞りし故、敵攻入りたる、と聞召す由仰せ有りしかば、口惜く存候由いひて涙を流しけり。さて井伊、本多に向ひ、下部の申す木履に雪の附きたる如くなる御出馬に、破行燈の如き城に高次なればこそ數日敵をば支へ候へ、と言ひければ、戯れながら理なり、とぞ答へられしといへり。

○立花家足輕鐵炮の用意附細川家口藥入吉田大藏猿頭の事

立花宗茂大津の城攻に足輕に繩襪かけさせ、其繩目に玉藥の早合を挾ませて、箭を交ふよりも早く鐵炮を搏たせられけり。

又細川家の鐵炮は、口藥入を革にて今世の鼻紙帛の如く造りて用ふ。事の急なる時指にてひねり入れて利あり。又加賀の吉田大藏とて世に聞えし手練の射手あり。常に矢を取りて俄に出づる時、十筋も持ちたき事の有るに、腰に差せば走るに落つるとて、革にて角袋造りて緒を附け腰に下げ、それに入れて腰に差しけり。其名を猿頭と名附けたり。

○伏見落城の事附鳥居忠政雜賀孫市を饗されし事

會津に向はせ給ふ時、伏見の城には、本丸に鳥居彦右衛門元忠、二の丸には松平主殿頭家忠、松平五左衛門、松の丸には内藤彌次右衛門家長を置かせ給ひ、六月十六日東照宮打立ち給ひ、十七日伏見の城にて鳥居を召し、今度士卒少くして残り止る事を仰せ有りしに、元忠、臣が存する所會津は強敵なり。一人なり共召具せられて然るべし。伏見には臣一人にて事足り候。世上無

事ならずして變の出來ん時は、近國に援ふべき味方も候はず。今の十倍の軍兵を殘し置かれたりとも防ぐべきやうは候はず、と申しけるに、東照宮黙して御座せしが、稍有りて、駿州宮ヶ崎にて十一に成りし時、彦右衛門は十三にて初て出でたりしよ。年久しくもなりぬ、とて御物語に夜いたく深けければ、元忠會津の御留守世に變なく候ひなんには、復御目見も仕りなん。若し事有らば今夜ぞ永き御別にて候、と申して座を立兼ねたりしに、東照宮御袖をもて落つる泪をおそひてぞ御座しましける。斯くて石田兵を起せしかば、伏見を攻むべきや、と評定しけるに、増田長盛、城固うして而も内府の内に名高き者共あれば、容易く落つべからず。先謀りて見ん、とて山川半平を使にしけり。元忠對面すれば、増田が申し候には、今度輝元、秀家、景勝徳川殿と弓箭をとり、九州中國の諸大名皆同心せられ候。斯れば此城を請取り申すべし。長盛久しく徳川殿の御親み深く候へば、此事然る可しとは存候はねども、思慮の及ぶべきに非ず。伏見の城は太閤築かれ候て、今徳川殿姑く預りて御座しませば、徳川殿の城と申すべきに非ず。疾く城を出でて内府に忠を致さるゝ道有らんと存する由言ひ送りければ、元忠聞きて、過ぎし頃内府會津に向ひし時、固く守り候へと申して候に、敵に渡し候事は存じも寄らず。増田殿は内府に親有る故、斯る事を述べらるゝ旨心得られず候。若おめくゝと城を渡さんに、同じくは城を枕にせよとの使

賜はり候はば、忝しとも申すべし。疾く城を出てよとは、武將の詞には有る可き事とも存せず。疾く寄せられよ。討死せん、と答へしを返りて長盛に告ぐる。側に渡邊勘兵衛有りしが、熟々聞き感じ入りて頻に涙を流しければ、長盛も我も惜き人を殺さん事の嘆かしき、とて共に涙を流しけるとぞ。斯くて三萬餘の寄手四方より攻めけるに少しもひるまず。十日餘防ぎけるに、甲賀の者内通して七月晦日の夜、松の丸に火を懸けしかば、寄手力を得て攻入りたり。内藤は精兵の手利にて、差詰め引詰め射ける矢に死人數を知らず。終に内藤父子も討死し、主殿頭五左衛門を始として残なく切死にぞしたりける。元忠本丸に有りて門を開かせ、門際より六七間退りて、士卒三百餘白刃を抜き揃へ、静り返つて待ちかけたり。寄手しばし攻入り兼ねてためらひけるに、元忠大音あけ、一人にても敵を討ちて死するぞ士の志なれ。吾三方ヶ原にて足に手負ひ行歩心に任せざれども、逃げんとせばこそ足をも頼まめ、いざ最後の軍せよ、と下知する聲を聞きて、一同に切つて出で面も振らず戦ひて、一人も残らず討死しけり。元忠戦ひ疲れて玄關に腰をかけ、息づく處に雜賀孫市重次死骸を踏越えて進み寄れば、吾は鳥居彦右衛門よ。首取つて高名にせよ、とて物具脱いで腹を切りたりしかば、雜賀其首を取りたりけり。本丸に二つの門有りけるを、大手の外は皆堅く鎖してければ、一人も逃散る者なく討死しけるとぞ。後

元忠の首を大坂京橋に梟せしを、京の商人佐野四郎右衛門と云ふ者鳥居に親み有りしが、斯る忠義の人の首を惡逆の罪人と同じく晒す事や有る。とて夜深に盗取り智恩院に葬りて、一字を建て龍見院と名附けしかば、石田聞かば必定刑罰すべし。詮なき事なり、と云ひける者あり。佐野、吾久しく恩を受けし身なれば、白刃を踏むまでこそなからめ。是程の事は人の義なり。義無きは禽獸なり。人生れて死せざる事なし。刑罰に會はん事些とも惜からず、とぞ言ひける。雜賀孫市後水戸中納言家に仕へたりしが、或時中介を以て鳥居忠政の許に云送りけるは、重次昔伏見の城にて、元忠の御最期に参り合ひ、其時の御物具吾家に取り傳へ候ひぬ。先考の御形見にて候。御覽せん爲返し参らせ度くこそ候へ、といふ。忠政悦んで、亡き父が形見是に過ぐべからず。一目見ばや、と答ふ。重次自ら携へて行き向ふ。忠政門外に出迎へ重次を奥の間に招じ、亡父に再對面の心地す、とて涙を流し、甲冑太刀刀おし板の上にかき据ゑて是を拜し、さて今日重次を饗せし有様誠に美盡せり。其翌日重次の方に使を立て、昨日の見參を謝す。又重次の御志によりて父が最後に帶せし物具再び見候事。返すぐも悦び入存候ひぬ。忠政が家に傳へし父が形見に見るべき物も少からず。見苦しうは候へども、此物具重次の家に留めて御武名を子孫に傳へられん事、弓箭の道には良き御遺戒にもや候べ

き、とて甲冑太刀刀悉く返し遣す。夫より年毎に、冬綿厚く入れたる衣五領、使者に持たせて遙々と水戸に贈り遣し音信を通ずる事。忠政が一期の程終に怠らず。水戸公此由聞し召し大に感じ給ひ、鳥居が使者の來るべき前、道梁を修理せさせ、重次に容儲すべき魚鳥様の物賜ひけるとぞ。

○村上三右衛門大島源二武者振の事

筑前中納言秀詮、先陣の士大將平岡石見、松野主馬各祿一萬石なり。伏見の城攻に、主馬が仕寄りの竹把を城中より火箭を射かけ焼きたりしかば、其所を退きて竹把を附けんと言共、村上三右衛門聞入れず。焼跡に竹把を附けずしては有る可からず、とて主馬と相謀りて竹把を附直し、竹把の上に壁土を塗るべき用意しけり。主馬、外に出る事を嫌ふ人々は、士たりとも内にて土を捏ねられよ。又土を塗りたらん者には、中間下人なりとも士とせん、と下知しければ、下部八人出て土を塗りたりしかば、其後竹把を焼かざりしとなり。旗本より大島源二といふ者使に來り、仕寄場より堀端まで間數幾許か有る、と問ふに、村上、間を打ちては見候はず。凡十二間許もや有らん、と答ふ。大島、とてもこの事に間を打たん、と言へば、城近く箭玉の飛び來る所に強みを出して何

の爲ぞ、といふ。源二、殿に問れて間を打たずといはんは快からず、と言ひしかば、村上、旗本の使に先陣の間を打する事は有るまじ、とて村上靜に出でて竹を間竿に切り一間つつ打つ。源二先へ廻り靜に一つ二つとさし終れば十一間半也。大島、村上進退の振舞見物なりし、と云ひ合へりしに、源二は二十二歳、伏見落城の日討死しけるとぞ。

○三刀谷監物田邊城に籠る事

三刀谷監物孝和は其先祖承久の亂に軍功有りて、出雲の三刀谷の郷を賜はりけるによりて氏としたり。其末雲州尼子の旗下に屬しけり。孝和が父彈正左衛門久扶、毛利家に奉公しけるが、後仕を止めて終りぬ。孝和は吉田兼治に頼りて吉田に居たりしを、關ヶ原の時安國寺、北村五郎右衛門を使にして招きけれども聞入れず。細川幽齋の丹後田邊の城に行きて力を合せんとす。從者共、奥州は大國なり、景勝は勇將なり。如何で容易く破るべき。西國一同に石田に與し候ひぬ。徳川家の危き事近きに候に、何とて安國寺が招を辭み給ふぞ、と云ひけるに、孝和聞きて、石田、島津に叛かせ、内府を引附け軍を起させ、後にて京大坂を取り占めん謀、こそ然るべけれ。徳川家の領國其便よき會津に手始をしたるは無謀なり。三成必定勝つべからず、とて吉田家は幽齋

と縁者たりしかば田邊に行きて。大敵に圍れしかども、持ち堪へしは偏に孝和が智勇逞しかりける故なり。

○田邊城勅命に依りて和平の事附細川幽齋古今集傳授の事

大坂の軍兵一萬七千を以て田邊の城を攻る。細川忠興は奥州に赴き、父幽齋城に有り。三刀谷孝和大剛の人にて度々切つて出で防ぎ戦ふ。幽齋和歌に長じたる人なり。古今集の秘訣爲家卿の記されしを殊に秘藏せられしが、兵火の爲に焚けん事を桂光院知仁親王慮らせ給ひ、使を以て、彼の古今集、源氏物語を禁裏に參らせよ、となり。又烏丸大納言光宣卿勅命を奉りて城に赴き給ふとも言へり。則其書を奉るとて、

いにしへも今もかはらぬ世の中に心のたねを残す言の葉  
又烏丸光廣卿の許へ封じたる歌書をやるとて、

もしほ草かきあつめたる跡とめて昔にかへせ和歌の浦浪  
斯る處に前田德善院を禁裏に召し、田邊の城攻和平の事を勅命有りければ、寄手圍を解きて幽齋城を出でられけり。光廣卿幽齋の許より送られし書未だ封を開き給はざりけるが、返

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたゝび返す浦島の波  
幽齋返に、

浦島やひかりをそへて玉手箱あけてだに見ずかへす波哉  
一説、藤原公國卿早世ありて、其子實條卿幼かりしかば、和歌の口傳を幽齋に傳へられけり。後に幽齋實條卿を田邊の城に迎へとりて養育し、悉く授けられしに、古今集の説は未傳へられざる中に朝鮮征伐の起りしかば、弓箭取る身は討死の程計り難し、とて古今傳授の事書きたる書の箱を烏丸大納言光廣卿へ贈られ、預け參らする間、朝鮮に渡り若討死せば實條卿へ渡し給はり候へ、とて添へられし歌、

人の國ひくや八島も治りてふたゝびかへせ和歌の浦なみ  
もしほ草かき集めたる跡とめてむかしに返せ和歌の浦波  
光廣卿の返に、

萬代をちかひし龜の鏡しれいかでかあけんうら島がはこ  
其後秀吉遺言して、豊後白杵を幽齋の男忠興に換へ與へられしかば、光廣卿より筥返す  
とて、

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたたびかへる浦島の波  
幽齋田邊の城を守られし時、勅命により三條大納言實條卿へ附し傳へられしに、一首の歌あり。

いにしへも今も變らぬ世の中にこころのたねを残す言の葉

○古田助左衛門思慮の事

古田助左衛門は古田兵部少輔重勝に仕へて祿千石を受く。景勝を征伐の時、重勝伊勢の松坂の城に助左衛門を置かれけり。三成兵を起せし時、大坂の重勝の屋敷を取圍み、松坂の城を渡さずば重勝の北の方を殺害すべし、と言ひ送りしに、助左衛門、此城は殿の仰無くて人に渡さん事存じも寄らず。若さ非ずば北の方害に會ひ給はんとや。誠に悼しき事なれ共如何にせん。妻子の死するが悲しきとて城を敵に渡せしと、殿を人譏り申すべし。運盡きたらば死を潔くする事、弓箭取る身の習なり、人々は大坂の屋敷にて如何にも成り候へ。敵聽て城に寄來らば散々に軍して討死し、冥途にて對面せん、と大坂の屋敷に云ひ送りけり。斯る處に重勝も東國より歸り來り、松坂に立籠る。此時富田信濃守信高阿濃津を守られしが、加勢を重勝に乞ふ。兵を分ち遣るべき

體の無かりければ、助左衛門、阿濃津へ加勢有らん事尤望む所なり。敵阿濃津を攻めて其後爰に攻め來らん。若阿濃津落ちざる前に東方の味方來らば敵敗北せん。其時は古田が士は敵の旗をだに見ず、富田が力にて松坂を持ちたりなど人に笑はれ候べし。又加勢有らば隣國相援ふの義に叶ひ、又阿濃津にて敵を防ぎしは、古田が加勢の故なりと世に申すべし、と勸めて五百人の軍兵を阿濃津に遣りけり。聽て重勝の領地の百姓の中に大家なる者二十人を士として城に籠せ、後に百石の地を與ふべし、と約しけり。是人質の心にて百姓を騒せじとの術なり。關ヶ原の亂治りて後、重勝約に背かんとせられしかば、助左衛門、信を失ふは君の道に非ず候。斯る言葉は金石よりも堅くすべき事なり。是より後又欺かんとて百姓共何事も聞き入れ候はじ。信無くば立たずと申す事の候。臣が祿地を分ち與ふべし、と言ひければ、重勝約の如くせられけり。

常山紀談 卷之十五

○伊勢國阿濃津城軍の事附佐治縫殿が事

毛利秀元、吉川廣家、富田信高の阿濃津の城を攻むる時、城兵城の乾の隅に有りける伽藍を焼拂ふ所に、俄に風變りて焰を城に吹きかくる。寄手是に乗じて、いざ打破らん、とて穴戸備前守隆家先驅して攻入りけるを、分部左京亮壽城中に加勢有りしが、切つて出で穴戸と戦ひ、互に痛手負ひたり。信高本丸の大手に進み出で鎗を合せて相戦ふ。斯る處に容顔美しき武者緋威の物具中二段黒革にて威したるを著、鎗を提け來り、富田が矢面に立塞り支へ戦ひたり。秀元の兵衛門といふ者を討か、取りたりといへり斯くて富田門に入る時、彼の武者を見れば殿は恙無く渡らせ給ふか。討死と聞きて形は女なりとも男に劣るべきやとて出候ひしに、と言ふを聞けば信高の北の方なり。信高の北田安心のぶたかおき信高驚きて且悦び打連れて城に入り、今日の有様類稀なりと云ひ合へり。其後高野の木食上人和平を取計ひ、信高城を出でけるに、程なく東照宮、伊豫の宇和島にて十萬石下し賜はりけり。

佐治縫殿は近江甲賀郡伊佐野村の人にて、父を左京といふ。秀吉の爲に城を落され流落して、縫殿九つの歳富田信高に仕へ、十四にて四百石與へられけり。津の城に籠る時十六歳、名を善大夫と云ひけり。八月二十四日京口清嵐寺の三の丸を焼拂ひ、敵攻入りけるを防ぎ戦ひて、信高本丸に引取りたれども、分部左京亮も未來らず。家老物主も來らざれば信高天守に上り、自害せんとて物具を脱ぎ、佐治に、汝介錯せよ、と下知せられしを押留めたる處に、分部、富田五郎右衛門、同主殿、上田吉之允も二の丸に引退く體見えければ、信高上帯しめ直し、佐治を天守より便に遣られけり。大手の門、矢倉、廣間の前屏重門の左にて、毛利秀元の士紫母衣懸けたると其外五六人と、上田吉之允鎗にて渡り合ひ居たる處に行懸り、詞をかけて敵を追立つる。母衣かけたる敵大手の門澁へ引退くを追つめ、兩人にて討取りたるを、信高天守より見られけり。後城に籠られし時、著られし甲冑と白河原毛なる馬に小鞍といへる作の鞍鎧を添へて佐治に與へらる。其明の年佐治、富田の家を出て筑前中納言秀詮に仕へ、其家滅びて黒田の家に仕へしを富田禁錮せられしが、大坂陣に後藤に招かれて士三十騎の將となり、五月六日道明寺の軍に寄手の物色を見んとて、谷川筋に出づる處に、東より來る物見武者に行逢ひ、即ち討取りて冑首を得たり。是後藤が手の一番首な



り。後藤が旗本敗北し、敵に押隔てられ、丸山の北、細噉にて返し合せ、敵一人討取り、胃に刀を添へ分捕しけれども胃をも棄ててけり。敵慕ひ来りければ大坂へ引取り、事叶ふまじ討死せん、とて駈出でしを、伴野次左衛門、佐竹安大夫、本多小右衛門も續きて鎗を合せんとするに、深川にて敵懸り兼ねたり。伴野、いざ是迄よ、とて佐治を捕へて引返し、道明寺と平野の間にて、真田に行合ひて遁れ得たり。其後流落し仕へを求め、貧しくして江戸柳原の町家の裏少ばかりの所を借りて、妻と二人在りけるが、京都に赴く。妻殊に哀なる體なりしを、近隣の者共心を附けて勞り、日を送りしに、如何なる事にて京には行かれしぞ、と問ふ。池田の御家新太郎少將の祿千石賜らんとの事なれ共、二千石ならば奉公すべし、とて其爲に京へ行きたり、と答ふるを聞きて、千石ばくと異名して嘲りたりしが、程なく從者十人許引具し、馬に乗りて、煌なる土來りて、吾は佐治なり、とて妻を迎へ、近隣の者に夫々に土産し、妻を心附けたる禮を述べて、池田の家に仕ふとて去りけり。

○長束大藏大輔降參の事

關ヶ原の軍敗れしかば、長束大藏大輔正家江州水口の城に引籠りしを、國清公、船戸帶刀を使

として降參を勧めらる。船戸、是は物慣れたる人然るべし、と辭し申しけれ共、汝疾く行向へよ、と仰せられしかば、船戸方三四寸許の小さ鐵の板を造らせ、懷に入れて水口に行き長束に逢ひ、降參あらば士卒も別の事候まじ。此旨よく申せと申すなり、と言ふに、長束、阿濃津の城攻して關ヶ原にさせる軍もせて口惜く候。さらば此城を枕にせんと手の者共存する處なり、然るに降參せんは恥辱にて候、と言へば、船戸、長束が側の士を呼びて懷より鐵の板取出し、焼きて給はり候へ。三左衛門尉が詞今斯く申す所偽無き印に、鐵火を執りて見せ申さん、とて思ひ切つたる體實にも偽ならざりしかば、長束感じて、假令誑られて如何にならんも力なし。汝が仕業類無きによりて降參せんするにて候。是は見苦しき物に候へど進らす、とて貞宗の脇指を與へけり。船戸尙座を立たざりしかば、長束小姓をよんで硯取出し、降參すべき由書きて船戸に與へしかば、船戸歸りぬ。長束城を出でければ警固の兵を入れられけり。

○渡邊才兵衛武功の事

佐和山の城を圍む時、堀尾信濃守通晴、渡邊喜兵衛を呼んで、凡城を攻むるに敵の虛實土地の要害具に知らでは叶ふまじ。如何にもして牛捕をせばや。汝事よくせんや、と言はれければ渡邊、首

を取るだに易からず候。まして生捕せん事叶ひ難し、と申しも果てぬに、渡邊が弟才兵衛進み出  
 で、殿の仰に何とてさは宣ひ候ぞ。喜兵衛年老たり、軍令を司るには然るべし。斯る力業は才兵衛  
 に仰附けられよ、と言へば、喜兵衛、思慮なき事な申しそ。無禮なり、と言へば、通晴、大志壯力人の  
 及び難き事をも爲し得べき眼ざしよ、と才兵衛を稱せられしかば、才兵衛座を立ちけり。兄の詞  
 は禮儀なり、汝が詞は血氣なり、と人々戒めけれ共、吾思ふ子細有ればこそ、とて夜の更るを待ち  
 て従者一人打連れ、竊に城際に忍び行く。茂りたる桑の木の下に囁く者あり。近くなりて、それ  
 遁さじ、と二人鎗を執りて懸るを、才兵衛一人は突伏せ一人は追散し、首を従者に持せ城に忍入  
 りて、生て歸る事萬に一つなり。此有様を兄に語れ、と云ひて堀に添ひて行く所に、夜廻すると覺  
 しくて打過ぐる。其跡に附いて行けば振顧みて、名乗れ、とて弓に箭を交ふ。才兵衛小聲に、敵の  
 忍後より來るぞ、爰に待ちて打たん、と言ひつゝ歩み寄り、一丈許になりける時鎗を取延べて敵  
 の弓弦を突切りて其儘鎗を取直し、諸膝薙いで打伏せ上に乗懸り、汝能く聞けよ。吾殺さんと  
 には非ず。云々の子細有りて忍び來りしに、行會ひたるは天の祐なり。汝死なんとならば吾汝を  
 刺殺して自害せん。それは益なし。吾に隨ひ來れよ、と言ふ。彼士怒つて、既に斯く成りし上は命  
 生きんと思はんや、とて、疾刺殺されよ、と云ふ。才兵衛聞きて、二人空しく死なんより生きて功有

らんこそよけれ。軍神も照覽あれ。吾、僞無きよ、と言へば、さらば如何にもせよ、と云ふ。才兵衛  
 悦んで引起し、物具に附きたる塵を打拂ひければ、彼士、天晴汝は大剛の人にて、而も辯舌明  
 なり。搦められぬれど恥とは思はず。名は松田大介と云ふ者なり、と言へば、才兵衛、松田を先に  
 立てて始首を取りたる所に行けば、従者喜兵衛殿も追續いて出で給ふが歸られず、と言ふ。才兵  
 衛、如何にし給へるにや。松田は逃ぐべき人にあらね共汝附添ひ居よ、と云ひて城の方に行く所に、  
 喜兵衛歸りたるに逢ひ、生捕をしてこそ候へ、と云ふ。城門は固く閉ぢたり。兄弟打連れ歸りて斯く  
 と申す。通晴由々しき事をもしたるよ、とて一同にどよみ合へり。生捕は如何にせん、と申すを、  
 東照宮、心に任せよ、と仰せあり。才兵衛、松田に申せし詞云々なり。松田に腹切らせられれば臣  
 先死罪になり候可し、と言へば、勇有り又情有り、とて松田も許されけり。

○石田三成生捕らるゝ事

田中兵部大輔吉政、石田を牛捕にせられしが、いと懇に會釋して數十萬の軍兵を率ゐられし事、  
 智謀の由々しき事と申すべし。軍の勝敗は天の命に候へば力に及び難し、と禮儀正しかりけれ  
 ば、三成打笑ひ、

三成此時坐上の楹に倚りかゝり、元より田兵と呼びしが如く、此時も田兵と云ひて常に替らざりしとなり。

秀頼公の御爲に害を除き、太閤の恩に報い奉らんと思ひしに、運盡き斯くなりし事何をか悔むべき。是は太閤より賜はりし切刃正宗の脇差なり。形見に進すよ、とて與へけり。

馳走の士を附けてもてなしたれども、片時も早く死んとて食せず。馳走の士如何で兵部が計ひに及ぶべき。能く勞りて最後の御用意候へかし、と言ひければ、さらば此頃腹中の悪しきに葦雜水を賜へ、と云ひしかば、其設して進めければ、快く食して打伏して射かきたり。

田中、石田を引具して大津に参りければ、東照宮、本田正純に石田を守護すべき由仰出されけり。正純、石田に向ひて、秀頼公年若く事の是非を知召さじ。唯太平を致す道こそ有るべきに、由なき軍起して斯く恥辱にも及ばれしぞかし、と云ひしに、三成、吾土民より國を賜ひたる恩譬へん

様なし。世の様を見るに、徳川殿を打亡さずば遂に豊臣家の爲によからじと思ひて、秀家、景勝を始として同心無かりしを、強ひて勸めて遂に此軍をば起したりき。戦に臨んで二心有る輩裏切せし故、勝つべき軍に打負けぬるこそ口惜しけれ。二心有る人だに無くば、汝達を始め斯の如く搦めなんに、志を失ひたるよ。運盡きぬれば九郎判官も衣川にて空しくなりたりき。吾

打負けしは天命なり、と言ふ。正純、智將は人情を計り時勢を知るところを申せ。諸將の同心せざるも知らず。輕々しうも軍を起されしかな。軍敗れて自害もせで搦められしは如何に、と言ふに、三成忿つて、汝は武畧は露も知らざりき。腹切つて人手に懸らじとするは葉武者の事よ。頼朝公土肥の杉山にて、朽木の洞に身を潜めし心はよも知らじ。大庭に搦められなば汝に嘲らるべし。大將の道は語るとも汝が耳には入らじ。今は是迄なり、とて物も言はず。

東照宮の御前へ三成を召出して、如何に武將も斯る事昔より有るためしなり。恥に非ず、と仰せられしかば、三成氣色打解けて、唯天運の然らしむる處にて候。疾々首を刎ねられ候へ、と申す。東照宮、三成はさすがに大將の器量なりけるよ。平宗盛には大に異なり、と仰せ有りけるとも言へり。又一説、中納言秀詮、石田が體を見ればやとて座を立たれしに、細川忠興、何でふ益無き事なり、と言へども聞入れず。三成、秀詮を見て、我汝が二心有るを知らざりしは愚なり。されども約に違ひ義を棄て、人を欺きて裏切したるは武將の恥辱、末の世までも語り傳へて笑ふべし、と云ひけるに、秀詮詞無かりけり。又三成大津に到る時、御本陣の門外に聲を敷き其上に坐したりしに、諸將打過ぎけるが、福島正則無益の亂を起して其有様なり、と言はれしに、石田、おのれを生捕りて縛らざりしは天運なり、と云ひければ、正

則ち詞無く過ぎられぬ。黒田長政通られしに馬より下りて、不幸にて斯くなり給ひぬ。是を、とて著られし羽織を脱いで著せられたりと言へり。

石田を始め小西、安國寺生捕れて、三人の肌にも綿の破れたるものを著たるを東照宮聞召し、石田は日本の政務を取りたる者なり。小西も宇土の城主なり。安國寺亦賤むべき者に非ず。軍敗れて身の置處無き姿となるも、大將の盛衰は古今に珍しからず。命を狼に棄てざるは將の心とする所、和漢其例多し。更に恥辱に非ず。其儘京中を渡しなば、將たる者に恥を與ふる事吾恥なるべし、と仰せ有りて、三人に小袖を賜はりけり。石田に見すれば、之は誰が與へたるぞ、と問ふ。江戸の上様より、と言へば、それは誰が事ぞ、といふ。徳川殿、と答ふれば、三成、何徳川殿を尊ぶべき、とて一言の禮に及ばず、冷笑ひて居たりけり。

小西は、敵對の吾に是迄の勞心に恥ぢたり、とて涙を落しけり。安國寺は兎角言はで赤面し俯き居たりけるとぞ。三成を誅する時車に載せて六條河原に出すに、石田顔色平生の如くなりしとかや。又石田治部が天下を取つたと云ひけるを聞きて打笑ひ、我大軍を率る天下分目の軍しけることは、天地破れざる間は隠れ有らし。些とも心に恥づる事無きよ。噫さすして有りなん、と言ひけるとぞ。

○小幡助六郎忠死の事

小幡助六郎信世は、上野介信繁が三男にて上野の人なり。十五歳にて大坂に赴き諸家の體を見るに、石田は太閤無二の寵臣なれば仕へけり。後祿二千石を與へけり。關ヶ原にて三成敗北の時、押隔てられ三成に従はず。其處を切り脱けて三成が行方を尋ね、江州石山に來りしを、郷民搦め捕りて大津に參る。百姓をば賞せられて金二十枚を賜はりぬ。さて信世を召出され、石田が行方へを問はせ給ふ。信世承り、三成が士小幡助六と申す者にて候。主の在所能く知りて候。然れども年比恩を請けたる身の、今日の難を遁れん爲に主の在所を申す不義や候。假令骨を拉がるるとも固く申すまじきにて候。試に拷問有れ、と申し切つてけり。東照宮聞召し、忠義の士なり。三成が行方努々知りたるに非ず。知らざる故にこそ落行きて搦められたれ。土程の者を拷問に及ぶべからず。將たる人は忠臣義士に不憫をこそ加へめ。疾く繩を解け、と仰せ有りて則ち赦させ給ひけり。信世近き邊の寺に行き、其由細々と語り、思はざる外に赦を蒙りたれども、亦恥に遭はんも計り難し。屍を匿し給はれ、とて自害しけるを大津に申し上げければ、殊の外に惜ませ給ひけり。

○河村權七郎が事

關ヶ原の亂の時、加藤嘉明の北の方大坂に有りしかば、河村權七郎を伊豫の松前より大坂に遣りけるに、忍びて屋敷に至り北の方に相見え、松前より長臣等が代とて参り候。若奪ひ取らんとせんとも、臣斯くて有らん程は危くな思し召され候ひそ、とて屋敷の隅に井樓をあけ柵の木ゆひ、敵に向へるが如し、叶はぬ時は自害を勧め、臣も御供申すべし、と云ひけるに、細川忠興の北の方自害の後、人質を奪ひ取る事止みたりけり。河村に二百石の祿を増與へられしに、後河村言ひけるは、大坂川口の守り固く、中々通るべき様無きを、尼ヶ崎の漁夫を談ひ、船に乗り網の中に身を潜め、敵の中に入りて守りしは、必死を思ひ定めたる事なり。關ヶ原の軍に首取つたる者に同じからず。然るに恩賞の薄き事、明ならぬ殿なり、とて出奔しければ、嘉明忿りて、探出して誅せばや、と言はれしかば、或山中に匿れ居たり。大坂の亂起りし時、嘉明江戸に残し留められ、不慮の事有らば取巻きて攻殺さん、と言合へり、其比夜更て河村、嘉明の屋敷の門を叩き、青木右衛門を呼出す。青木怪み、立出でて見るに河村なり。こはそも如何なる事ぞ、といふ。河村、事新しきやうなれ共、君に仕ふる者の忠を致すは常の習なり。然るに過ぎにし大坂の事に誇り

て殿を嘲りて出奔しける事、後悔今更益なし。十餘年山中に匿れ居しに、云々の事にて殿も危く御座しますと聞きて、夜を日に繼ぎて参りたり、と言へば、青木、誠に義理の志はさる事なれ共、殿の忿甚しければ、斯くと申したりとも許されじ。疾く歸られよ、と言へば、河村、臣たる者の義を知られなば河村はなど來らざるやと言はる可きに、門内にだに入れず、疾く歸れとは口惜の詞よ。此上は町屋に匿れ居て殿の先途を見ん、と云ひしかば青木、さらば先づ申して見ん、とて内に入り嘉明に告ぐれば、それ呼び入れよ、とて廳て寢所に召出されしが、一目見るより涙を流されしに、河村も涙に咽び、君臣誓詞も無かりしが、河村、思も寄らず殿の御前に出づる事よ。今生の思ひ出に候、と申す。嘉明、汝が志言はん様も無し、と悦ばれけり。夜明けて、河村こそ來れ、とて下部迄言ひ囃し、大軍の援有るが如く勇みけり。嘉明寵愛して八千石與へられけり。程無く病死しければ、奥州四十萬石に成られし時、河村、存命へたらんには國政の輔佐たらんに、と嘆かれしとかや。

○加藤清正の北の方大坂を忍び出でられし事

加藤清正の北の方大坂に在りしを、石田、人質に取らばや、と云ふを聞きしかば、清正より附

けられし竹田善兵衛家正、大木土佐恒持謀を廻し、轉法口に居ける清正の舟奉行梶原助兵衛に山梶子の煎汁を飲ませ、四五夜眠らせず。疲れ衰へ大病人の如くなりしを、籠に乗せ、綿帽子冠らせ、前後に衾重ね、門番の前にて戸を開き、斷りて屋敷に往く事度々に及べり。後は見なれて更に咎めず。又川口にて蜈蚣船を晩毎に漕ぎ比をさせてけり。是も番船見慣れて後は、何は早き遅き、など言ひて守怠りぬ。斯る處に清正より、吾は石田に與す可き用無し。如何にもして北の方を敵に渡さずして落せよかし、と云ひ來りければ、大木工みつる事にては有り。北の方に此由を告げて梶原が衾の下に北の方を押匿し、其上に靠れ懸りて毎の如く籠の戸を開き門番の前を通りけり。土佐も跡より供して、若見咎められなば北の方を刺殺し、切死にすべしと思ひたれ共、事故無ければ轉法口に行きて、頓て蜈蚣船に乗せ、漕ぎ出し、番船の前をつと行き過ぎて、二三町にもなりければ、彼は如何に、と騒ぎ奔めく間に、鳥の飛ぶが如く一里餘も漕ぎのびぬ。番船共謀られたるよ、とて碇を上げ追附かんとせし間に行き過ぎて、遂に肥後に下り著きぬ。大木、竹田は大坂に居残りて此事洩聞え、打手來らば思ふ程戦はんと待懸けしに、關ヶ原の軍破れしかば、思はざるに難を遁れけり。大木元佐々成政に仕へ後清正に仕へ、才畧篤實兼備へし者なれば、清正寵愛厚かりしに、今度の事に依りて、又二千石の祿を増し與へられしとなり。

○淺井暇合戦前田丹羽の將士功名の事

附松平久兵衛軍學鍛煉の事

前田利長の士松平久兵衛、若き頃より兵書を読み一飯の間も懈らず。常に人に語りて云く、此一人に對する業に非ず。萬人を一刀に斬るの道なり、といへり。利長大聖寺の城を攻落し引返す時、利長の士大將山崎長門守、淺井暇よりせん、と云ふ。久兵衛、道細く左右深田なれば、大軍の進退如何有るべき。半退きたらん時長重兵を出さば、進退共に叶ひ難かるべし。敵は案内者なり、必定味方利候はじ、と言へ共山崎聞きも入れず。既に大聖寺を攻落し、大軍なれば敵は攻められざるを能きにして、争か討つて出づべき。若軍を出さば押包み、一人も剩さず討取るべし、と云へば、久兵衛、長重は勇將なり。大聖寺の後詰に後れ、口惜く思ひて打出でんに、其鋒日比に倍せん。吾は怠り、敵其虚を討たば危き事に候。又誰にもあれ、吾城を馬の蹄に蹴散して過ぎ行く敵に、箭の一筋も射懸けずして屈まり居る者や候べき。明日の軍陣を亂され候な、我敵を恐れぬ證は、明日人々に知らせんものを、と云ひけり。其夜物主皆張番を出す。山崎打巡り見て、久兵衛が足輕は何故に味方近くに置きたるや、といふ。久兵衛聞きも敢ず、勝敗の理を知らず、敵を侮り

勇に誇りて、利害に暗き身の士の下知する事こそうたてけれ、といへば、山崎聞きて、敵を恐れてしかしたるならん、と罵りしを、側より、詮無き争よ、と留めけり。久兵衛愈憤りて、強敵に當りて目を驚かさん物を、と思ひ定めて居たりけり。

其夜長重は士大將を集め、江口三郎左衛門を大將として夜駆せんとなりしに、俄に大雨にて風烈しく、夜討を止められしかば、江口、風雨は夜討に好む所なり、と言へば、人々皆尤と申しけるに、長重、否々、御幸塚の左右沼にて、人馬の掛引心に任せじ。明日敵引取る時追詰めて、思ひの儘に討勝つべし、と云はれしとなり。

長重の士大將江口三郎左衛門正良、惣構より見渡せば、敵段々に引退く。時こそよけれ、と兵を出し押行く。敵を喰留めんと鐵炮を打懸くる。長重も應て兵を進めらる。

又一説、長重鐵炮の音を聞き、後れな者共、とて馬に鎧を合せて駆せ附けられしかば、江口振顧みて、今に初めぬ此殿の早業哉、と悦びけり。長重、我淺井山を取りきり敵の頭上より打疎めなば、盾を突かする事有らじ、と言はれしかば、江口、尤も然るべし、とて後より續きたる兵三百人を引具し淺井山に登り、敵を目の下に見下して鐵炮を打懸ければ、坂井與右衛門直吉も馳來る。長重愈競ひ懸りて、一足も前に進め。一寸も退くべからず。と下知せられけり。

金澤の軍、小止み無き終夜の雨に假の陣屋も有らざれば、物具皆濡れとほり、鐵炮の銃口に水入り火繩もふり消され、左右は泥なり、多くは膝甲様の物を投げ入れ、足溜とせしと言へり。

金澤の殿長九郎左衛門連龍が陣色めくを見て、江口塵を取り、懸れ、と下知すれば、松村孫三郎馬を乗出し敵の陣の中を乗切つたり。荒田五兵衛續いて馬を入る。

松村は五ヶ所痛手負ひ馬より落ちけるを、小池新兵衛、松村を馬に乗せ引取らせしとなり。長父子踏み止り、此處を専途と戦ひけるが、討たる者多し。長好連茲年十八歳、手の者數多討たせ、敵の中に駆け入りて討死せんとせしを、横田久右衛門馬の口に取附き引返す。長重の軍勝に乗り剩さじと追詰めたり。太田但馬は殿の陣に軍有りと聞き、兵を返して馳來る。水越縫殿介山城橋に於て、鎗を提げ敵に向ふ。松平久兵衛は太田が陣にて足輕を下知して居たりしが、銀にて飾りたる冑を著、黒き物具にて馬を駆け寄せ來り、馬を乗放し水越が前につと進出でて、小松の士拜郷治大夫と鎗を合せしかば、水越も續いて安孫子作大夫と鎗を合す。

一説、松平は不破奎兵衛と鎗を合すとも言へり。爰にて雙方手負ひ討たる者多し。互に精力盡きて、相引に引退いて物別せしなり。後に利長

二人の前後を問はれしに、久兵衛申しけるは、縫殿介は初より踏止り候へば、一番誰か争ふべきと申す。縫殿介は、久兵衛敵に鎧を合せし事早く候へば一番に候と申す。利長聞きて、武功は猶及ぶ者有らん。斯く譲る志、萬人にも越えたり、とて一番を松平に定められ、共に感状與へられぬ。松平此時祿五百石、後三萬石を賜りて伯耆といひけり。

一説、松平を松原に作る。何れか是なる事を知らず。一説に、此日金澤の士七人鎧を合せける中にも、岩田傳左衛門小松方の手負ひたるを首を取らんとせしに、松平久兵衛、岩田今日晴なる鎧を合せ、其上に拾首何にかせん、と言ひしかば、岩田尤なりとて同時に引取りしとなり。後に岩田が曰く、首を取りて大音上げ、岩田傳左衛門鎧を合せ又首を取つたり。引取口の殿と呼はらば、一芝居にて三度の功名なるべきに、松平が物師故、己が下知につけて引取らせし、とて後に悔みけるとなり。岩田後に内藏介と稱す。又利長、淺井にて鎧合せし士に感状與へられし由小松に聞えしかば、小松の士共、殿にも御感状下し給はらんや、と云ひけるを、長重、淺井暇は道細く左右深泥にて、掛引自由ならず。勝敗定かならざるは理なり。され共退く敵を追詰め、橋の彼方にてせり合を始め、橋の此方にて物別せしかば、引取る敵に少しながらも追返されたるに似たれば、人々、武勇の働はさる事なれども、感状は

與ふるに及ばず、と言はれけり。

○山田勘六郎討死の事

利長の兵山田勘六郎は、十四歳にて父の仇を討ちたる人なり。或日利長孳藏の戸を開くとて、山田に鎧を預けられし故、急ぎ來れ、と呼れしに、遅かりければ忿つて、持たる杖にて突れしに、思はざるに額に中りて血流る。跪きて平伏せしに、脇差の鞘走りければ、手向もするや、とて疊みかけて杖にて打たんとせられしを、側より山田を引退けたり。山田此より病と稱して引籠り居たりしに、關ヶ原の亂起りて利長大聖寺の城を攻むる時、一段高き所に打上り武者押を見物せらる。山田五六十人許引具し、今日を最後と出立ちて押通り、城に著くと先驅して一番に乗込み、鎧にて乳の下を突き貫され、痛手なれば堞の下に落つる。兼て從者に言ひ含めしかば、息絶えざる内に利長の前に昇き來る。利長見て後悔せらるゝ事甚しく、其過を懇に斷りて涙を流さる。山田馳て死にけり。行年二十歳。世に優れたる美男なりしが、大剛の働して討死しけり。其前日親しき朋友に奇南香を分ち贈りしを、其頃大聖寺奇南香と言ひて持嚙したりと言へり。



○黒田如水凶相の馬に乗られし事

黒田孝隆入道如水、關ヶ原亂の時九州を打平けられしに、乗られし馬は二寸許の黒き馬なるが、百會に手負といふ旋毛有り。如水此馬を指さして、我此凶相を知らざるに非ざれ共、人は萬物の靈なりと聞きたり。人に勝つべき萬物無し。吾不道ならば凶相是より大なるはなし。此馬の毛瑾に係らず、と云はれしとぞ。

○黒田大友石垣原合戦の事

關ヶ原亂の時、大友義統木附の城を攻むると聞きて、如水後卷せられしかば、大友立石に引退き、石垣原に先陣を押し出す。黒田の士大將久野治右衛門歳若しとて會我部五左衛門を添へられしが、敵四五千許立石の民家を後に當て待ちかけたるを、久野遙に見て金の天衝の指物さし、栗毛なる馬に乗り懸れ、と下知しけるを、會我部、今暫し待たれよ、早くば勝利候まじ。下り立ちて馬に息吐がせ、一同に割籠つかはせ、後に味方の續かん時衝懸り一戦すべし、と言へ共聞入れず。久野が從者荒卷軍兵衛と言ふ者豊前の地士なりしが、若き時宮松と言ひて十五歳より功名せし剛の者、

五右衛門が詞尤なり。馬に當て倒し蹴散すと申すは敵によるべし。今日の敵は國替の時能く知りたる者にて皆物師なり。近年落ぶれて此亂を死すべき時節と思ひ定め、鎗を膝の上に置き静まり居たる所へ、一騎二騎ばらくと駆合はせんに如何で勝つべきや。鎗を突折る程の軍ならでは叶ふべからず、とて馬より飛び下り、久野が馬の口に取付き、若氣ながら餘りの逸り様にこそ候へ。後陣に先を越さればこそ恥ならめ。後に押詰めん時に懸りて突崩すべし、と云ひけるに、平田彦右衛門といふ者馬に乗りながら、否々後陣を待たんとせば、井上野村すゞとき男なれば必ず先を争ふべし。大友が者共木附にて疲れ又爰に來りたり。進め、と言ひければ荒卷怒つて、平田、汝と共に豊前の者なるが、度々手なみは知つたるよ。今井の濱の軍に汝を追駆けて、具足の押附切つたりし疵は有るべきに、其後四兵衛門が父、汝を呼出すとて問はれし時、汝が健氣さに討止めざりきと言ひつる故に祿を得しかば、我陰と悦びしは忘れたるか、と言ひ捨てて馬に乗り先駆すれば、二十騎許續いたるを押詰めて懸りけり。敵二手に分れたるを一陣を突崩す。久野逸りたる者なれば少もためらはず、一文字に乗込み戦ひけれ共、大友が兵共度々の事に慣れ、今度の亂れに故主の招きに從ひ、今日を限りと芝居にひたと折敷き待ちかけたれば、久野主従五騎一所にて討たれけり。會我部は久野が討たれたる所に横合に駆入りて討死す。平田は久野

が討るゝを見て馬を引返して引退きぬ。荒巻は敵競ひ掛るを見て、いざ引かんとて人数を集むるに、敵嚴しう進むを見て、首をば皆捨てさせ、馬に輪を懸けて引きさがり、後殿して引退きけるが、久野が討死を知らざりし故、其日の功名徒に成りにけり。黒田の二陣の士大將井上九郎右衛門元房防と云野村市右衛門後隼人遙に跡にて関の聲を聞き、此山に上りて敵の軍立を見抜くべし、と井上手の者に下知し進み行く。野村、先に軍有るは分明なり。何見分くる事の有るべき、と言へ共、井上が陣押固めて通さざれば、今少し先に押出されよ。廣き所にて陣せん、と言へども聞入れざれば、獨言して怒りける所に、井上主従三騎小山に乗り上げ、指物を抜いて味方を招き陣を進めけり。

井上、唐冠の冑、烏毛の棒の指物したりと言へり。又佩楯を取つて捨てければ、井上が手の者、すはや激しき軍よ、と勇めるとなり。

井上、野村、敵は皆歩立なり。馬の駈場を頼む共、必死の敵に軽々しく懸り難し、とて皆馬より下立ち、勝に乗つたる敵にて殊に譜代重恩の士共、今日を限りと思ひ定めたるなれば、敵懸るとも相懸すべからず。待軍して突崩したりとも足を亂して追ふべからず、と下知し、静々と押懸る。大友が兵是を見て、疎駈せば忽ち突崩さん、と思ひしに違ひけり。野村は朝鮮にて漢南

の軍に功名し、膝に手負ひ行歩心に任せざれば、片輪者にて候程に馬に乗り候、と言つて下知しけり。石垣原は原の中に高さ一丈餘の石垣土手六七町許も續きてけり。井上、野村は石垣を此方に取らば軍に勝つべし、と進みければ、敵も同じく進んで石垣を踏えんとせしを、突崩したれ共逃ぐるを追はず。井上鎗を横たへ押し止め、野村は馬を乗廻し兵を整へたり。大友の士大將吉弘加兵衛、宗像掃部是を見て、斯くては味方負軍なるべし。敵勝に乗りて足を亂さん所を追立てんと思ひしに力無し。とても討死せんと思ひ定めたれば、いざ懸らん、とて二千許静々と歩み寄る。井上、野村是を見て少しも騒がず、折敷きて相懸にもせず待ち懸けたり。間近く詰寄せて散々に突合ひ切合ひて、大友勢一町許引退きけれども追ひも懸らず。元の芝居に跪きて心静に息を吐ぐ。大友勢又押懸りて、爰を専途と火を散して戦ひけり。吉弘は尖眉刀を打振り、今日を最後と振舞ひけるを井上見て、いざ参り合はん、と詞をかくれば、吉弘打笑ひ渡し合せしが、草摺の端を十文字の鎗に突かせて、深手なれば少し退りけるを、小栗治右衛門が従者弓を持ちたるが真中を射貫く。吉弘心猛しと雖も、終に叶はで首をば小栗取りてけり。又一説に、吉弘は黒革にて威したる甲を着、熊毛にて鍔を飾りたる冑にて、三尺許の刀を以て井上と馬上にて渡し合ひ、馬より突落されしが脇差を抜いて手裏劍に打つ。井上が弓

手の股に中る。其間に小栗引組んで吉弘が首を取ると言へり。又一説に、吉弘と井上は、吉弘一年中津に有りて親み深かりしかば、此日井上に向ひて、珍しや一鎗參らん、と言つて突合ひしが、吉弘が胸板を二鎗まで突きけれ共、甲堅くて裏かゝず。井上、吉弘が内胃を突きけるに、十文字の横手にて忍の緒を切り、胃傾きて目を塞ぎければ少し退りける處を、吉弘が左の脇より下著の青く出づるを目に懸て脇腹を突きたりしかば、吉弘遂に討たれしともいへり。又此軍場の後に吉弘が厲鬼現れ、往來の人に祟をなしける故、吉弘が縁の人石垣原の傍別府といふ所に吉弘が屍を葬りてけり。別府、清田、濱田の百姓瘡を惱めば、米を供ふるに忽ち瘡落ちけり。吉弘が嫡子は清正に仕へ、一男は細川忠興に仕へしが、父のなき跡を見んとて別府に行きて其印の石を拜せしが、多く米を供ふるによりて烏の集りて糞に穢れしかば、今より武具を供へたらば治し給へ。さなくば治し給はざれ、といひしが、是より米を供ふるに驗なし。木刀を作り供ふれば驗有りといへり。

宗像も井上も從者大野勘右衛門と引組みたる處に、勘右衛門が弟休也と云ひし法師武者走寄り、掃部が脇腹に刀を突立て、えいや、と跳ねたりければ、遂に其處にて討たれけり。大友の勢突崩されてはさつと引き、又押懸り戦ひけれども、井上、野村追駈けず、元の芝居に跪き、又懸れば

立ち上り、突退け幾度といふ事を知らず。大友が勢終に打負けて残り少く討たれしかば、僅許になりて立石に引返す。義統力盡きて如水に降參せられけり。

○三宅喜藏武勇の事

義統木附の城に向ふ時、細川忠興の士大將松井有吉、加藤清正に加勢を乞ひたりければ、三宅喜藏を遣られけり。三宅、殿の先陣にて功名せんと思ひしに、他國に往きて城に屈り居らん事は存も寄らざる事なり、といふ。清正、汝が武功有る故に、他國に遣したりとも我名を汚さじと思ひ寄りたるに、己が名を食ふこそ心得ね。永く我家を去つて心に任せよ、と言はれしかば、三宅其處を出て、庄林隼人に斯くと告げ、殿の咎を蒙りたれど、殿ならで奉公せんと存する大將も候はず。あはれ隠し置きて給はらんや、と言ひしかば、隼人心得たりと許しけり。清正宇土の城を攻むる時、三宅は茜の三本じなひの差物さし、夜半より鹽田口の堤に行きて明くるを待つ。宇土には南條元琢籠り居たり。此元琢は伯耆羽衣石の城主南條左衛門元次が二男にて、兄の元重に劣らぬ大剛の者なるが、毛利元就と軍する事度々に及びけるに、敵寄ると聞きて只一騎馬上にて上帯しめて駈け出し、半里が程に軍兵共追附いて、速に國境に馳せ行き、押寄する軍兵を

追散したる勇士なるが、秀吉の勘氣にて小西行長が許に隠れて、朝鮮にても武勇の振廻せしなり。此度清正寄ると聞き、只一騎城を乗出す。元琢が従者福西九郎大夫、是も十八の時より朝鮮の軍に會ひて物師なるが、元琢に後れじと城を出でて馳せ行く所に、山の上に清正の馬蘭の馬印閃きて見えければ、彌進んで三宅に行合ふ。元琢馬より下りて三宅と鎗を合せたる處を、福西透間なく走り寄り三宅を斬る。三宅が突きたる鎗を、元琢握りて遂に引奪ひて既に危かりしに、三宅が従者元琢が胃の眞向を一刀斬附けたり。元琢目眩きてくるく廻りながら刀を抜いて、三宅が従者を切倒す。清正、茜の二本じなひは三宅喜藏ならん。討すな者共、と下知せらるる詞の下より、飯田角兵衛、庄林隼人馬に諸鎧を合せて駈け來りければ、元琢敵續きなば悪かりなん、と三宅を捨てて引返す。清正三宅を呼びて、其日被られし羽織に千石の祿を添へて與へられけり。

又三宅元琢が胃を突き落せしかば、頬に手負ひたれ共、淺手なれば三宅が鎗に取附きたれども、三宅鎗を捨てて組合ひたりともいへり。

其後關ヶ原の軍破れて行長生捕になりしかば、清正使を城に立て、城を明け候へ、と云はれしかば、城代小西隼人、自害して城中の者共助け給はらんや、と申す。清正許諾して八代の城代小西若

狭も自害し、宇土、八代を清正に授く。清正南條に六千石の祿を與へられけり。三宅と南條と物語するに、元琢、汝を討留めずして殘多し、と戯れしかば、三宅、我も生存するなり、と言ひけるとぞ。

三宅、宇土にて組みたる時忽ち刺殺すべきに、其日指たる小脇差少し長かりし故なり、と語りしと云へり。

○肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事

清正宇土を圍む時、或夜、敵夜討すべし。な怠そ、と下知せられけり。果して杉本次郎介を大將として清正の陣に夜討す。日下部平介、坂川忠兵衛鎗を合せ散々に攻め戦ふ。杉本守固きを見て城中に引返す。田中兵助は酒に酔ひて臥居たりしが、鐵炮の音に驚き起上り、鎗を取りて駈け出でしに、敵引取り皆門内に入りて、杉本一人大手の柵の木戸口に残り止りたり。田中詞をかけたれば、杉本十文字の鎗にて田中を一鎗突きて、柵の中に入りけり。清正火を燈し軍せし者共を呼ばれしに、田中、今夜先駈したり、と申す。清正能く見て、一番は日下部、坂川二人の内なり。二人とも箭創有り。弓は鎗を合する時射て、一同に懸れば射難きものなり。田中が創は右の腕

に有り。鎗創ならば左の手に有るべし。殊に横に疵の有るは汝が自ら切つたるにや、と云はれしかば、田中、敵は銀の澤瀉の立物打つたる胃を著、十文字の鎗にて杉本次郎介と名乗りたりき。猶偽と思召し候はんには不幸の至に候、とて退きけり。後城明渡し、杉本も清正に奉公しければ、此夜討の事を問はれしに、杉本、城に入らんとせし時、頭盛の胃を著鎗を提けて走り來り候武者を、一鎗突いて候、と申す。清正、田中が詞證據に符合しければ、五百石の祿を與へらる。田中其夜一通の書を殘し、虚名を蒙り世の誹に合ひ候程に、加祿に本の祿を添へて返し候、とて肥後を立退きけり。田中は其初盜賊にて有りしが、石川五右衛門と言へる強盜の長を、秀吉の時京の三條河原にて刑罪せられしに、道々見物の男女群をなす。田中其中に紛れて、石川を引き過ぐる時につと飛懸り、石川が繩取を唯一刀に斬倒し、五右衛門殿日比の恩に報じ候、と呼はり、騒ぎ奔めく間に、人の中に走り入り、終に逃げ出でける男なり。此時二十六歳とかや。

○福島家の士大將東照宮を拜する事

關ヶ原の軍に功有りける諸將の家臣を召して、東照宮御盃を下されし時、福島正則の士大將福島丹波は跋、尾關石見は瞎なり、長尾隼人は聾なりしかば、近習の人々、能も片輪の集り候、と囁き

けるを聞き召し、汝等年若くとも能く聞け。女は容儀を尊ぶ事よ。よし形は如何にもせよ、斯る軍に功名したるを男とはするぞかし。彼三人は世に勝れたる大剛の者なり。汝等志十に二三を彼者に似せたらんはよかりなん、とぞ仰せられける。

○加藤清正治亂を論せられし事

關ヶ原の後、東照宮、石田が亂は雨降りて地固まるといふに同じ。此より靜謐ならん、と仰せ有りしに、諸大名皆祝し奉りたる處に、加藤清正、仰せの如く惡逆の輩誅せられ、泰平たらん事必然に候。然れども天下の治亂は天の陰晴に譬へ候ひなんには、晴渡りたる晴天と見るも俄に雲の出來て、雨うつすが如き事も有るものに候へば、測り難きは人の心にて候、と申されければ、淺からず御感有りしとなり。

但清正の此論、何の所にての事なりしや詳ならず。

○黒田如水豪氣の事

關ヶ原の時黒田如水は豊前中津に有りしが、九千餘の兵を率ゐ、九月九日打出でて諸所の城共

攻落し、筑前、筑後の浪人共相集り大軍に成りし時、嫡子長政の使來り、關ヶ原にて石田を始  
 め敗北し、金吾中納言秀詮は、長政の謀によりて裏切せられし由告げられしかば、如水大に  
 怒り、空果てたる甲斐守かな。天下分目の軍はわざと月日を過して、浪人のすぎはひを與ふるも  
 のなり。何事の忠義だてぞ。日本一の空は甲斐守なり、とぞ咥かれける。其後長政に筑前を賜は  
 りければ、如水も京に上られけるに、諸國の大名如水の門に來りて市をなしけり。山名禪高如  
 水と年比の友なりしが、如水の許に來りて、諸將の尊崇大方ならず。殊に夜中に密談も候とて世  
 の疑ふ事も候なり。就中三河守卿親の如くに敬はれ候。旁、徳川殿怪しみ思召す處なり。徳  
 川殿遠き慮有る人なれば、此方に心安く立入る人の中にも、如何なる目附をか設けられたらん。  
 筑前守の武略徳川殿の賞恩淺からず候に、斯くては筑前守の爲に悪かりなん。徳川殿頼に用心  
 有るも皆如水を恐れての事なりと人も申し候。猶又醍醐、山科、宇治に浪人夥多居候も、如水  
 の隠し置きたると人々疑ひ申すなり。如何に、と申されけるに、如水聞きも敢へず、内府を攻止し、  
 天下を取らんと思はんには、いと易き事なり。筑紫をば皆打平けたり。島津のみ残りしかばあつ  
 かひを懸けて味方とせん。若し楯つかば攻破らん事尤易き所なり。中國、備前、播磨まで皆  
 空國にて有りしかば、我其頃二萬餘の軍兵を率ゐ、加藤、鍋島は既に我に隨從すれば、兩先陣

として海陸二手に分ち、道すがら浪人共を驅集めん十萬は有るべし。清正は猛將なり。吾旗  
 本に有りて攻め上る程ならば、内府を討滅さん事掌の中に有りと覺えたれ共、我年老いぬ。切  
 從へし國を捨てて京に上りしに、臆病者共の痴にて、色々の事に恐れて言ふ事を誠と心得られ  
 たるや、とて扇を抽いて疊を打つて大言せられしかば、禪高兎角の詞無くて歸られけり。

# 常山紀談 卷之十六

## ○浮田秀家八丈島へ配流の事

備前中納言浮田秀家は、關ヶ原の時一萬八千を帥しゅらるれしが、軍敗れて近江の伊吹山に懸り落ちられし。美濃の白樫村に暫し隠れて有りしに、遂に忍びて西國に落下り薩州に著かれしに、其事聞えて東照宮死罪一等を宥めさせ給ひ、八丈島にぞ流されける。まことに苦蕒くさかく庵いほ竹編たけあめる戸とに、雨もたまらず風も防がねば、黒木の柱を削りて書附けらる。

もしほ焼くうきめかる身は浦風のとふばかりにやわぶと答へん

其後芳烈公朝臣備前に御座しましける比、兒島一説西の商船風に放たれて八丈島に到りけるに、秀家九十餘まで存命へて居られしが、故郷の者とて、いと懐しげに様々の物語して、秀家、備前には誰か有る、と問ふ。新太郎少將と答へ申すに、誰が事ならんとて家老の姓名を聞きて後、さては池田の家にて有りけるよ。又所々に城多きや。城の北に伊勢の宮を設け置きたるが如何なるぞ、と問ふ。伊勢の宮は候。されども土の家幹と相並び續きて候、と答へ

ければ、さては世は治りけり。亂世ならんには國境の城に士を分ち置き、岡山には土の家多かるまじきに、今の有様にて治まれる趣を知りたり、と言はれしとかや。

われこそはにひ島もりよおきの海のあらし波かぜ心して吹けといへる後鳥羽帝の御製を短冊に書きて、彼の船人に與へられけるとぞ。

## ○小早川隆景遺訓の事

安藝中納言毛利輝元は、關ヶ原の時秀家と共に徳川家に弓箭を取られしかども、關ヶ原に自ら赴かざるの故に、安藝、備後等の國を削られ、長門、周防、兩州を賜はりけり。是より前小早川隆景遺訓して輝元を諫められし中に、毛利家五十餘郡を領し、富貴誠に溢れたりと言ふべし。此より後苟にも國を食ふ心有らば忽ち滅ぶべきよ、と戒められしに、輝元、隆景の戒を忘れ、果して國を削られたりき。隆景先見の明かなる露も違はざりけり。隆景は武勇のみに非ず智謀に優れたり。父元就、病重くなりて其子を集め、兄弟の數程箭を取寄せ、多くの箭を一つにして折りたらんには細き物も折難し。一筋つつ分ちて折りたらんには容易く折るよ。兄弟心を同じくして相親むべし、と遺言せられしに、隆景その時、争は欲より起り候。欲をやめて義を守らば

兄弟の不和候まじ、と言はれしかば、元就悦びて、隆景の詞に従ふべし、と言はれしとぞ。秀吉九州を討平けられて後筑前五十萬石を小早川に與へられしに、隆景之は吾に過ぎたる事なり。此頃まで敵なりし身に大國を與へらるゝは、吾を愛するに非ず。九州を懐けん爲の假の謀よ、と思ひて秀詮に國を譲り、備後の三原に引籠られしとなり。

○佐竹義宣國替の事並車野丹波が事

佐竹右京大夫義宣の士大將車野丹波は剛の者にて、白練に火の車を書きて指物とす。關ヶ原の亂に、義宣、上杉に心を合せられしかば、

義宣四萬の軍を率ゐ、水戸の城を出で多珂郡に到る。是上杉の加勢の爲なり。然れ共父常陸介義重は元徳川家に心有りしかば、強て諫められし故、義宣も兵を水戸に返されしとぞ。伏見にて義宣の八十萬石を六十萬石削られ、出羽の秋田二十萬石賜りけり。若辭むならば其儘討亡すべき體なれば、義宣北國を経て秋田に赴きけり。水戸の城を奪ひ取れ、とて本多正信等向ひける時、車野組に附きし士六人と俱に物具し、新羅三郎より傳へたる城を人に授けん事こそ口惜けれ。我と思はん人々は城を枕に死ねや、と呼はり、城中に駈入りしを、大手にて本多等、

大軍にて押包み生捕りて磔にかけ、火の車の指物を括り添へけるを、東照宮聞し召し、武家の道を知りたる者を空しく殺しけるよ、と歎かせ給ひけり。

駿府にて東照宮御物語の序に、篤實なる人は世に稀なり。我年老ぬれ共多くは見す。佐竹義宣其人なり、と仰せられしを、永井右近大夫直勝承りて、如何なる故にや、と申すを聞し召し、石田治部と七人の大名と大坂にて争論の時、義宣と三成と元より親有りし故、三成を打具し伏見に來り、其後三成佐和山に歸る時、七人の面々道にて討取るべしと言ふ由を聞き、三河守を添へたりしに、義宣、三成を討たせては生甲斐無しとて道々に物聞を出し、其身は物具して、告げ來るを待ちて打出でんと用意有りしと聞く。是篤實に非ずや。關ヶ原の亂の時も大坂より頼みたる故、吾に其由を告げて何方にも組せざりき。逆亂に與したるには非ざれ共、捨置難くて先祖より已來の國を削りたりき。篤實の善き事いふに及ばずと言へ共、國の存亡に關るべき事には、又一思慮有るべき事にや、とぞ仰せられける。

○杉原常陸智勇の事

上杉家の士大將杉原常陸は、智勇備りたる人なり。東照宮宇都の小山より引返させ給ふ時、上



杉家の軍兵共大に勇み合へりしに、杉原獨眉を擧めて、大敵に恐れて引返したりと思へるは其人を知らざる詞なり。徳川殿諸將を率る先づ上方に攻上り、石田を討たれんに、十に八九石田敗北すべし。其時殿一人にて如何で徳川殿に打勝ち給ふべき。敵國に攻入らずして引返したるは味方の不幸なり、とぞ云ひける。

杉原白石の城を守りしに、何の時の事にや、伊達政宗不意に押寄する事あり。政宗の物見の士馳歸り、敵は静り返りて、唯町家に火の用心厳しく呼はり候。物具したる武者杉原かと覺しくて城門を開かせ、將机に懸りて待居たる、と言ひければ、政宗謀有らんと恐れ引返されけり。

○前田慶次が事

前田慶次利大忽々齋と號す。加賀利長と從弟なり。

一説に、利大は瀧川儀大夫が妻懷胎にて離別し、利家の兄藏人に嫁して、前田家に生るといへり。

前田の家を立去りて、

利大は文學を嗜み様々藝にも達せり。滑稽にして世を玩び、人を輕んじける故、利家教訓せらるゝ事度々に及べり。利大大息吐いて、假令萬戸侯たりとも、心に任せぬ事有れば匹夫に同じ。出奔せんと獨言せしが、或時利家に茶奉るべき由言ひしかば、悦びて慶次が許に來られしに、慶次水風呂に水を十分に湛へて隠し置き、湯風呂の候。入給はんや、と横山城守長知をもて言へば、利家、よかりなん、とて浴所に至る。慶次自ら湯を試みて、よく候、と言へば、利家何の心も無く風呂にゆかれしに寒水を湛へたり。利家、馬鹿者に欺れしよ。引來れ、と言はれしに、慶次松風といふ逸物の馬を裏門に引立てさせて置きたりしに打乗り、出奔しけるとぞ。又京にて夏の比馬を川入に遣りけり。馬取の腰に烏帽子を附けさせたり。道にて往來の人立止り、太く逞しき馬なれば、誰の馬にて候、と問ふ。則烏帽子を著足拍子を踏みて、此鹿毛と申すは赤いちよつかい皮袴、茨がくれ鐵甲鶏のとつさか立烏帽子、前田慶次が馬にて候、と幸若の舞を諷ひて引き通る。見る人の問ひし度毎に斯くしけるとなり。上杉景勝に仕へけり。

初て目見する時、土大根三本臺に据ゑて出しけり。

朱柄の鎗を持たせしかば、何故ぞ、と咎むるに、父祖より持ち來りし、といふ。水野藤兵衛、葦塚理

右衛門、宇佐美彌五右衛門、藤田森右衛門、年久しく朱柄の鎗持せん事を望み申せども許されず。然るに慶次を制禁無くば、四人共に許され候へ、と訟へて許されけり。直江山形に攻入り引返す時、最上義光大軍にて追駈け、洲川にて軍有りしに、義光旗本を引いて切つて懸り、合戦數刻に及びけるに、上杉勢引取り兼しかば直江怒つて、我大將として此口に向ひ、後を取る事口惜きよ、とて悶え怒りけるに、慶次馬の前に立塞り、爰は我に任せられ候へ、と言ひ捨て、敵味方睨合ひたる處に馬を乗りかけたり。杉原常陸は先陣に有りて種ヶ島の鐵炮を下知しけるが、慶次に下立ちて懸られよ、といへば、馬より飛下りたり。慶次其日の出たちは、黒き物具に猩々緋の羽織を著、金のいら高の珠數の房に金の瓢箪附けたるを襟に懸け、山伏頭巾にて十文字の鎗を持ち、黒の馬に金の山伏頭巾冠らせ唐蹴懸けたり。前田慶次、と名乗りて懸りける處に、水野、葦塚、宇佐美、藤田四人も同じく鎗を引提げ、喚叫んで念無く敵を突退けたるに、杉原種ヶ島鐵炮二百挺、小高き所へ押上打たせし故物別せしかば、慶次下知して引取りけり。

慶次指物練に大ふへん者と書きたりしに、人々、あまりの事よ、と言へば、慶次、汝達は武邊とよみたるや。我落ぶれて貧しければ、大不辨者といふ事なり、と戯れしとかや。

上杉家祿知削られし後、士多く暇を取りて立去りけるに、慶次を七八千石、一萬石を以て招く大

名あり。慶次、我此度の亂に諸大名表裡の心見限りたり。景勝ならで我主君とすべき人なし。扶持し置きて賜はれ、とて五百石の祿にて民間に引込み、風月を樂み歌學に心を寄せ、源氏物語を講じて世を終れり。

○出羽國長谷堂合戦上泉主水討死の事

上泉主水憲元は甲斐の武田の家にて、劍術の上手上泉伊勢が弟なり。譽有りし者なるが、京の相國寺の内に落ぶれ身を寄せ居しを、秀吉の時直江景勝の供して京に至りしが、傳へ聞きて對面し、様々上泉をもてなし、會津は遠國なれども景勝三千石の祿進らせんとなり、と言へば、上泉、斯る身に思ひも寄らぬ詞を承る、とて仕へけり。直江出羽に押入る時、上泉も二千五百の將たり。最上方には、上の山より幡屋まで二十四ヶ所に出城を設けたるに、直江は眞直に山形に進んで攻め取らんと謀りける所に、幡屋より春日右衛門に親有る者の返忠せん事を言ひ送る。直江悦んで山形に進む兵を押止め、山路にかかり幡屋に寄せんとす。軍奉行杉原常陸、春日右衛門が一陣を以て幡屋に進め、惣軍は山形に攻入りて然るべからん。敵我に利を與へ嶮岨にそびき入れ、其隙に山形の要害を能せん謀なり、と言へ共、直江元より杉原と中よからざれば、我は

唯易きに就かん、とて聞入れず。懸て幡屋を取圍み、一時攻に乘破りけり。

一説に、長谷堂より内通の事を言ひ送りければ、直江大に悦びけるを、杉原、是は赤松圓心が白旗の城にて、新田左中將を欺きたりし謀なり。斯くいうて山形の要害を構へん謀なり。只山形に攻入るに如じ、と言へども、用ひずして長谷堂に押寄せけるに、内通の事は偽なりし故、直江、欺かれたり、といへり。

夫より出城を只一日の中に二十一ヶ所攻落し、さらば山形に押寄せん、といふ。上泉が曰く、山形は勝れて要害能く、西南は沼なり。東北は石壁高く、柵の木七重有り。矢倉二十餘所に構へ、且義光は先祖より數百年此地に有り。士卒に物慣れたる者多し。力攻には思ひも寄らず。所々の小城數多攻取りたるにて勇氣を示し、軍を返されん事然るべし、と申す。直江嘲笑ひ、軍を出せしは山形を攻めん爲なり。今更山形の要害能ければとて、引退くやうやある。汝は淺黄じなひの差物指して、利根川二本木の先陣せられしによりて、關東にて夫を憚りて、淺黄じなひを指す者なしと聞きたりしにも覺えぬ事をいふ、と罵りければ、上泉、口惜しき事なりと思ひけり。直江は進んで菅澤山に陣したり。此處も長谷堂より十九町なり。義光も二萬餘の兵を率る山形を出で、長谷堂の山の尾崎稻荷山に陣す。長谷堂には山形の加勢も來り要害よければ、容

易く攻め難し。討つて出でての軍は危し、と制しけるに、大風右衛門二百許にて切つて出で、上泉が陣へ向ふ。上泉大勢にて押包み、剩さじと戦ひけるが、大風僅に打ちなされ、切脱けて城に入りぬ。伊達政宗も軍を出し、先陣長谷堂の城下に押來り陣を取りたり。直江は、大風を討得ざる事残り多し。此城を唯一時に打破れ、と下知し、城際に攻寄せたり。直江高き所に打上り、石火矢を透間も無く打懸けたるに、只千雷の落懸るが如し。志村伊豆、鮭延越前、此處を専途と追出し追込まれ、相戦うて其日も戦ひ暮しけり。直江又三千餘を城の後の山に上らせ、鐵炮を打懸くれば、城よりも切つて出で死傷數を知らず。直江軍兵を分ち四方を燒働す。所々に軍あり。長谷堂の城下に大なる油谷に堰をして、水を堰き湛へたると覺しければ、物見の兵を遣し、又一陣を以て燒働す。城中よりひた曹八百許切つて出でしかば、直江使を以て、引取れ、と下知すれども、睨み合ひて引退かず。使も行止まりて歸らざれば、次第に軍兵行重り鐵炮を打合ひければ、直江、杉原に疾く軍を引上げられよ、と云ふ。上泉、我こそ行かめ、と言へば、杉原、進むは年若き人の業、引揚るは老年の我に協ひたり、とて同心せざるに、上泉、存ずる子細の候、と言ひも敢ず馬を乗出しければ、組に附けられし大高七左衛門、馬を乗附け上泉を引止め、士大將の只一騎にて駈出るやうやある。有るべくもなし、と言へ共耳にも聞入れざれば、大高も續いた

り。前田慶次、宇佐美民部、上泉が陣に行き、一陣の大將敵に乘入るを、他處に控へたるは士の本意に非ず。いざ懸られよ、と言へ共進む氣色の見えざれば、前田を始め二十騎許駈向ふ。上泉、大高は馬より下立ち、面も振らず鎗を打入れ突合ひたるが、念なう敵を突退け引取らんとする所に、政宗の兵三百許横合より切つて懸りければ、上泉兼て直江が詞を怒りたりし故に、一足も引くまじと思定めたれば、又合戦を始め、火出づる許に戦ひけるが、敵味方討たる者多し。前田、宇佐美を始め大剛の者共數度切つて懸りしかば、政宗の兵三十餘人討たれたり。斯る處に政宗の士大將石川彌兵衛、崩るゝ味方を盛返し又打つて懸る。前田已下立堪へ、懸りつ返しつ散々に戦ひけり。直江、日も暮かゝり進み難し。疾く引きとれ、と下知しければ、上泉、心得候、と言ひ捨てて敵に向ひ、上泉主水といふ剛の者打取候へ、と名乗かけ、死狂に數十人切伏せ、終に其處にて討死しけるを、首をば金原加兵衛取つたりけり。上泉三十四歳とかや。上泉主水と胃の眞向に琮嵌にぞしたりける。是より上杉勢亂れ立ちて敗北すれば、義光、政宗勝に乗り、剩すな、と追つつむる。芋川縫殿、村上國清四千許、横合より懸らんと陣を整へ控へたるを見て、踏み止りければ、又取つて返し追立てて、夫より物別す。石坂與五郎、蓼沼日向、前田慶次、宇佐美父子、物具に立所の箭各七つ八つ折かけ、鎗は突きのがめ、刀は刃さゝらの如く斬りなし、人

馬共般に染みたるが、上泉が組の控へたる前を乗通るとて、各大將主水を捨殺し、男子の交はなるべからず。大高七左衛門のみ士なり、と罵りて打過ぐるに、答ふる人無かりけり。

○伊達上杉陸奥國松川合戦の事附永井善左衛門岡野左内が事

慶長六年四月、伊達政宗奥州景勝の地を斬取らんと、百姓を問者にして怠を伺はれたり。松川は阿武隈川の枝川にて、伊達領の境なれば、本條出羽守、甘粕備後、岩井備中、杉原常陸、栗生美濃、岡野左内、五千許にて守りけり。政宗は國見峠を踰え、信夫郡より瀬の上の川を涉り、五千の兵にて梁川の城を押へ、松川を指して押寄する。物聞共斯くと告ぐれば、本條出羽、城を出で、川を渡してや戦ふ、川を前にして半途をや打たん、といふ處に、松木内匠、敵不意の利を謀りて押寄せ候に、味方川を渡りて待ちかけなば、政宗思ひしに違ひて必ず引退くべきなり。川を涉らんこそ能かりなめ、といふに、栗生同心せず。此川中窪にて極めて渡す事容易からず。政宗涉らん處を半途を打つに利有らん。岡野、否々敵大軍なり。爰に待たんは敵を恐るゝに似たり。勇士の志に非ず。疾く川を渡して待設せん、と云ふ。栗生、孫子に、以少合衆是曰北といふこと有り。小勢にて無謀の軍せんは、大敵の擒とならんは必定なり、といふ處に、甘粕備後、杉

原常陸も馳來り、先物見を出せ、とて、猪俣主膳、本庄段右衛門、井筒小隼人、乗り行きて馳歸る。猪俣は、政宗川を渉らじ、といふ。二人は、政宗川を渡さん事半時許もや有らん、といふ。子細を問ふに、猪俣、敵馬の杵を取らず障泥を外さず。羽壺を常の如く附けたり、といふ。井筒本庄が曰く、我等見し所も同じく候。されども政宗未だ來らず。其間五六町許もや候らん。政宗川際に押寄せて其支度せんに、何の時刻を移すべき。且小荷駄を遠く引退けたれば、戦ひを持ちたる敵なり。政宗二萬の軍兵を帥るて寄來り、空しく引返すやうや候、といふ。さらば川端二町許置いて陣を整へて敵を待たん、といふ所に、岡野は切支丹を信する人なるが、南蠻人の贈りける角榮螺といふ冑を著、眞先駆けて川を打渉す。栗生、甘粕、川を渡るべからず、と下知すれども、布施次郎左衛門、北川圖書、小田切所左衛門等二十騎許、眞幕に川に乗入り打渡す。宇佐美民部鎗を横たへ、残る兵をば押止めてけり。斯れば政宗押來り、先陣片倉小十郎透間も無く切つて懸る。岡野四百許眞丸になりて鎗を打入れ、面も振らず喚き叫んで戦ひけれども、大軍に取圍まれ、左内僅に打ちなされ、切りぬけて引退く。北川馬の首を立直し小田切に向ひて、唯今討死せん。會津に残し候十四歳なる吾子を囑申すよ。是を形見に送りて賜はり候へ、とて猩々緋の羽織を脱いで小田切に渡しければ、小田切、若萬死に一生を得候ならば慥に送り候べし、と

て羽織を腰に挟みけり。北川、今は思ひ置く事無し、とて追ひ來る敵の中に駆入りて切死にしたりけり。是を始として歸し合せ、火を散して戦ひけるが、討る者多し。政宗勇み進んで追駈けられしに、岡野猩々緋の羽織著て鹿毛なる馬に乗り、支へ戦ひけるを、政宗、馬を駈寄せ二刀切る。岡野振顧りて、政宗の冑の眞向より鞍の前輪をかけて切附け、反す太刀に冑の鏝を半かけて斫り拂ふ。政宗刀を打折りてければ、岡野すかさず右の膝口に切附けたり。政宗の馬飛退きてければ、岡野、政宗の物具以の外見苦しかりし故、大將とは思ひも寄らず。續いて追詰めざりしが、後に政宗なりと聞きて、今一太刀にて討取るべきに、とて大に悔みけるとなり。岡野は川へ乗入れたるに、政宗、又十騎許にて追駈け來り、穢し返せ、と呼はりければ、岡野振顧りて、眼の明きたる剛の者は多勢の中へ返さぬ者ぞ、といひて岸に馬を乗上げたり。宇佐美兵左衛門十六歳、松川の向ひの岸にて危く見えしかば、父の民部馬を川に打入れたり。栗生、如何に先には川を渉る者を止められしが、何事に渡され候や。名將の宇佐美駿河守の子息には如何に、と問ふ。民部、謀も心より出候。あれ見られよ。一子の兵左衛門向の岸にて早討たれぬべく見ゆれば、心の亂れたるぞや、と言ひも終らず川を渉り、打連れて引返す。栗生は陣を整へて待ちかけたれば、片倉が軍兵を追崩し川に追ひたす。されども大軍見る内に重り攻寄せしかば、

上杉勢は福島を指して引退く。福島に至りて行程のなかに、道十八里なりといへり。政宗、何處までも剩すな、と馬煙を立てて追ひかけしかば、物具を道に捨つる事数を知らず。息切れて行倒れたる者も有り。持鎗の長き柄は持堪へ難くて、多くは捨てけるとぞ。青木新兵衛、永井善左衛門を

永井善左衛門は世々徳川家に仕へけり。小田原の城を圍まれし後、如何なる故にか有りけん。蒲生氏郷に仕へ、其後上杉家に奉公しけり。優れたる剛の者にて、奥州福島口にて物見に只一騎出でたりしに、伊達政宗の伏兵六人起りて取包みしを、四人討取つたり。長篠にても太刀打して首を取りたるが、右の指に手負ひ刀を取落せしを、取りたる敵を追詰めて、又討取りたる程の物師なり。其後其疵を問へば、馬に喰れたり、と答へしとぞ。斯の如く功に誇らぬ人なり。後御旗本に歸り仕へて御旗を司りき。善左衛門浪人にて上州深谷に閑居して有りける時、人の輿へし瀬戸の茶入を祕藏せしに、下女取落して打破りぬ。下女驚きて、我鏡臺より五倍子を入れたる壺を取り出し、是にて代に奉らん、といふ。用にも立たぬ物なれども、是を請取り置きぬ。後に小堀遠江守見て手を打ちて、是は唐物の肩衝なり、と稱美し、後に公に奉りしとなん。板倉勝重懇なりしかば、將軍家に御断を申さん。御上京の折京へ來られよ、といひ越されしかば、深谷を出でて平安に赴く時、浪人を伴ひけ

り。名護屋に親族有りて立寄りける際に、俱ひける浪人、己が刀を永井が指替の刀に取替へ、駈落しぬ。永井詮方なく京に着きて後、死罪の者有りけるに試みんとて刃を附けさするに、錆びて金色も見えわかず。研師刃を附けて、此刀の如き刀の刃會て心に覺えず、といふ。斬罪の場にてふじ身の者有りて切れざりしに、かの永井が錆刀にて切りたりしに、物に障る事なきに似たり。能研ぎて見れば優れたる物にて、銘は正宗と切りたり。本阿彌に見すれば、正宗の中にも殊に最上の物なり、といへり。是も將軍家に奉りて、永井正宗と號せられしとなり。

始として、大剛の者共馬を返しては追散し、取つて返しては突拂ひ後殿しけり。青木は小丈なる馬に乗り、柄の短き鎗なりし故、殊に乗り退り幾度となく支へ戦ひけり。甘粕備後は上杉家に勝れし勇將なるが、白石の城を守りしに、會津に行きたりし跡にて、登坂逆心して白石を敵に取られし事を口惜く思ひしかば、今日取分きて引退り、取つて返して追退け、勇氣を顯しけり。福島下の川を渡る時、政宗の兵彌追詰めて、我先にと川に打入れたるが、永井を後より三刀切る。永井度々の軍に戦ひ疲れ、大軍打渡す川音に紛れ此を知らず。青木は烏毛の棒の出しにて黒き母衣懸けたるが、乗寄せて敵を追拂ひ、川岸に打上りて永井に斯くといへば、驚きて

從者に見すれば、母衣に三刀、鞍にも刀の痕あり。永井、今日は助けられし、とて一禮をぞ述べたりける。小田切も敵に取圍れ、あはや討たれぬと見えしを、青木又駈寄せて敵を追拂ふ。岡野は旗押立て靜に福島城に入り、甘粕、栗生も引入りければ、政宗廳押寄せたるに、殿の兵共柵を踰えて城に入りたりしに、青木は柵を越え兼ねて只一騎控へ居たる所に、政宗馬を駈寄せたり。青木十文字の鎗にて政宗の冑の立物三日月を突折りしかば、政宗馬に諸鎧を合せて駈通られぬ。青木後に政宗と聞きて、今一鎗にて突殺すべきに、口惜き事よ、とぞ言ひける。斯る處に築川の城より須田大炊助長義討て出で、政宗の兵阿武隈川を前に陣しけるが、此川奥州第一の大河なれども、須田は能く地の利を知り、兵を一陣に分ち、須田は川上に打上りけるを見て、政宗の兵二つに分れて防がんと色めく所を、一文字に渡して斬り懸る。敵敗北しければ、物具を始め多く分捕にせし中にも、伊達家に傳へし幕を、須田宇平次、中村仙右衛門奪取りてけり。須田今年二十三、之より武名殊に世に高く聞えけり。政宗は松川にて、後に敵出でたりと聞き引退く處を、本庄越前又駈出でて川を渡し追駈ければ、政宗敗北し、信夫山に掛りて引退く時、景勝後卷に打出でて紺地に日の丸の旗山の上に見えしかば、政宗取る物も取敢ず仙臺に引返されけり。後に政宗使を以て、攻取りたる白石の城と幕と取換へん、と云ひ送られしかば、景勝聞き

て、白石の城は鋒にて攻取られ候、幕も亦吾士卒の骨折りて取り得候へば、重て幕をも鋒にて取返されよ、と答へられし後、小城一つ攻落されしは恥に非ず。昔より名將も城を敵に攻落されし事無きに非ず。武器を取られし事は弓箭取る身の大なる恥なれば、政宗我を謀りて斯く云ひしなり、と笑はれけり。台徳院殿上杉の館に御出有りし時、彼の九曜の幕法華經の幕を既に打たれしとぞ。其後政宗、岡野に逢ひたりし時、松川の軍の有様語り出して、汝を斬りつるは忘れじ物を、といはれしかば、岡野、大將の刀の跡と存候て、金糸にて縫合せ、家の寶とせん。と存ずる由言ひて、羽織を政宗に見せければ、政宗悦ばる。其時岡野、冑の鍔を吹返しかけてなぐり切にしたりき、と申しければ、政宗色を變じ、物語を止められしとかや。

岡野は元蒲生家の士なりしが、上杉家に仕へけり。富有なる人にて、儉を好み奢を憎む。一月の間二三度も金銀を山の如く積み、其中に臥して慰としけるを、聞く人誹合へり。或時岡野例の如く金銀を並べて見居たりしに、近きあたりの士争をし出し、方人の者共數多駈寄りて騒ぎしに、岡野聞くと否や正宗の刀を提けて走り行き、一日一夜其家に有りて、事能取抜ひて歸りけり。岡野が馬取の下部、大板金一枚持ちたりと聞き及び呼出して、汝が志こそ由々しけれ。人は貴賤に依らず、貧くしては義理の爲すべき事も心許にて叶ひ難し。能

く心掛たり、と云ひて黄金百兩與へけり。景勝會津に兵を起す時、永樂錢一萬貫文を獻じ、朋輩の親しみ深き人々には數多黄金を分ち送りけり。軍の仕度に入人々は犇めきけれ共、岡野は、猿樂に舞踏れ、とて騒がず。人に語りて、日比は武備に怠らず。猿樂ども世の豊なる時は諸方に招かれて暇なし。今人々あわて騒いで、彼者共暇あれば玩に招きたるよ。軍に臨む者生きて歸らんと思はず。されば今生の樂と思ひて慰み候、とぞ云ひける。又政宗福島之城を攻め取らんとて、木幡四郎左衛門、百騎許にて城近く働きけり。岡野井樓より見、大物見なれ共、三陣に分りたるは軍を心懸けたり。兵を出すべからず、と言ひけるに、鈴木彦九郎、寄せ來りし中に政宗有るべし。喰止めて討取らん、といへば、尤なりとて兵を出し、先陣二十騎許次の陣に一にならんと色めく所を、鐵炮を打かけ、煙の下より左内一文字に切つて掛り、遂に木幡を討取りければ、景勝度々の功を賞し、謙信武功の輩に姓名を與へられし例により、左内を越後と更められけり。政宗三萬石にて招かれしか共、舊主の好忘れ難しとて、蒲生秀行に仕へ猪苗代の城に有り。下野守忠郷の時死しけるが、金子三千兩正宗の刀を遺物に獻じ、忠郷の弟中務にも金子三千兩、景光の刀貞宗の小脇指を形見に進らせけり。年頃人に貸しける金銀の手形證書の大なる箱に有りしを、皆焚捨てたりしとぞ。

○石田が子の僧助命の事

關ヶ原の亂收りて後、東照宮本多正信を召して、石田が子、妙心寺の内永壽院が弟子にて僧となりしを、寺中一同して、重罪の人の子なれ共、幼き時より出家したる者なれば赦され候へ、といふは如何に、と仰せ有りければ、正信、疾くにも御赦されの有るべき事に候。治部は徳川の家に大功をなしたる者なり。治部由無き軍を起し、西國中國の大名を語ひ候ひしに、一戦に打負けたる故にこそ、日本六十餘州皆徳川家に歸服致し候へ。治部が存立ちしより斯く日本は從ひぬれば、徳川家に大功を成したるには候はずや、と申しければ、東照宮、汝が理屈もさる事なり、と仰せられて、かの僧御赦されを蒙りければ、岡部美濃守宣勝懇にして、和泉の岸和田にて終りけるとかや。

○越後國一揆堀直寄武功の事附千利休が事

關ヶ原の亂の時越後に一揆起り、堀左衛門督秀治が臣小倉主膳が下倉の城を攻むる。堀監物が子丹後守直寄、坂戸の城にて斯と聞き、後卷に駈向ふを、敵引違へて坂戸を攻めば如何あらん、



と云ふ者有り。直寄未だ下倉を救はず。敵此城に攻め來らば、敵の旗先をだに見ず口惜かるべし、と言ふより早く打出でて下倉に向へば、小倉も門を開きて切つて出づ。直寄後より一文字に突懸り、一揆の長田丸右京を打取りたり。此告を坂戸にて書かする時、勝利を得候、と書かせしかば、如何あらん、といふに直寄嘲笑ひ、打負けば戦場の土とならん、と云ひて出でられけり。一揆柿崎、齋藤已下五千許猶山に據り、前に平田を當てて陣しければ、直寄、昔太閤の前にて、允長老の孫子を讀みしを聞きたるに、兵以正合以奇勝といへり。吾今日奇を以て軍すべし、とて、山中數馬、速水織部に馬印を渡し、直寄は六百許引分けて林の中に待ち居たり。一揆馬印を見て進み來る時、林の中より嘯と駈出で、直寄眞先に進みて思ひも寄らぬ不意を討つ。一揆二百餘討取つて切崩したり。東照宮御感狀を賜りぬ。此年二十四歳とかや、後に十萬石を賜りけり。

直寄は秀政の長臣堀監物直政の次男なり。十三歳にて陪臣なれ共太閤の小姓に召出され、左右を離れざる寵臣なり。初三十郎といひけるが後丹後守と稱す。太閤或時茶室に入りて火を點し炭を入る時、千利休が幽靈現れ來て黒き頭巾を冠り、爐の傍に座し居たるが、眼の中より光生じ息に火を吐く。左右に有りける侍女恐れ合へるに、太閤炭を入れ終りて、無

禮なり、とてはたと睨まれしかば、利休が形退きて坐す。太閤常の居間に出で、丹後守を呼んで、化物數奇屋に有り。叱り來れ、と言はれけり。直寄今年十五歳なり。即ち行く時、廊下の窓戸皆閉ぢて、儲數奇屋に入りて見れども何も無し。歸りて斯くといへば羽織を與へらる。利休は茶の湯を好みて世に名あり。天正十八年、秀吉南禪寺より黒谷へ出でらるゝ山際の際にて、女房の下部に破籠持せ、山々の花を眺めて靜に來りしが、秀吉の先拂の者を見て、花の木蔭に立隠れたるが、言ふ許無く美麗なりしを、問はるゝに、利休が女にて鵲屋に嫁し、今は獨住なる山聞きて、宮仕へさせよ、と強ひて呼び出されしに、夫に別れし後悲しみの涙乾かず、とて従はず。利休に強ひられしに、女を商したりとて人に言はれんが口惜し、とて出さず。秀吉利休を憎まれしに、利休木像を作り大徳寺の山門に置きたり。太閤、山門は天子を始として通らせ給ふ、頭上に然する事無禮なり。且茶の器の價に就て私有りと聞く、とて天正十九年一月、利休を誅せられけり。利休小座敷に茶の湯をしかけ、弟子の宗巖と常の如く茶の湯終りて、夫々に形見を分ち遣りて後自害しけるとぞ。直寄幼少の時、紙手兒、土手兒、雛様の物を玩びて、人の贈るにも他の物は悦ばず。されば人毎に贈りける程に、大なる籠に入れて有りしを、人々怪み思ひけるに、常に人無き所に彼の手兒を並

べ、武者押陣取をして戯れ悦びしとぞ。

○世間太兵衛伏兵を知る事

越後の一揆三條の城に寄する時、道に伏兵したり。溝口伯耆守宣勝兵を出して三條に赴くに、世間太兵衛先陣せしが、小川の脇に新しき糞の有るを見て、此邊に兵を伏置きたるならん、とて捜しければ、伏兵駭きて逃げけるを、追駈けて百餘人討取りたり。

常山紀談 卷之十七

○真田昌幸父子三人始末の事

真田安房守昌幸は、海野小太郎幸氏二十一代の末なり。父海野彈正幸隆信州真田に居て、真田氏と稱す。武田家の臣となる。嫡子源太左衛門信綱は長篠にて討死す。一男武藤喜兵衛昌幸と云ふ。長篠の後高坂彈正五ヶ條の諫を申しける。其一條にて、昌幸に兄の家を嗣がせられけり。父の幸隆後一德齋と號す。昌幸信立の近習にて、十八の歳川中島にて鎗を合せたり。天正十年勝頼諏訪に陣し、四方より敵來りし時、昌幸、吾妻の城に籠られよ、と言ひけれども、長坂長閑其謀を用ひず。勝頼郡内に赴きて死して國亡びぬ。北條氏政兵を出して甲府を攻取らんとする時、昌幸徳川家に屬し、依田信蕃と碓氷嶺に陣して北條の糧道を塞ぐ。東照宮北條と和平し給ひ、上野の沼田を以て、甲斐の都留、信州佐久二郡に換へらるべし、と約あり。是より前昌幸沼田の城を攻取りて要害の地とせり。真田に上田を與へ、沼田をば氏政に渡すべき由仰せ出さる。上田は元より信立以來真田が居所なり。昌幸、我徳川家に功有りと雖も、僅に上田と沼田を賜はりぬ。

賞甚薄しと思ひて辭し申しけるは、沼田は賜り候地に非ず。吾録にて取り得たれば、故無くて人に與へん事叶ひ候まじ、と申しけり。豊臣家に屬すべき由を云ひ送りし其折柄、秀吉、東照宮の上京無き事を怒りて此を悦び、密に上杉景勝に、眞田に力を合せよ、と下知せられしかば、千六百の兵を眞田が許に援とす。東照宮、眞田は奸謀有る者なり、と元よりの憎ませられける上、無禮の答を怒らせ給ひ、大久保七郎右衛門忠世、鳥居彦右衛門元山、平岩七之介親吉、柴田七九郎康忠を將として、七千の兵を以て上田を攻めさせらる。昌幸、城より一里許隔てたる加賀川を敵渡る時、半途を打つべしと思ひけるに、甲州の浪人板垣修理、假令敵の半途を討つて利有りと、三遠の物師共なれば、敵の後陣二の見る勝有らん、と云ひければ、昌幸、尤なり、とて城に近き砥石の城に嫡子信之、天津の砦に矢津但馬を籠め置き、寄手必ず染屋半より寄るべし。弱と引受けて不意に突いで出でん、との謀なり。又城外小野山の蔭に郷民を伏置きけり。寄手進みて町口に押入り、惣郭の内横小路に柵を喰ひ違ひに結ひて簾を懸け、其蔭に伏兵を置き、鐵炮を打懸くる。昌幸思ふ處に引受け、城門三方より一同に打つて出でたれば、寄手支へ兼ねて崩れしかば討たる者多し。砥石、矢津よりも切つて懸り、郷民も揉合ひたれば、大久保十四五騎にて踏止り戦ひて加賀川まで引取つたり。鳥居は高き道を退きけるを、砥石の兵喰留めんと

て慕ひ來れば、五六町許の間に討たる者數多なり。大久保は鳥居が敗軍を見て忠世唯一騎引返し、弟平介忠孝衛門、黒き物具に銀の揚羽の蝶の指物にて、乗附けて馬より飛下り、鎗を提げて叩へたる處に、敵押懸る中にも眞先なる兵を突伏せたり。忠世が返すを見て、松平七郎右衛門を始め引返し來れり。平介は小高き處に踏堪へたれば眞田も進み得ず。其間僅十間許に過ぎざれども忠世少しもひるまず。日置五右衛門忠世が陣の前を通らんとす。平介、其こそ敵よ。三つ巻を附けざるぞ、と云ひけるに、日置如何誤りけん、味方ぞと心得て、日置五右衛門なり、と名乗りて通る處を、足立善一郎政定鎗押取り鞍の前輪を突く。五右衛門が從者鎗を取直し、善一郎を突く。平介が前を馳通らんとすれば、平介又突きけれども、從者鎗を揃へて平介に向ふ。其間に五右衛門乗抜けし處を、氣多甚六郎遁さじと追ひさまに股の端を突く。其時五右衛門振願り、川中島の加勢と思ひて危ふかりし、と言ひて駈抜けたり。忠世、平岩が陣に往きて、敵は疎に追懸來れり。我跡を詰められなば切つて懸り候べし、と言へ共、親吉、敵小勢なれども必定近所に伏兵有るべし、とて進まず。其間に昌平城に引入りけり。此日酒井與九郎殿して敵の首を取りければ、其日の一の功名なり。翌日忠世、康忠、眞田が枝城丸子を攻めんと千曲川を渡るを、眞田見て海野町へ押出し、八重原を一騎打に相働く。忠世、鳥居、平岩に、後を詰めば敵の中を取

切り討取るべし、と言へ共同心せず。真田引取りたり。味方は八重原に陣し、真田も城を出でて陣し、足輕軍有り。芝土居を築き柵を結び、荻田、働に日を送る。斯くて濱松より井伊直政、大須賀康高を始として五千餘援兵たり。されども秀吉の下知により、景勝大軍にて真田の後巻するとの聞え有り。諸將相謀りて陣拂す。昌幸が次男左衛門佐信仍或本にノブタカと訓す。大返に返して軍すべき物色を昌幸見て、信仍を制して追はざりけり。諸將歸陣の後昌幸大息吐いて、徳川殿は誠の英雄なり。加勢を以て城を攻むる色を顯したる故、昌幸其謀に陥り、防ぐにのみ心有りて、夜討朝駈の志夢にも無かりしなり。斯く謀りて不意に引取りたる事、吾計の及ぶべきに非ず、と云ひけり。其後東照宮太閤と和平なりしかば、景勝の加勢の頼みも無く、信州甲州の人々を真田頼みて、秀吉に申して徳川家に歸り屬すべき旨を申せば、御許容あり。天正十五年正月七日、昌幸、信州深志の小笠原右近大夫貞慶と共に駿府に参りて、東照宮に謁し奉る。

東照宮も昌幸が武勇侮り難しと思召して、嫡子信之を本多忠勝が婚にせん、と仰せられしに、昌幸、夫は聞き謬ならん。本多が女を信之が妻にせん事更に望みに候はず、と申す。東照宮此事を太閤に御物語有りしに、忠勝が女を養うて、今は我女なりといはせられよ、と

計られしかば、東照宮使を以て、云々なりと仰せ送られしかば、果して昌幸聞受けたりと云ふ。

斯て北條征伐の事起れり。天正十六年八月北條氏政の使として北條氏規聚樂に参り、氏政上京すべしと雖も、上野の沼田は、天正十年徳川殿と和平の時相渡さるべきを、真田恣なる事を申し、北條家志を失ひ候。早く安房守に、彼地を北條に渡すべき旨を示されなば、氏政上京せん、とぞ申しける。秀吉聞き給ひ、往年の事審に知らざる事なり。北條家に土地の事能知る者を上京せしめよ、とて氏規に暇給はりぬ。翌年坂部岡越中融成入道江雪大坂に赴きければ、秀吉事の由を聞き給ひ、真田が上州の内の所領三分二竝に沼田の城を北條に渡し、其換地には徳川家より真田に與へらるべし。同所三分一名胡桃城とも、真田已前の如く領すべき由江雪に命ぜられけり。斯くて真田が方より沼田を武州鉢形に北條氏邦に渡し、氏邦其従士猪俣能登範直を沼田の城代とせしに、田舎人にて得失の辨無く、名胡桃の城を真田が領せし事を怒り謀つて城を奪ひ取りたり。昌幸太閤に訟へしかば、太閤、北條は沼田を得ば上京すべきと約しながら、遲緩を怒られし上に此事を聞き、氏政を征伐せんと志決して、天正十八年秀吉師を出して小田原に打向はる。東山道の先陣前田利家確氷嶺に至り、上杉景勝は坂本に至れば、名胡桃を奪ひ取りし猪

侯は戦はずして城を捨て逃落ちければ、眞田信之、後伊豆守城に入る事を得たり。昌幸は去る天正十三年以來秀吉の恩顧を得しかば、大谷吉隆に申して次男信仍を秀吉の許に人質に出しけり。其後石田兵を起すの時、眞田父子三人は奥州に打向ふ途中に、石田が使來りて、秀頼公の爲に旗を挙げ候。同心せられなば信州に故主君の地甲斐を添へて參らせん。偽無き證に、とて起請文を送りけり。昌幸素より徳川家に一心有れば、さらば引返すべし、といふ。信之、是は然るべからず。内府智勇勝れたる人なり。争か容易く討滅さるべき。思ひも寄ざる事なり、と諫むれども、昌幸聞入れず。

又一説に、本多と親しむ厚く候へば、石田に與し難き由を信之申せしかば、弟の信仍女房の好に引かれ、父に弓引く様や候、と申す。又信之、西國に與せられなんに必ず軍敗れ候べし。其時父と弟との危難に逼らんを助けて、家の亡びざる様にせん、と言ひければ、信仍、西國の軍敗れなば、父も又信仍も同じく戰場の土とならん、何として助けさせ給ふべき。徳川家先年兵を出し上田を攻めし時、景勝加勢候ひし其報禮などか無かるべき。其比秀吉公和平を取行ひ給ひ、武名を世に擧げしかば、豊臣家の恩淺しと言ふべからず。唯疾く石田に同心有りて然るべし。凡家の亡ぶべき時、人の死すべき時至らば、潔く身を失ひ候こそ勇

士の本意なるべけれ。何條穢く命生きて、家の亡びざる様にせんと云ふ事や候、と争ひければ、信之怒つて、汝が詞不禮なり、とて既に切つて捨つべく見えしかば、信仍、否々只今爰にて首を刎ねられ候事は許されよ。信仍は豊臣家の爲に身を失ひ申さん志なり、といへば、昌幸聞きて、兄弟の争、各其理有り。太閤世を過させられし後此事の起れるも、必ず秀頼公の爲にする忠に非ずと信之は思へるならん。信仍が言ふ處吾思ふ所なれば、我と共に引返すべし。信之は是より心任にせよ、とて別れしといへり。又一説、昌幸云ひけるは、會津より宇都宮に至りて七日路なれ共、日の岡の徑より三日の行程なり。景勝と謀を合せ前後より攻めたらんに、伊豆守俄に裏切するならば、徳川殿を容易く討取るべし、と言ひけれ共、信之、内府は勇略百萬の人にも超えたり。味方利有らん事存じも寄ず、とて遂に兵を引分けて參りければ、東照宮、信之を召して、安房守が片手を折りつる心地するよ。軍に勝ちたらば必ず信州を賜はるべき後の證で、とて御刀の端を断ちて賜はりけるといへり。又眞田兄弟の争の處は、佐野の天妙といふ。又犬伏といふ所なりとも言へり。昌幸は、引返して沼田の城にて信之が妻に對面せん、と云ひけるに、信之の北の方聞きも敢ず、既に父子仇となりて引分れ給ひしかば、父にて御座し候とも、城に入奉りてま見え申さん事思ひも

寄らず、とて本丸の門を固めさせ自ら物具取出し、女房共皆刀を側に置きたり。厩に葦毛の馬有るべし。厨の土間に繋げ、とぞ下知せられける。昌幸聞きて、吾過なり。人々能く聞き候へ。日本一と世に云へる本多中務が女なりけるよ。弓取の妻は斯くこそ有るべけれ。此婦人有らんには眞田が家危からじ、と言ひけるとぞ。昌幸夫より須河に至り、高間越に懸りて上田に返りけり。台徳院殿木曾より登らせ給ふ時、御使を以て、禍を招かるゝにてこそあれ。降参せよ、と仰せ有りしに、昌幸聞きて、秀頼の爲に城を守り候、攻められれば一矢仕らん、と答へしかば、又御使にて、石田、小西等己が威權を恣にせんが爲に斯る企に及べり。豊臣家の恩を蒙りし人々皆背きたるを以て知るべし。猶降参無くば信之に腹切らせ、其後城を攻破るべし、と仰せ送らせられしに、昌幸聞きて、太閤恩深き人々の背き候は、此人々心の同じからざる故なり。既に子にて候信之、父と相違ひたるにて知召さるべし。信之に腹切らせられんとや。親の子を愛するは誰も同じ事に候へども、信之父と共に城に有らば、同じ枕に討死すべし。信之を助くべきに非ず、と答へ申せしかば、さらば攻めよ、とて陣を寄せらる。其日は百姓の家に込入りたりしに、榊原康政、眞田今夜必ず夜討すべし、とて物見を出し、篝火を透間無く焚かせたり。果して信仍夜討せんと支度したりけれども、康政の設によりて夜討はせざりけり。斯くて明れば九月六日押寄せ給ふ。淺見藤兵

衛只一人墮際に進みける處に、打懸くる鐵炮に朱に十二引の差物打裂れ、其身も轟と折敷き伏して味方の續くを待つ。小栗治右衛門大音あけ、淺見功名せうとて深入し不覺なせそ、と呼はるを聞き、淺見立上り、汝に先をさせんや、と言うて門に附く處に、門を開きて討つて出で、淺見、小栗、得たりと鎗を合するに、左右の出屏より打出す鐵炮雨の降るが如し。淺見が従者虎若と言ふ童剛の者にて、刀を抜き鎗の穂先を潛入りて敵の足を雍拂ふ。淺見も痛手を負ひ倒れしを、虎若足を取つて引提け持歸りけるに、淺見、小栗をも助けよ、と云ふ。虎若聞きて、主人の先途の爲にこそ來りたれ。他人を何にかせん、と云うて掻負うて引退く。淺見、差物を叩き落されたりと覺ゆ。取りて來らずば生甲斐無し、といふ。虎若、逃ぐるるとて指物を落さば恥なり。鎗を合せて落したるは恥に非ず、と言ひて念なく歸りけり。城兵山本清右衛門、依田兵部堤の上に入るを見て、寄手三十騎許馬を並べて喚いて駈寄せ、犇々と馬より下りて進み行く。齋藤左大夫、山本、依田、前につと出で名乗りけるを見ると均しく、御子神典膳、辻太郎介渡し合ひ入亂れて闘ふ。御子神は類無き早業にて、鎗を翳し堤の中にひらりと飛入る。朝倉藤十郎、中山助六、戸田半平、鎮田市左衛門、太田甚四郎、齋藤久左衛門競ひ懸りて鎗を合す。依田朱塗の物具にて戦ひけるが、深手負ひて倒れしを、御子神、辻、依田を一刀づつ切つたりけり。山本も

鎗を打折り、痛手負ひながら依田が屍を肩に懸けて引退く。寄手追詰むれば城兵切つて懸るを、中山鎗を合せ、太田弓にて指詰め引詰め射たりしかば、門に追込みたり。

太田後善大夫といふ。或時士一人太田が許に來りて、吾は眞田家の浪人にて候。上田の軍の時相手に成りたる者なり。其時射られし矢を携へ來れり、と云ひしかば、太田、斯る事は必ず側に聞く人の慥なる有りて證にすべし、とて呼入れず。近き邊に笹瀬左大夫とて武功の有りし人を呼寄せ、彼眞田が士に對面す。其人申しけるは、上田にて出合ひたりと。善大夫怪みて、一番に出たるは、髭の多く有りし大男なりき、と言へば、彼の士、能く見届けられし。それは眞田荒右衛門と申す者なり、と答ふ。其次の男は太りたる男、といふ。夫は何の佐仲と申す者なり。さて其次なり、といふ。否々夫は云々の男なりき、と言へば、夫は無極と申す者なり。偕て分明に見定められし、と言ふ。偕て其次我なり、と言へば、太田、如何にも然なりき、と言へば、其時此の矢にて射られき、とて矢を取出す。彼の者は細野權之介といふ者なり。其後善大夫申して、細野を尾張の組附にしたりとかや。

されども鐵炮を打出す事霰の飛ぶが如く、寄手の先陣地に轟と跪きてけり。本多正信下知して城をば責めず。昌幸と信仍は中の手に出づるを、牧野右馬允康成、同新次郎忠成馳せ向ふ。其

間二町許も有らんに、眞田父子八十四人の手鼓を打つて高砂の謠をうたふ。榊原、憎き奴か、といふ儘に眞先に馬を乗出す。其兵二千許後を取切らんとすれば、渡邊半藏も鐵炮を打ち懸けて進みしかば、松澤五右衛門、敵の附入心許なく候。疾く城に入らばや、と諫めて、眞田高砂の謠を終らずして引入りけり。康政、康成押續いて寄せけるを、正信、輕々しう攻めん事然るべからず、と制しければ引返す。戸田、辻等の七人を上田の七本鎗と世に申すなり。戸田は銀の鬮體の指物、辻は白き四半に辻といふ字を墨にて書きたり。信仍箭文を射させ、二人の武勇を稱しけり。此中山は極めたる馭法の上手なりとかや。

後に依田を太刀附けし一二の論あり。辻は、依田朱塗の頬當せし、といふ。御子神は、依田朱塗の冑著て頬當は無し、といふ。牧野右馬允從者を馬工郎にして上田に遣し、様々にして山本に會ひ、其時の事を問ふ。山本が曰く、此論有るべき事なり。誰人にもせよ頬當を掛けずと言ふ人初太刀なり。依田は頬當掛けざりき。急しき場の鎗下なれば、血に染みたるを朱塗の頬當と見たるなるべし、と云ひしを聞きて歸り、牧野に語りしかば、御子神一の太刀にきはまりけり。

斯くて力攻にせられれば人死傷せん。早く美濃に赴かせ給ふに如じ、と評定有り。森右近大夫忠

政を上田の押とし、台徳院殿園を解かせ給ふ。榊原殿せしに、眞田遙に見て、榊原が有様吾を侮れり。追駈けて食止め一軍せん、と云ひけるに、眞田が許に年老たる法師武者の謀由々しき有りけるが、康政程の者争で其謀無かるべき。古の兵法に、歸師勿逐といふ事の候、とて止めて追はざりけり。東照宮、榊原は必ず懸り引にすべき者なり、と仰せられしが、後に召して御尋有り。榊原承り、御大將は城に遠き山に懸りて引き給へ、と申して、臣は城下を眞直に殿仕りたり、と申せしかば、東照宮、汝必ず然らんと思ひしに、果して違はざりけり、とぞ仰せられける。石田が軍敗れしかば眞田父子を誅せられん處に、信之、此度父と引分れて参り候は、父を助けん爲に候。假令大國を賜ひ候とも何にか仕らん。あはれ信州を以て二人の命に換へ申し度き旨を申されけり。

信之、井伊直政、榊原康政に就きて、父を助け給はり候へ、と申す。東照宮聞召し、許容有りし、と仰せられければ、台徳院殿に申すに、信之の父を助けんと言ふは理なり。されども安房守に遮られて關ヶ原の軍に後れたり。必ず安房守を誅すべし、とて御許されの色無かりしかば、伊豆守是を承り、又兩人に就きて、仰の趣申すべき詞無し。斯く有らんと存じ父を諫めしかども、用ひざれば力に及び候はず。只一つ志す所の候。安房守を誅せられんよ

り先に、先づ斯く申す伊豆守に切腹を仰せ出され候へかし。御敵の子なれば左有るべきと世の人も存すべし。必ず父在世の中に伊豆守を誅せられよ、と云ひも終らぬに、康政、心得て候。房州御赦免の事は康政が申上げて事能くせん。昔の義朝には大に異なる豆州かな、と言ひて其旨を申せしかば、東照宮、台徳院殿も聞召し入れられて、眞田父子許されしといへり。信之に信濃十二萬石の地を賜り、昌幸、信仍は御赦を蒙り、城を出でて紀州高野の麓九度山に引籠る。信仍常に父と兵法を談じて、天下の時勢を計りけり。昌幸は六十七歳にて九度山に死す。其後大坂の亂起りしに、秀頼、信仍を招かれけり。此比世の中騒がしかりければ、紀州は淺野長晟の領地なれば、橋本山の百姓に、眞田大坂に行く事有らん。押し止めよ、と下知せられしかば、用心嚴うしたりけり。信仍橋本山の百姓數百人を九度山に招き、假家數多設けて酒宴してもてなし、上戸下戸を言はず強ひたりし程に、酔伏して前後も知らず。其時百姓の乗り來りし馬に色色の物取附け、百人許打立ちて紀伊川を涉り、橋本山より木のめ路に懸り、大坂にぞ行きたりける。道々にて百姓は皆九度山に行きぬ。残りし女童共信仍が鎗眉尖刀の鞘を脱し、鐵炮に火繩を挟み、もし押しむる者有らば忽ち討殺すべき體を見て詮方無し。九度山に酔伏したる者共、夜明けて見れば眞田は無し。如何に、と問へば、昨日云々の有様にて河内路に赴きたり、と言ふ。欺



かれしと悔めど力及ばず。信仍大坂に至り、只一人大野修理治長が家に行く。信仍其比雍髪して傳心月叟と言ひけり。大野が士信仍とは知らず。何國の修験者ぞ、と問ふ。信仍、大峯より参り候、といへば、折節修理は居合せず、とて番所の側に呼入れ置きぬ。

若き士共刀劍の物語するるとて信仍に向ひ、汝が刀見せられよ、と言へば、山伏の犬威に候、とて出すを抽きて見れば、心も詞も及ばれず。さらば脇差を見ん、とて是を見るに、是も同じ事なれば、驚いて中子を見るに、脇差は貞宗刀は正宗なり。人々怪み合へり。其後信仍彼若き士に逢ひて、刀の目利は上りたるや、と戯れしに、皆赤面せしとぞ。

修理歸りて信仍を見て大に悦び、疾くも参られ候よ、と禮儀正しくして書院に招き入れもてなしぬ。秀頼、速水甲斐守時之を使として黄金二百枚賜はり、軍兵の事は聽て下知有るべし、となり。既に東西の軍起るに及びて、東照宮、如何にもして信仍を降参させばや、とて、叔父隠岐守信尹を以て此旨仰せられ、信州にて一萬石賜はり候ひなんとなり。信仍同心せざれば、又信州一國賜るべし、と仰せ出されけり。信仍怒つて、義は人の道なり。秀頼に一心有らん事存じも寄らず候。重ねて斯る使をせられなば存する旨有り、と罵りて信尹を追返しけり。或説に、信尹に向つて、天下に天下を添へて賜るとも、秀頼に背きて不義は仕らじ。汗の出づ

るとて肌を脱ぎ小姓に拭はせて、應て首を關東の兩御所の前に出すべき、とて打笑ひ居たりとなり。○元禎按ずるに、昌幸徳川家に服従し奉りて後、關ヶ原の亂に及んで背きたる事二度に及べり。此義と言ふべからざるにや。東照宮寛仁に御座しませし故に再犯の罪を宥めさせ給へり。信仍其寛仁に何を以て報い候や心得られず。豊臣家は眞田數世の君に非ず。若君に不背の義を論ぜば、武田家亡びて後、世を捨てて山中に隠れずば如何にか有るべき。眞田が論ずる處の義道に叶へるとは言ふべからず。世の人眞田を以て賞稱する事甚し。故に愚論を述ぶるに及べり。

大坂冬の陣に出丸に有りて防ぎけるが、大敵の責めし時守固かりけり。和平に及びて、信仍、越前忠直に仕へし原隼人貞胤は、古りし好有りて招きもてなしけり。原はもと武酒盃數獻の後、信仍鼓を打ち子の大介に舞はせて興じけるが、信仍云ひけるは、吾必ず討死せん。思ひの外に存命へて再會する事よ。されど遂には軍に及ぶべし。落ぶれて九度山に隠れ居しが、一方の大將となりて候豊臣家の恩讐へん様無し。彼に見ゆる鹿の角の立物の冑は眞田家に傳へたる物とて、父安房守讓り與へて候。重ねての軍には必ずきんする物なれば見置きて賜り候へ。又命は惜からねども大介が思ひ出もなく、空しく戦場の土とならんは不便に候、と語りければ、貞胤も涙を流

し、軍に臨む者誰か生きて歸らんと思ふべき、と答へしに、信仍白河原毛なる馬に六連錢を金もてすりたる鞍置かせ、庭にて乗り廻し原に見せて、城は壊たれたれば、天王寺口に駈出でて馳廻り、下知して思ふ程軍せばやと存すれば、此馬の可愛く候、と語りて、又酌酔ひて別れけり。果して和平敗れしかば、元和元年五月大坂にて軍評定有り。後藤は大和口の先陣にて平野に陣しぬ。五月六日の夜、信仍、毛利豊前守勝永と二人打連れて後藤が陣に行き、明けなば國分の山を踰え、三萬の軍兵を一陣にして關東の旗本に一字に駈入り、軍神も照覽候へ。兩御所の首を取るか三人の首を實檢に供ふるか。二の中よ、とて最期の盃せり。後藤は六日の夜半に打出で道明寺口にて討死しけり。毛利は藤井寺に陣を進めし處、早後藤が軍破れ、關東の軍兵二三十萬も有らん、洪水の溢れ来るが如し。眞田を待てども未來らず。眞田は兄の伊豆守と同心して裏切するよ、と人々罵りける所に、住吉海道より赤旗押立て馬煙踏み立てて来るを見れば、金の蠅取の馬印にて眞田なれば、毛利が陣も勇み合へり。信仍、豊田の方に進めば、諸は愈一心よ、と人々怪む所に、信仍堤の上を上り鐵炮を進めて、伊達政宗の先陣片倉小十郎に向ひて討て懸る。信仍眞先に進みて鬪ひしが片倉が陣敗北す。逃ぐるを追うて敵數多討取りたり。片倉金の鐘の差物にて魔を取り盛り返す。政宗の旗本の騎馬の鐵炮も進み来る。奥州は聞ゆる馬多き所

なれば、良い馬を撰びて若き士に乗せ、馬上より鐵炮をつるべ立てさせ、敵ひるむ所を馬の首を揃へて忽ち乗破り、駈亂して追崩す軍略なり。未だ其間相去る事遠かりしかば、信仍、いざ疲れたるに、息をつけ冑を脱け、と下知しければ、皆冑を脱いで休み居たり。敵稍近附きしかば、信仍、さらば冑を著よ、と言ふ程こそあれ、冑の緒をしめ鎗の穂先を揃へて敵に向ふ。政宗の鐵炮箕手なりに成りて懸り來り、雨の降る如く打懸けたり。信仍眞丸に成りて、とても遁れぬ所よ。一足も引くな者共、と下知し、ひたくと跪きて聲々に念佛を唱へ、力を合せて堪へたるに、信仍大音上げ、一寸も引くな爰に死ねや、と下知して鎗を取つて懸れば、士卒一同に立上り喚いて鎗を打入れたれば、政宗の軍兵大に破れ、一支も無く崩れけり。此を世に眞田が天王寺口の軍とて、大軍の騎馬鐵炮に打勝つたる有様を傳へて稱しけり。信仍士卒を立固め靜々と毛利が陣に來る。大介今年十六歳、組討して取つたる首を鞍の四方手に附け、手負ひたるが、流るゝ血をも拭はず馳來るを毛利見て、天晴父の子なり、と感じけり。信仍毛利が手を取り涙を落し、時刻遅く後藤が討死せし故、謀空しく成りぬるも、豊臣家の運盡きぬる所なり、といへば、毛利今日大敵に打勝たれし武勇の有様、古の名將にも優りたり、とぞ云ひける。斯る所に秀頼の黄母衣の使番乘來り、疾く城中に引籠り候へ、と下知せられしに、信仍は猶赤旗押立て、今一軍

せんと宵の緒をしめ直し、勇氣殊に厳しく見えたりけり。水野日向守勝成此を見て、いざ軍せん、とて政宗に勧めらるるに、同心の色無し。越後少將忠輝此處に陣を進められしが、此も眞田が陣に懸らんと宵を著給ふ。政宗の士大將片倉小十郎忠輝の前に來り、日暮に近く軍危からんと言へば、早雄の士共、いざ懸りて討捕らん。弱敵を刺すまじ、といふに、片倉、夫は僻事にて候。日本國を敵にして軍する大坂の者共を弱敵と言ふべきや。片倉が組の士三十人の中二十九人は討死したり。是見られよ、とて櫓まで血に染みたる刀の曲りたるを見せてけり。越後の士大將花井主水も、如何すべき、と軍奉行玉虫對馬に問ふ。玉虫、敵は二の身の勝を心掛候。懸りて軍に利候まじ、と言ひてためらひけり。

忠輝、大坂を突くべきやと評定決せず。篠瀬左大夫、足輕をかけあひしらひて食止むべし。軍をさせられよ、と勸む。玉虫、僅なる足輕を以て如何にして敵の大軍を食止むべき、といへば、篠瀬、踏の無き事は申さじ。六尺の大男も、足の裏に踏ぬきすれば行歩暇取るものなり。人數少しとてつけられぬ事や有る、といふ。玉虫、地の利知らぬ所にて日も暮れたり。行懸の合戦は危き物なり、と押しむ。小野能登守は、判官殿三草山を越えての合戦は、知らぬ國の夜軍ならずや、といふ。皆川老甫、小野能登守、花井主水、篠瀬左大夫は、駈らん、と云へ

ども、玉虫對馬、林平之丞は押留めて論決せざりし中に、大坂方靜々と引取りしとも言へり。眞田が陣には手々に扇を擧げて招き、何とて軍し給はぬぞ、と聲々に呼はりけり。猶懸らざりしかば信仍靜に兵を收め、關東武者百萬も有れ、男子は一人も無し、と大音に罵りて引取りければ、東照宮、玉虫に、林道春に吳子が六國の風を説きたる章を讀ましめられ、玉虫を逐出されけり。此玉虫は、甲斐の武田家にて物師なる故軍奉行たりしに、如何なる故ならん後れたりき。明る七日の軍に信仍兵を出せしが、秀頼の出馬を勧めんため子の大介を城に返しけり。大介、今年十六に及ぶまで片時も側を離れ候はず。只今討死の際に逃げたりと人のいはんも口惜しく候。去年母上に別れ奉りし後文の便に、存命へて相見えんは應はしけれ共、合戦の場にて必ず父上と同じ枕に討死せよ。苟にも名こそ惜しけれと誠められし、と言ひければ、信仍、城中へ歸れと言ふも秀頼公の御爲なり。父子ともとても遁るべきや。聽て冥途に逢ふべきを、暫の別れを惜むこそ口惜しけれ。疾城に參れ、とて取附きたる手を引放せば、大介名殘惜けに父を見て、さらば冥途にてこそ、とて引返す。信仍、大介を見送りて落つる涙をおさへ、昨日譽田にて痛手負ひしが、弱る體の見えざるは、よも最後に人に笑はれじ。心安し、と言ひけるとかや。斯くて大坂の軍敗れしかば信仍討死しけるを、首をば越前忠直の士西尾仁左衛門取つたりしに、誰とも知らず。眞田

信尹馬に乗りて打通り、此を見て、其胄は見知りたるぞ。眞田左衛門佐なるべし。口を開いて見よ。向齒二枚闕けて有るべき、と言ひしに、信尹が詞の如し。諸こそ左衛門佐とは知りてけれ。彼胄は原に物語して見せたるなり。弓箭取る身は思ひ出の詞兼て云ひ置べき事にこそ、と言合へり。大介は城中に入り、秀頼に従ひて蘆田曲輪の矢倉に籠りて父の事を尋ねけるに、討死せしと聞きて夫より物も言はず。母の形見に賜はりける水晶の珠數を首に懸け、秀頼の自害を待居しかば、速水甲斐守大介に向ひて、組討の武勇逞しき振舞して、痛手負はれしと聞ゆ。和平にて君も城を出させ給ふべし。眞田河内守信吉の方へ人を添へて送るべし、と言へ共些とも動かす。寄手矢倉を取巻きし時、速水戸口に立出でて大介が有様を語り、武勇の血脈恐しき者なり、と云ひしとなり。終に大介も矢倉の中に死して、父子同じく豊臣家の爲に亡びたり。

○西村孫之進武功の事

大坂夏陣に眞田信仍と伊達家と軍する時、伊達家の騎馬鐵炮を打立てたれば、玉の飛ぶこと霰の降るが如く、信仍が軍兵共折敷きて、鎗を敵の方へ差向け堪へ居たるに、西村孫之進といふ者、討れたる味方の屍二つを重ねて盾として居たるに、玉一つ來て二つの屍を打通し、孫之進が肩に

傷きたれ共、薄手なり。鎗を握りたる左の拳の五指こそばゆくて氣味悪く覺え、残る指四本にて大指をにぎり込みて堪へたり。全身の危き事は忘れて、大指の先の斯の如きは怯ぢたる故ならんと思ひて、左右を見るに皆然したり。又側に並び折敷きたる者に、玉の中る音甚だ強く響きて、我身に中りたるかと覺えし、と後に人に語りけるとぞ。此時孫之進伊達家の秋部甚平といふ者を討取りけれ共、其姓名を知らず。落城の後孫之進、未だ何れの家にも仕へずして江戸に赴き居たりしが、相知れる者の方へ行きて物語する時客來れり。主人西村が事を語りて、大坂にて事に逢ひたる物師なり、といふ。彼の客は伊達家の士海道林左衛門と言ふ者なるが、誰の陣にか御座せし、と問ふ。西村、眞田左衛門佐が許に有りし、と答ふ。客の曰く、さては五月六日の戦にての事なるべし。具に承り候はばや、と問ふ。西村聞きて、させる事にて候はね共、尋ねに附きて申すべし。伊達家と始の一戦終り、後の軍殊の外激く、伊達家の陣を七八町許も有らん追立てたる處に、三十人許取つて返し折敷かれたり。某共三人鎗を入れ候ひき。某が鎗の相手の間に押隔りて駈入候人を、初鎗にわたかみの外れを突損じ、二の鎗に草摺の間を突いて跳ね倒し、首を取らんとせしに、歴々の人にてや候ひけん、從者と覺しき者二三十人も取巻き候て、手にく幾刀とも無く切られ候。皆具足の上にて手を負はず候ひしが、鎗にて腰骨を突かれ倒れて絶入り、夫

よりは覺えず候。後に承り候へば、真田が惣軍働と押懸り候故、我等が首を取られず候由。彼突伏せたる鎗の相手は、定めて助け遁れたるなるべしと存するなり。其後少し人心地附き候に、馬取彌右衛門と申す者、これ程の手にて弱るといふ事やあると云ひて、跡の方へ歸る音微に耳に入りぬ。見捨てて逃げたるかと思ひしに、又來りて腰の手拭を水に浸し持ち來り、口に絞り入れたりし故、彌氣附きたるを、彌右衛門肩に懸けて城中に歸り、翌日も其疵故働く事ならず。戰場に出でずして思はざるに存命候、といへば、彼客聞きて驚き、初の鎗を合せ候は、士大將利部刑部と申す者なり。其間に駈入りたるは刑部が子甚平と言ふ者なり。御物語にて疑も無く候。甚平をば陣屋に連歸りたれども死しぬ。察せられ候通一陣の大將にて候。其日武功の證人には我等立つべきにて候。其證を進せん、とて右の次第を書き、花押を加へて西村に與へ、さて譽田以來の參會珍しき縁なり、とて互に物語して別れけり。西村後に、池田の御家芳烈公朝臣に仕へたり。

○佃次郎兵衛伊豫國松前城を守る事

佃次郎兵衛十成は、加藤嘉明の左の先手の士大將なり。からしまの船軍に十成敵船に乗移る時、敵

劍にて口中に突入れたれ共少しもひるまず。猶飛込みけるを棒にて胃の上を強く打たれ、海中へ落入りたれ共、水に長じたれば泳ぎ上るを、從者熊谷覺兵衛薙刀を差し出すに取附き、直に敵船に乗入つて、船中の者共を撫切にしたりけり。嘉明船數多乗取られし其一つなり。關ヶ原の時、嘉明は伊豫の松前を出て關東に打向はれしに、十成に堅固に守れ、と下知して松前に留守居たり。毛利輝元の兵村上掃部、能島内匠、曾根兵庫、宍戸善右衛門等松前を取らんと支度しけり。能島、村上は河野の一族なる故、招かざるに人々從ひなん。豫州を攻取らん事、掌の中に有り、と評議し、豫州の人平岡善兵衛と言へる者を嚮導とし、三千餘を率ゐて豫州に打向ひ、使を以て、疾く城を明渡されよ。遅くば踏潰さん、と松前へ云遣りけり。城代加藤内評佃と相謀り、先づ敵を謀るべし、とて、子細無く城を明け渡すべし。然れども妻子を片附くる間を待たれ候へ、と返答す。左も有りなん、と侮りて三津浦に上り、民家に陣して待居たり。大洲の城に藤堂高虎有りて加勢を差し向けられしかば、松前城中の人々悦び合へり。十成獨同心せず。今敵大軍にて押寄せたりと言へ共、謀を設け一戦して義を守るは、弓箭取者の法なり。城を枕にして討死すべし。勝利を得ば牛前の面目なり。假令勝ちたりとも、人の救に依りて運を開きたりと言はれん事口惜かるべし、とて禮儀を正しくして辭したりけり。此時國中一揆起り、三津浦に酒肴を贈る由を十

成聞きて、雙方の勝負を窺いて見合せ居たる黒田、大溝、永田村の百姓小賢しき者四五人呼寄せ、妻子を質に取り金銀を與へ、能く云含め酒肴を持たせ三津浦へ遣し、嘉明近年松前を領し、仕置宜しからず百姓共困めり。河野一族の人々國に入給はん事百姓の安堵なりと悦び祝ひ申すなり。城中に縁の者候て具に承り候は、嘉明關東へ出陣、軍兵を拂つて連れられし故、今残り留る者共多からず。大方老衰病者にて一人も軍すべき者無し。佃十成も大病なり。鉛藥も乏く落支度の外更に無し。早や逃去りなん、と口々に云はせられたれば、安藝の士大將、さも有るべし、とて彌怠りけり。彼百姓一人立歸りて其有様を告げ知せければ、さらば今夜風雨の紛れに一夜討すべし、とて嘉明の貯へ置れし白布を、胴肩衣に裁縫ひて配り與へ、十成は背に松の字を墨にて書きて印とし、合詞を定め、首は取るべからず。貝の音を聞かば勝負を止めて引取れ、と約束を定め、慶長五年五月十八日戌の刻に打立ちけり。忍の者歸りて、今夜は村上が陣所に集りて酒盛の半なり。轡山の濱邊に張番の足輕松前の押へに置きたり、と告ぐる。十成、打破りて通らんは安けれ共、途中に滞りて三津浦へ聞えなば、謀徒に成るべし、とて道を替へ、江戸山を越えて子の刻許に三津浦に押寄せ、所々の民家に火をかけて切つて入りしかば、大に騒ぎて物音も聞き分かず。十成、薙刀を提げ真先に進みけるに、掃部、敵寄せたりとて何程の事か有るべき、

とて駈け出るを、夜討の大將佃次郎兵衛なり、と名乗つて掃部を突伏せ、敵數多切り拂ひ、貝を吹立てて軍兵を纏ひ、靜々と引取つたり。掃部を始め内匠、兵庫も討たれければ、引退きて久米の郷如來寺に楯籠る。翌十九日十成又押寄せければ、如來寺にも支へ兼ね道後山に引退く。十成も深手數多負ひて日は暮れぬ。松前に引取りぬ。道後山の安藝の人々近郷の百姓を相從へ、刈田焼、働して松前の城を攻めんとすると聞えければ、九月二十三日、加藤内記道後村へ押寄せて相戦ふ。十成は久米の戦に手負ひて出でざりしかど、重ねて安藝の加勢來らば始終争か勝つべき。今急に追拂はずば後日の事覺束無し。手疵を痛みて城中に死なんより、敵に向ひ快く討死せん、とて城下の町人近郷の百姓二百人許集め具足を著せ、妻子を質に取りて番旗を指させ、十成引具して道後村に駈向へば、味方は是に力を得、宍戸、平岡に従ひたる一揆散りぐくになりければ、終に風早の浦より船に乗り藝州に引退きけり。關ヶ原の後嘉明松前に歸りて戦功を撰ばるゝに、夜討に首取らざりしかば、十成、村上を討取りたるは明なれども、其功を言はず。生捕の者に尋ぬるに、村トが陣へ先達ちて切込んだる人の、白き肩衣の脊に松の字を大きに書きたるが、薙刀にて村上を突伏せしを間近く見たり、と言ひければ、嘉明、十成が功によりて松前を取られず。殊に安藝の物主三人を討取り、大洲の加勢を辭せし事、勇といひ忠といひ優れたり、とて

太閤よりの賜ひたる物具に感狀を添へて、浮穴郡久萬山の庄六千石を與へられけり。慶長十八年嘉明 温泉郡 勝山に城を築き松山と名附け、松山の北に別に一廓を構へ、五つ矢倉をあけて十成を置かれぬ。元和元年大坂の軍にも、十成、嘉明の嫡男式部少輔明成に従ひて淀川を渡り、城兵を討取りけり。同年十成關東に召され、葵の御紋の時服を下されぬ。寛永四年嘉明奥州會津に移りて十成に一萬石を與へられけり。寛永十一年十成病重く、子供どもを集め、吾若かりしより戰場に出る事度々にて、疵を蒙る事十三ヶ所、就中豫州久米の合戦に鐵炮頭の右に中りて、猶其鉛皮の中にあり。然れども運盡きざれば死せずして、斯く老年に及んで病の爲に死せんと覺ゆるなり。是を以て思ふに、弓箭取身は少しも穢怯たる志有るべからず。形見に是を残さんと、とて刺刀を取りて皮を破り、鉛丸を取り出して前に置き、三月二日八十二歳にて端座して終れりとぞ。

○大久保忠佐に三枚橋 城を賜ひし事

關ヶ原の亂治りて後、大久保治右衛門忠佐に二萬石賜ひて三枚橋の城主たりしに、渡邊忠右衛門御近習の人に向ひ、治右衛門を武功の者と思召しけるが、此忠右衛門に逢うては逃けたり、と申しけるを聞召し、治右衛門を召され、先年三河にて一向宗一揆の時、忠右衛門兄弟弓を持ち、其

餘數多鐵炮を持ちたる者七人に、汝一人立向ひて、相手かけの勝負ならば手並の程を知らずべきに、多勢の飛道具に吾一人懸りて犬死すべきに非ずと、大音に詞をかけて引退きたると聞きたり。然るに渡邊めが如く無理を言ふ男には取合はず、捨置くに如かず。必ず此後も聞かぬ體にてあれ、とぞ仰せられける。

### 常山紀談 卷之十八

#### ○細川幽齋古歌を著きて忠興を諫められし事

細川忠興諸事嚴正に過ぐると父の幽齋に告ぐる者有りければ、忠興の長臣を呼びて、古歌二首書きて與へらる。

あふ坂の關のあらしの寒けれどゆくへしらねばわびつゝぞぬる  
此歌の意を察せよ。

まこも草つのぐみわたる澤邊にはつながぬ駒もはなれざりけり  
此歌の意を能く思慮せられよと忠興に言へ、と教訓せられけり。

關のあらしの歌は、古今集よみ人知らず。まこも草の歌は、詞花集俊惠法師の歌なり。

#### ○本多忠勝功名を諭せられし事

或人本多忠勝に、思慮有る人功名を遂げ候か、思慮無き人功名を遂げ候か、と問ふ。思慮無き人

も思慮有る人も功名するなり。思慮有る人の功名は士卒を下知し、大きな功名を遂ぐる物なり。思慮無き人は鎗一本の功名にて、大なる事は無し、と答へられけり。

#### ○井伊家の附人連署して直政を諫めし事

井伊直政壯年銳氣甚しかりしかば、東照宮よりの附け置かれし

諸本脱

以下連署して諫書を獻け

たりし。其中に、人には必ず向ふざすと申す事を思設けたるが然るべく候。臣等が前の主君の事を申すも如何なれ共、信立は若き時より一つとして心より善事は無き人にて候へ共、常に越後の謙信を以て向ふざすとして、謙信に優るべきと勉め勵まれ候ひき。されば信立一生の間、手を下したる大事の合戦五度に及び候へども、大なる敗北はせられず候。殿にも本多中務太輔忠勝を以て向ふざすとして、勉めて劣らじと勵み給ひ候へかし。古より進まず退かざる良將と申すは、中書相叶ひて覺えたり、と書きたりけり。

#### ○堀秀政を名人太郎といひし事

堀久太郎秀政後左衛門督といふ。士より下部に至るまでつかふ。上に下の情を盡すを第一に專



ら心掛けられけり。斯かれば下に恨むる者なし。奉行の従者と荷を持者と輕重を争ふを聞きて、其荷物を自ら振りかたけ往來し、我力は彼者より優れり。然れ共一里許負ひたれば勞れたり。持つ事能はじと言ふは尤なり、と決斷せらる。或時武者押に旗さし後れたりけるを尤めけるが、秀政自ら旗を負ひて試み、さては吾乗つたる馬の肝能き故ならん、とて肝弱き馬に乗りたれば旗さし後れざりき。世に名人太郎と言ひけるは、斯く下を仕ふ心を用ひられし故にこそ、と人言ひ合へりけり。小田原陣中に卒せらる。年三十八なりとかや。

○大久保忠隣忠直の事

大久保相模守忠隣は忠貞の人なり。關ヶ原の時台徳院殿、木曾路より攻上らせ給ひしに、石田北の後御著陣有りしかば、東照宮御對面まします。忠隣近習の士を以て、申し度き事の候、と申す。中々口にも言ひ出されず、と言ふを聞きて、さらば直に申さん、とて座を立ちけるを、さらば先づ申して見ん、とて斯くと申せば、色を變じて内に入らせ給ひしが、稍有りて、相模は歸りたるか、と仰せ有り。猶待ち居て退かん氣色は候はず、と申せば、飽くまで剛直の者なり。よも空しくは歸らじ、とて召されけり。忠隣御前に参りて、先づ何とも言出さずで涙を流しければ、夫

は如何に、と仰せ有り。忠隣、此度上田を攻め候て道に遲留の候ひき。上田を攻め候は忠隣と正信が仕業に候。二人の中一人は召出され、罪を糺させ給ふべきにて候。さは無くて不和に及ばせ給ふ事僻事にてこそ候へ。過ぎし年大軍にて攻めたりし時も、眞田が智勇に挫かれ候ひき。上田固くとも遂に攻落すべきを捨てて上らせ候ひしに、關ヶ原にて石田今暫し支へなば、など戦功の無かるべきに、石田脆く敗れて手を空しくなし給ひぬ。君萬歳の後に日本を治め給ふべき御嗣に、人の侮り奉るべき事を爲し給ふは、怒りに引かれて忘れさせ給ふにや。疾く嗣君に自害を勧め奉るべし、と申されしに、汝が言無禮なり、とて立たせ給ふ所を押し止め、忠隣が申す處理ならば聞し召し入れられよ。正しからずば首を刎ねられ候へ、と憚る氣色なく申せしかば、聞し召し入れられ、汝が言ふ所尤なり、とて聽て御對面御座しましぬ。忠隣は相州小田原の城を賜はりたりしが、慶長十八年切支丹を改むる仰を蒙りて京都に赴きたりしに、謀叛の志有る由訟へ申す者あり。本多正信、忠隣が惡逆の志有る由申しける、と世に申せしが、忠隣をば井伊直孝の領國佐和山に閉籠め置かれけり。板倉勝重仰を承りて忠隣が旅宿に行く。折節忠隣碁を圍み居たるに、側の人、殿を流罪の爲に板倉來れる由云ひけれ共、驚く體も無く勝重に逢ひ、仰を承り更に恨の色も無し。従者大に怒り、讒言により流罪にせられ候事口惜しき事なり。切死せん、と言ひ

しかば、京都の騒大方ならず。二條の城にて門々を守りけり。忠隣武具を繩にて擲け勝重に授けしかば、京都の騒鎮りぬ。夫より佐和山に行かれしかば直孝能く勞り申されしが、或時、申開くべき旨候べし。直孝承りて達し申さばや、と語られしに、忠隣、理を正して申さんには、聞召し明らかめられん事必定なり。さらば讒言を聞召し、無罪の者を流されし過を人知らば、君の非を擧ぐるなり。此忠隣が志に非ず。我斯く朽果つるとも露塵ばかりも惜からず、と言はれしかば、直孝感服せられけり。忠隣徒然の餘に、忠臣記二卷を作られけるとぞ。

○天野康景廉潔高國寺城を去られし事

天野三郎兵衛康景は、天野遠景が苗裔にて、百貫の地を領し來りしを、東照宮瀧坂に置せ給ひ、遠江榛原郡を切取に仰出されし大剛の人なり。後駿河の高國寺三萬石の地を賜る。駿府の城經營の時竹を刈らせ積置き、足輕に守らせしに、御領地の百姓竹を盗みしを見咎めて斬殺す。殘る者共逃げ散りて代官井戸某に訟へしかば、井戸、百姓を殺したる下手人を出せ、と天野にいふ。天野、盜を殺す事罪に非ず。守る者罪有らば、先づ天野非に行はるべし、と云ひければ、井戸訟へけり。東照宮、足輕を誅せよ、と仰出されしに、天野始の如く申せしを聞し召し、天野は不道

の仕業する者に非ず。子細有らん、と仰せられけるに、本多上野介正純天野に逢ひて、仰を否むは臣たる者の道に非ず。臣として君命を承らざる事やある、と云ひけるに、天野、さては臣たらずば苦しうも候はじ、と言ふ儘に三萬石の祿を辭して、慶長十二年三月二十九日、高國寺を去つて行方知らず成りにけり。程經て大久保忠隣尋ね出し、年頃親しかりしかば小田原の入かといふ所に隠し置かれけり。罪無き人を殺すに忍びず、三萬石の祿を捨てて隠れし志を、人々稱し合へり。

○井上正就駿府へ御使の事

台徳院殿太田某に五百石の祿を賜はりし時、太田、折紙を擲け返し退出しけるを死罪と思召しけるに、井上主計頭正就、駿府に申して後非を定められ候へ、と申す。さらば、とて井上駿府に参りて東照宮に斯くと申すを聞し召し、泰平久しかるべき基なり。太田は誠に無禮なり。凡そ賞罰中らざれば下の恨むるは常の事にて、太田も無禮とは知りたらん。己が身を捨てて諫むる心なるべし。臣下の直言して諫むる者怒に逢ひて刑罰せられ、家を亡し、大軍の中に駈け入る者は、多くは身を全うして功名を立つる故に、昔より諫臣を忠の第一とす。然るに今太田に與ふる祿

賞しやうめたに中らざるやと汝を以て問はる事、政務せいむに心を盡さるゝならば、秦平たいへいの基もとと謂ふにてこそあれ。汝に物語せん事あり。我三河われみかわにて、池の鯉いけこいを鈴木久三郎すずきくさぶろが取りて烹て喰ひ、信長のぶながより賜ひし酒をも我われに與へたりとて思ふさまに飲みたりき。吾怒われいかつて眉尖刀まへざなを提さげ鈴木を呼びしに、鈴木肌はだを脱ぬぎ大音だいおんを上げて、魚に人を替かふる不道ふだうにて、天下に旗揚あげんとは思ひも寄らず、と罵ののりし時、予鈴木が詞ことばに屈伏くつぷくして内に入り、熟思じよくふに、走りの者池にて鳥を取りし罪にて閉ぢめ置きしを諫めん爲ためならんと心附こころづきて、走りの者を赦ゆるし鈴木を近附ちかづけ、汝が志返かへすべく悦よろこびし、と言ひしかば、鈴木涙を流し、密ひそかに申すべき事を、今戦國せんごくの時ときなれば、手荒てあらなるがよきと存じ候て無禮こゝろの詞を申せしに、斯かる仰を承りて辱かたじけみの身に餘りて候、と言ひしなり。今太田にも三千石の祿ろくを與あたへられよ、とて井上を留め給ひ、御刀ごとうを賜はりしかば、江戸に歸りて斯くと申す。太田にも祿を増賜ましはりしかば涙を流して喜びけり。台徳院殿、井上には、汝が詞ことばによりて孝行かうかうを知り、賞罰しょうばつの道を辨わへたり、と仰せ有りて、左文字の刀を賜りけり。

○東照宮諫言を容れ給ひし事

東照宮濱松はままつに御座おはしませし比ころ、或夜本多正信御前に有りしに、誰人たれびにてかありけん姓名をふせころ知らず懐

より書しよを取出し、諫め奉るべしと兼てより存する事の候て書き候ものなり、と申せば、大に悦ばせ給ひ、夫讀め、と仰せ有りければ、披ひきて讀みけるに、一條讀み終る度毎に領かせ給ひ、尤もつなり、と仰せられ、讀み終りければ、汝が志感かんするに詞なし、之これの後も心置おきな無く告げよ。返す返すも神妙しんめうなり、と繰返し仰せければ、忝かたじけき由申して退出す。正信居残りて、只今諫め申せし事用ふべき事に候はず、と申す。東照宮大に氣色變けしきらせ給ひ、否いやとよ。己が過は知ずして過ぐるものなり。國を領し人を治むる身には、過を告げ知らせ諫むる者は鮮すくなくて、唯諂へつらひて主君の言ふ事道に違たがひても、さは候はじと詞を返す人は無きぞかし。諫を防かぎし人の國を失うし身を亡のちし、後世の笑ひ草わらとなりし例多し。只今我を諫めし者、日比心を盡し見及ぶ様に付き、諫めんと思ひて書き記し、時も有らば見せんと思ひ居たりし志、何に譬たとへん様なし。其の用ふべきと用ふべからぬとには依らざるなり。唯彼が忠心を愛するなり、とぞ仰せける。又或夜の御物語に、凡そ主君を諫むる者の志、軍に先驅さきがけするよりも大に踰勝こえまされり。其故は、戦に臨みて一番に進み出づるは、素もとより身を捨てての事なれども、必ずしも討死せず。又討たれたりとても後の世に名を残し、死後の譽ほまれとなるぞかし。幸に功名を遂とぐれば、恩賞おんしょうにて家富み子孫榮さかゆるなり。されば得有りて失無しつき忠ちゆうなり。諫は然らず。主君不道ふだうにて善を憎にくむに進み出て直言ちやくげんする者、十に九つは刑罰けいばつに逢あひ、

妻子を亡し果つる様に成行くぞかし。失有りて得なき忠なり。武功は名利の爲にもなるべし。諫言は聊も身の爲を思ふ心有らば、争で主君の前にて直言すべき。唯人に君たる者の賞すべきは諫臣なり。とぞ仰せ有りける。

○三河國矢矧橋を修造せられし事

矢矧の橋水に壊れしを、造れと仰せられしに、兼ねてより船渡にすべしと言ふ人の有りけるが、幸にて候。船渡よかりなん、と申すを、東照宮、汝等末を知りて本に暗し。費を厭ふは民の爲なり。往來の旅人を苦めんは吾志に非ず。又要害も其本を論ずれば、唯國民の和と不和とに有り。險を頼みて敵を防ぐは、道を知らざるなり、とて橋をまた架けさせ給ひけり。

○山名禪高敝衣を著られし事

何の時の事にや、山名豐國入道禪高、古き羽織の所々敝れたるを著て、東照宮の御前に參られしに、夫は加何に、と仰せ有りければ、萬松院殿より賜はりたる物にて候、と申すを聞召し、舊を忘れず本に背かぬ者かな、と御感有りけり。

○東照宮禮を正し給ひし事

東照宮大度勇畧に御座しませし事は、誠に申すも愚なり。中にも禮儀を正させ給ひしかば、今川義元討死の桶狭間を、御鷹狩にて過ぎさせ給ふ時、必ず御馬より下りさせ給ふ。これは御幼時義元の好を思召し出されての事なりけり。上杉景勝に途中にて行逢はせ給ふ時、輿より下りさせ給ふ。是も父謙信の好を思召しての御事なり。

○駿府城中へ水を引かん、せられし時の事

駿府の城中の池に、阿部川の水を引入れよ、と仰せ有りしに、水筋に小き寺有りければ、外の處に引移さん、と申しけるを、東照宮、寺を移す事を止め、水を入るゝにも及ばず、と仰せられけり。此程の寺移し候はんには如何許の費の候べき、といへば、夫は大なる僻事なり。田の爲に水を引かんには左あるべし。吾庭の水は慰なり。夫に人を勞する事やある。無益の事に地を捨つるは敵に取られたるに同じ。百姓の苦なり、と仰せられぬ。

○東照宮御中指の事

東照宮御指の中節胼胝となり、年老いさせ給ひては屈伸し難くおはす。是は若き御時より數度の戦に、初の程は魔にて下知せさせ給へ共、事急なるに及びては、懸れくとして御拳にて鞍の前輪を叩かせ給ふに、血流れて出る。斯くの如き事幾度ともなき故となり。

○金の七本骨の扇の御馬印の事

東照宮金の七本骨の扇に日丸附けたる馬印は、參河の設樂郡牛窪の牧野半右衛門が印なりしを、永祿六年に乞ひ得させられて馬印となし給ふ。夫より前の御印は厭離穢土欣求淨土の八字を書きたるにて、大樹寺の登譽が筆なり。其印明曆丁酉の火災にかゝれりと言へり。然れども扇の御印は其前よりの事にや。天文十四年、公矢矧川にて織田家と軍有りし時、利無くて危かりしに、本多吉右衛門忠豐、疾く岡崎に入らせ給へ。御馬印を賜はり討死すべし、と申せ共許されず。扇の御馬印を取て清田殿にて討死しける。其隙に危きを遁れ給へり。御印は忠豐が嫡子平八郎忠高が家に相傳へ、忠高も又戦死しける。其子忠勝が時に至りて、永祿二年東照宮乞ひ返させ給

ひたりと云へり。

○加藤忠廣物語並飯田覺兵衛が事

加藤肥後守忠廣或夜物語に、吾は大力あれかしと思ふなり。重き甲二領重ねて軍に出づれば、恐るゝ事有らじ、と云はれしを、飯田覺兵衛熟と聞き、先殿物具一領にて、數十度の戦に終に手負はせ候はず。朝鮮に攻入りて鬼將軍と異國の人も惶れ候。死生存亡は天命にて人力の及ぶべきに非ずと言へ共、能く戦へば生き、悪く戦へば死ぬると申す事も候。國中の民を撫育し、諸士よく懐き従ふ時は、席上にて勝敗の理を論じ、軍兵を下知して進退自然に整ひ候へば、三軍の著たる物具は皆大將の一身に重ね著たると同じ事に候。誰か鋒を争はん。臣は力を併ませ給ふ事然るべしとも存じ候はず、と申して退出しける時、先殿には如何で斯くまで劣り給へる、とて聲を上げて泣きけるとぞ。此覺兵衛は清正の時武功の大將なり。初は角といふ字なりしに、太閤覺の字に書替へさせられしとぞ。覺兵衛云ひけるは、我一生主計頭に騙されたり。初めて軍に出でて功名しける時、朋輩多く鐵炮に中りて死しけり。危き事よ。早是までにて武士の仕はすまじきと思ひたるに、歸るや否や清正時をすかさず、今日の勳神妙言はん方なし、とて刀

を賜りき。斯の如く毎度其場を去りては後悔すれ共、主計頭其時を移さず陣羽織或は感状を與へ、人々も皆羨みて褒め立てたりし故、其に引かれて止む事を得ず塵を取り、士大將と言はれしは、主計頭に騙されて本意を矢ひたるなり、と忠廣没落の後京に引籠り、再仕を求めずして有りける時、語りけるとかや。

○前田利常戦死の士を弔はれし事

前田利常大坂の軍に功有りて加賀に歸り、討死したる士の爲にとて報恩寺といふ一字を建立し、戦死の人の追福にせられ、自ら彼寺に詣でし時、討死の士の親族を供に連れられる。自ら香を燒き涙に沈みて深く悲れしを、見る人聞く人、此殿の爲に死なん事露塵許も惜からじ、とて一同に哭し泣きけるとぞ。

○黒田如水遺言の事

慶長十九年黒田孝隆入道如水、病重く成りて子の甲斐守を呼び、汝は親に優れる事有り。我も亦汝に優れる事二つ有り。語つて聞かせん。今我死なば我士は言ふにや及ぶ、汝が士大將より士

に至るまで悲み嘆くべし。汝死して我存命へたらば、誠に大なる逆事なれ共、如水御座しますとて力を落す士有るべからず。是人の懐き従ひて吾に服する事、汝に勝る其一つなり。次に我は無雙の博奕の上手なり。關ヶ原にて石田今暫く支へたらば、筑紫より攻登り、下部のいふ勝相撲に入りて日本を掌の中に握らんと思ひたりき。其時は子なる汝をも捨てて一博奕打たんと思ひしぞかし。又紫の袂に包みたる草履片足に木履片足取出し、軍は萬死に入りて一生に會ふ習なり。十全を思慮しては叶ふまじ。例へば草履木履を穿きたる如く、二つ物がけの軍をする心得せられよ。汝は才智有りて先の事を豫め料る故に、大功は努々叶ふまじ。楮面桶と云ふ物は飯を盛る物よ。上天子より下百姓に至るまで、一日として食物無くては世に存命ふる者は無き事なり。國を富し士卒を強うするの根本一大事、此飯入に有り。必ず忘るべからず。斯る故に此面桶を形見に參らす、と言はれけり。

○本田正信加藤嘉明を諭されし事

加藤嘉明關ヶ原の戦ひに大功有りしかば、五十萬石を賜はるべき處に、本田正信其事を押しめたりと嘉明傳へ聞きて、本多を恨みられけるに、正信行かれしかば、願ふ處とて對面せらる。正

信の曰く、大國を賜ふべきとなりしを、我然るべからざる由を申止めて候ひき。是忠ある子細の候。其子細は、御身は武勇智謀類稀なる人にて、又豊臣家の恩深し。人の疑有るべし。功成り名遂けて身退くと申す事の候。今領國の少きに聊の恨無く御座さんに、恩遇子孫に到らん。若大國を領し給はば、必ず人の後に屈む人にあらずと、世疑ひおそれて禍有るべしと存する所なり。されども恨みられんには力なし、と云ひたりしかば、嘉明詞無くて止みけり。

○安藤直次先見並本多正信遺言の事

安藤帶刀直次物語の時、本多上野介正純は家亡ぶべきなり、と云ひしに、程無く本多に祿を賜はりけり。人々直次に、云々言はれしに如何に、と問ふ。直次聞きて、後を見られよ、と云ふ。又下野の宇都宮二十萬石を賜はる。人々又直次に、我等承り候所は苦しうも候はず。再三斯る事な言はれそ、といふ。直次打笑ひ、正純家亡びん事近きに有り、といふ。聽て正純國を召放たれしかば、人々又直次に、神智有るが如くに候。如何なる致しや、と問ふ。直次、さればとよ。台徳院殿關ヶ原の軍の時、木曾路にて遅留の有りしを、正純、是皆父正信が仕業に候。死罪に行はれなば嗣君の過無き事を人存すべき由申せしを、台徳院殿、我爲に斯くまで云ひつると仰せられし由正純聞きて、己が功と思へり。父を死罪にといへる三千の刑、不孝に勝る事や候。此家の亡ぶべき理なり。まして忠を君に致すは誇るべき事にあらず。正純の亡ぶるいと遅かりき、とぞ言はれける。

正信に三萬石の祿地増し賜はりし時、臣は元鷹師にて候を斯様に取立てられ候へば、只今の祿分に過ぎたり。必ず天の冥加に盡き申すべし、と固辭せしが、其後子の上野介に、我無からん後汝に祿を増し給はりなば、三萬石は我に賜はりたれば辭すべからず。それより増賜はりなば必ず固辭すべし。祿の身に過ぐるは禍なり、と遺言せられしが、正純父の教に背き、遂に國亡びたりといへり。

○台徳院殿御行狀の事

台徳院殿は殊に禮儀正しく御座しまし、苟にも疾言御座しませず。事無き時は泥塑人の如くになん、と人申せしが、極めて下民に御心を盡させ給ひ、孝道深く御座しましけり。又信を失ひては天下は保ち難し、と常に仰せられ、御鷹狩に出給ふ時も時を定められ、御膳の半にも辰の鼓を打てば箸を捨てて出給ふ。近習の人奉膳終らざれば辰の太鼓を打たず。井伊直孝是を聞き、

近習の人々に向ひ、是君を愛すると思へるは大なる御事にてこそあれ。君正しき道を好み給はば、汝達も正しき道にて仕へられよ。斯様に事を料られなば、必ず阿諛をなして寵愛を好するにも及ぶべし。疾く膳を奉りて鼓の前に終りなんに、何の苦しき事やある。是等は誠に小事なれども、君を欺くとも言ふべし。君子は禍を未然に防ぐものなり、と戒められけり。

○林道春格言の事

直孝或時林道春に物語して、樊噲が勇氣逞しきと聞く。されども弓箭取の珍しき事にもあらず。我とても噲が下に立つべからず、と言はれしに、道春、噲は誠に穢多の子にて筋目も勝り給へり。されども爰に一つの故の候。戦に臨みて矢石の中に先駆するのみを勇氣とは言ふべからず。是は匹夫の事なり。噲が顔を犯して高祖を諫め申せし事有り。足下には如何候べき。廣言を吐き給ふともよくく自ら省られよ。噲に及ばぬ事の有るべき、といへば、直孝恥づる色あり。是は其比大猷院殿御病氣とて、大名に相見なかりし故に斯くいはれしとかや。世に道春一生の格言とせり。

○藤惺窩秀吉公を論せられし事

惺窩藤斂夫東照宮の御前にて、秀吉は大膽なる人なれども大心なりとは申すべからず。朝鮮より明へ攻入らんとは大膽なれども、秀吉を信長の跡とは仰がれず。自立して日本を掌握せられしは大心にあらず、と申されけるが、後に此事を四辻亞相公理卿に語る人あり。亞相の曰く、我も其論尤なりと思ふなり。大佛建立は彼猿どころがはなれぬなり、と言はれき。

○紀伊大納言頼宣卿諫言を歡び給ふ事

紀伊大納言頼宣卿は、東照宮の十一男にて御座しませしが、幼き時より東照宮の膝下に御座して文武の御物語を聞き召し、尋常の質に御座しませず、諫を納れ給ふ事も並々ならず。或時腰帶といふ備前長光の刀にて立袈裟を試み給ひしに、快く切れて其儘立ちたるを突き給ひければ、二つに成りて倒れけり。左右一同に驚き入るばかりなり。大に悦びて那波道圓に、異國にも斯る利劍も有りや。又斯く手の利きたる人や有る、と仰せ有りしに、道圓承り、異國には龍泉、太阿など申す利劍も有之候。人を殺して樂む人は、夏の築玉、殷の紂王と申す惡王御座しまし候。凡



人を害して面白しと思ふは、禽獸の仕業にて人間にては無く、日本にて罪人を切り候は穢多こそ致し候へ、と憚る色無く言ひしに、つと入り給ひぬ。馳て道園を呼びて、先に申しつる所こそ至極の道理なれ。これより再び自ら試みる事有るまいぞ。諫言こそ返すくも、淺からね、と賞美ありけり。又或時大高源左衛門といふ士に司る事に附て、我不幸にして良き士持たざる故、何事も怠に成りぬ、と吐りて、人の無きなり、と有りしを道園聞きて、己が目の暗くて人の善惡を見明めざるを咎めずして、人の無きとは何事ぞや。外様古參にも新參にも良き人を撰み出さんには、智者も勇者も如何程も有るべきに、人の無きとは目の明かぬ故なり、と直言しけるを熟と聞き給ひ、道理至極せり、とて再三感ぜられ、深く先の詞を悔み給ひけるとぞ。道園常に其子に語りて、亂世には臣士君の爲に死する事有り。太平の世諫めて死する事を忘るべからず、と戒めけり。

○由井正雪叛逆の時頼宣卿 出仕の事

慶安四年 辛卯四月二十九日 大猷院殿過ぎさせ給ひて、其七月江戸にて浪人由井正雪叛逆をたくみ、紀伊大納言殿の仰と稱し、判形を似せ謀書を所々に遣し、丸橋忠彌、芝原又左衛門以下數百人

徒黨し、御鐵炮の藥藏の奉行川原重郎兵衛も是に與し、埋火にて遠くより火をさし、徒黨の者共船にて海上に出づる時、藥に火を移して江戸を一時に焦土となさんと巧みたりしに、心替したる者三人有りて訴へ出で顯れしかば、丸橋を始め生捕られ、正雪は駿河宮の町にて自害しけり。右の謀書數通浪人どもの許に有りける故、大臣集りて一大事と案じ煩ひ、兎角頼宣卿を殿中へ召して、此書を出す外有るべからず。其時様子悪かりなんには直に捕へ申せ、とて屈強の兵を隠し置きて出仕を待居たりしに、尾張中納言光友卿、水戸中納言頼房卿も出仕有り。此事を告げ申しけるに、尾張中納言、何條斯る企有るべきや。是謀書にて有らん、となりしに、水戸中納言も、如何にも左候ひなん、とぞ宣ひける。されども各手に汗を握る處に、頼宣卿出仕有りて座に付き給ひしかば、井伊直孝、酒井忠勝、松平信綱、此度浪人共の巧みの次第を申し述べたる處に、阿部忠秋彼狀を披露しけり。頼宣卿殘らず見給ひて氣色打解けて、返すくも日出度こそ候へ。最早何の恐るゝ事も候はず。其子細は、彼徒黨の面々外様大名の判を似せ謀書を作りたらんには、三代の御恩を忘れ、若や氣違ひて謀叛を企つるとの疑も有るべきに、我等が判を似せたる故事故無く治りたるなり。幼き公方の御身にて若し御疑ひも有らんには、我等只今國差上げ、如何にも仰に従ひ奉るべし。天下安全にてこそあれ、と悦面に現れて見えしかば、兩

公を始め一同に感じ、譽ぬ人も無かりければ、頼宣卿、其浪人共の中壯年の者四五人助け置かれよ。重ねて證議有るべき爲なり、と宣ひけるとぞ。

○水野重長諫言の事

頼宣卿、紀州にて松江の西の庄といふ所にて鷹狩有りて、港に船を附け陸路を經給ひしに、折節春きたる麥を筵に並べ、僅に路明きたりしかば、皆農民の年中の糧なるぞ。供の者踏むべからず、と再三制して歸り給ひければ、百姓共悦び合へりしを、供なりし横目の長臣の前に參りて、斯る次第に候、と申す。何れも感じ合ひけるに、水野淡路守重長一人、今日殿の御振舞こそ心得ね。斯る事故、下々の奴原殿の内胃を見て馬鹿にするぞとよ。殿の通らせ給はんには麥を脇へ引退け、水を打ちてこそ有るべきに、何ぞや麥を乾して通路を障る事奇怪なり。一國の主の仁はさは無きものなり、と言ひしを、頼宣卿聞き給ひければ、君も君たり臣も臣たり、と人々申しけり。

○松野惣太郎前田權之助賞せらるゝ事

頼宣卿馬を乗り給ひ、駟の中にて頭巾の風に落ちけるを、中に取つて又鞍に乗直り給ひしを、吉

見喜右衛門といふ者、松野惣太郎といふ者に語りけり。折節頼宣卿馬場に御座しける時なるに、惣太郎聞きて、殿には未だ馬上は練れ給はぬなり、と言ひければ、頼宣卿、子細如何に、と尋ね給ふ。惣太郎、さん候、東照宮は海道一番の馬上の御名人と申奉りたると承り候。小田原陣の時、山道を武者押しして過させ給ふ。丹羽長重、長谷川秀一、堀秀政峯筋を押しけるが、東照宮の御旗を見て皆々おし前を觀る。爰に一つの谷川の細橋有り。此橋へ行きかゝる人々、橋の下を皆歩み涉りにす。東照宮馬上にて橋際へ著せ給ひしかば、二人の大將、聞ゆる馬上の達人の細橋を渡さるゝ見よ、と云ひ合へりけるに、馬より下り給ひ、御馬は遙の下を口附四五人にて牽渡しけり。人々、是は如何に、と云ひけるを、彼三人の大將大に感じ、馬上の達人とは是をこそ言ふべけれ。馬上の達人は危き事はせぬものなり。殊に大事の軍を前に置きての事なれば、斯く有るべき事よと感じたりと承り傳へ候、と申しければ、頼宣卿、熟と聞きて大に悦び、其詞を書きて硯箱に入れられけり。又前田權之介といふ士、或時頼宣卿へ言ひけるは、今朝獨思慮せる事の候ひしに、大將の一言程重き事は候ふまじ。千金にも人の命を替ふる者は有るまじきに、大將の一言により、忽命を露塵許も惜きとは存する事なきは、昔よりの事に候、と申しければ、兎角の詞無くて時服を與へ給ひぬ。

○佐々九郎兵衛經濟格論の事

京極刑部少輔高知播州龍野を領せり。國用甚乏しかりければ公儀の事は堀田若狹守に計り、藤堂大學頭高次、高知の長臣岡七郎兵衛定次相加りて評議し、新參の士に年を限りて、永く暇を出すべしとの事なり。佐々九郎兵衛長光年老いぬれども思慮有る者として呼ばれければ、江戸へ行き、藤堂堀田に相會す。評議の始終書記して佐々に見するに、是は存寄らざる事なり。是非新參の面々に暇を出して、賑らざるを足さんとならば、祿多き者然るべし。斯く申す佐々一人が祿數十人より多し。流浪すともさのみ艱難にも及ばじ。小祿の人々は道路に乞食せん。是不仁の至りにて、行ふべき事にあらず。熟論せられよ、と諫む。佐々が思慮を問はるゝに、高次五百貫目を取次ぎて貸されんには、五百貫目は臣歸路に京にて借求めん。されども爰に一つの大切の事有り。幾度かくすとも、殿の能、舞妓、鷹狩屋敷の設、衣服、器物、萬事に費をなし、國の長臣其職に有る者、身構して有らば何の益か有らん。此諫言は外戚と言ひ大祿なれば、高次の任なるべし、といふにより、一座感じて佐々が言を用ひ、暇を出さるゝ者一人も無し。さて長光、定次に向ひて、此事を一旦評議に及ぶとも、國の長臣として猥に順從して一言も争はず。不

忠なり。世の國の長臣となる者其身の饒なるを省みず、尙貪心より其主君に諛ふ。古より軍に臨みて死するは多く、諫めて席上に死する者は少し。成し難きを成すを優れたりとす。何ぞ諫めて死せざるべき。大方財用の乏しきに及びて、他所の金銀を借求めて、忽ち困窮に至りては士の祿を剥取り、約束の詞を違へ、非義不道の事を申し行ふにも成りぬるぞかし。常に儉ならで足らざるに及びて俄に患ふる共、其本正しからずば、武備を全うせんと思へども争で事よく成るべき。君臣とも國郡を盗み祿を竊むの凶賊なるに、其恥づべきを恥とせず、是非無き事ならずや。汝其職に居て斯る心無きは如何に、といへば、定次一言の答も無かりけり。

○不破彦三武備の事

加賀中納言利常の士不破彦三、四千石の祿を受けて武名を知られたり。其子も同じく彦三といふ。性質愚鈍に見えて常に怠り勝なる事多し。是を諫むる人有りて、時節といふ事有り、といふ。悦び入り候、と言ひながら聽用ふる驗も見えざれば、又諫めたり。其時不破嘲笑ひ、才覺有る御身五百石、我愚なれども四千石、さのみな誹られ候ひそ、と言へば、色を變じて、人の勝る劣る祿の多少に依るべきや。何とてさ程理の不通なるぞ、といふ。不破、夫は我も知りぬ。今の詞は戲

なり。亡父常に我を誡めて、小賢しき利根だてなる事努々すべからず。人の心に入らんとて、かりそめにも諛ふ事有るべからず。唯守るべきは義の一筋なり。汝武勇の身なり。士の義を忘れざれ、と申し置きたりしに違はんかと、日夜是を勤むるの外他事なし。衣食の美を好まず、從者と艱難を同じくせり。日本第一の大家なる加州の士中、我と祿同じき者多し。比べ見られよ。人馬のすくやかなる。武具の揃整ひたる。我に勝る者有りとも覺えず。又利に頼りたる事や爲したる。詔ひたる事や候。偽を申したる事や候。平生日々身に省みて、弓箭の家に生れし職を忽にせず。御身は亡父と親しき人なりし故、斯く諫め給る事も忝く悦び存するなり。されども正しき道に教へ給はるべきに、只時を見て世に従へとや。實の本意には非ざるべし。さらば言に従はずして本意に従はんは如何候らん、と答ふれば、諫めし人大に心服したりけり。

○井伊直孝衣服儉約の事附戰國の時質素なりし事

井伊直孝、大坂冬の軍に物見二騎を遣るに、雨に濡れて歸りければ、則著られし小袖二つを脱ぎて與へられけり。扱安藤帶刀の許より小袖を貰ひて、縞の小袖革袴にて兩御所の御前に出られけるとぞ。直孝の領地近江の彦根は、湖上より船を泛べて都に行くに甚だ近し。太平に及びて稍奢靡

の風俗になりて、彦根の士も都近ければ衣服美麗になりけるを、直孝戒めずして儉約にすべき道を謀り、江戸より歸る時、木綿の衣服を供する士の數密に用意して、彦根に著く時俄に配りて著せられけり。彦根の侍衣服を飾りて迎へけるに、供の士皆木綿の衣服なり。彦根の人々身を省みて、美服を裂きたく有りしとぞ。一事の法令をも出さず、彦根の奢止みてけり。

戰國の時衣服質素なる事論するを待たず。瀧川左近將監一益、關東の管領として厩橋に至る時、諸將對面の爲來りしに、只今一つ有る衣服の垢附きたるを濯ぎて赤裸にて候程に、暫く待ち給はれ、と言ひし事語り傳へて、直孝の衣二つ物見の士に與へて、著替の無かりしも皆符合したり。泰平に及びて稍衣服の美に成れりしか共、寛文の頃まで尙其遺風あり。然れども金銀利倍の物語する事は、士の恥と心得居たりけり。酒井雅樂頭忠清大老たりし時、江戸の殿中にて、春の末にや休所にて、下に著たる服の汗附きたるを欄干に懸けたるが、所々繼ぎたてたるが見苦しき、と歸りて語られしに、其事を司りし老女の、時移りて君の奢り給ふにこそ。我一生は今の如くならん、と言ひし事あり。此事は嚴有院殿の御時なり。古の武士は大やう無用の奢侈を縮めて、用ふべき事には吝ならざりしなり。關ヶ原一戰の後成瀬吉右衛門は伏見に有り。其子隼人正駿府に在りけるが、折節父の許に金を贈りけり。居間

の天井に釣置きて、客來れば、彼見給へ。肴を調味せよ、とて、隼人が贈りたる金なり。是を見れば美味に勝れり、とぞ語りける。大坂冬陣和平の後、隼人が子何某祖父の所に來りければ、此度は事故なけれども聽て事有るべし。其時よき馬を求めよ。江戸廣しと雖も、金二十枚の馬はさのみ多からじ。之を、とて二人の孫に各金二十枚を與へしとなり。昔の士風想ひ見るべきにや。

○永井尙政執政の用意を直孝に問はれし事

永井信濃守尙政に執政の職を仰出されし時、井伊直孝に對面し、不肖の身斯る任を受け、甚恐懼に及び候。教訓を得て其職に居候はばや、と申されければ、直孝、尤の事に候。我教へ申すべし。身を潔くし明朝來られ候へ、と有りければ、辱き由言ひて沐浴し、禮服して其明の朝行かれしかば、直孝出會ひて、世の諺に油斷大敵と申候事定めて知られたるべし。萬事の危きに及ぶ事、皆是油斷より破るゝ事の候。此事固く忘られな、といはれけり。

○中院通茂公幼宮を教訓の事

青蓮院の宮にや、幼き宮に中院内府通茂公後見たりしに、常に碁、雙六を制せられけり。或時公參られしに、將棋の盤の有りしを見て、家司坊官を招き、兼て申せしに斯る物を何とて置きたるぞ。はしたなき業は素より悪しけれども、假令有りても、年の長じて心附の有りて止む事もあなるなり。是等の類はさしも悪事にあらざる故其事に慣れ、空しく月日を過し、學問の志怠るものなれば、第一の悪き物にこそあれ、とて退出せられけり。又或時其宮に參る人尺八の名管を持來れり。重器なりとて人々玩びける時、公參りて、是は誰が業ぞ。斯様の物を、とて柱に打ちあてて碎かれけり。彼の主の甚だ重器と思へるに、斯く許になして如何にせん、といひけるに、其の主來り事の由を聞きて、誰某が持ちたる内府の聞し召されん事恐ろしく候に、それと知られ申さぬは大なる幸に候、と言ひけるとぞ。

○松平信綱恭敬の事附信綱幼年奉公の事

松平伊豆守信綱出仕の時、裏附の上下著る事無し。屋敷に有りても是を著られず。常に言はれしは、人の心衣服によりて變ず。出仕して恭敬を存せずしては忠を盡す事を得難し。先衣服より心を附けて恭敬を忘るべからず。我に於ては斯くの如く勉めざれば、忠勤を成し難し、と云はれ

けり。

信綱實に大河内金兵衛元綱の子、伯父正綱の嗣となる。幼名長四郎とぞ申しける。嚴有院殿御誕生有りし時より御家人になされ、御遊相手にぞ候ひける。大殿の御寢殿の軒に雀の巢をくひ子を産みたるを、若君此方より御覽じて、長四郎よ取りて進せよ、と仰せけるに、年十一歳なれば如何にも叶ふまじき由を申す。晝は驚きて飛去りもやせん。能く見置きて、日暮れて此方の軒に梯指して登り、忍び行きて取るべし、と有合ふ人々勸めければ力無く、日暮に忍び登りてやうく傳ひ行きけるが、踏み損じて御壺の内にと落とつ。大猷院殿御刀執らせ給ひ障子開かせ給へば、御臺所燈火取つて出でさせ給ひ御覽するに、長四郎にて有りけり。大猷院殿、汝は何故爰には來れるぞ、と御尋有りしに、今日の晝御殿の軒に雀の子産みたるを見て、餘りの欲さに取りに参りて候、と申す。否々己が心にはあらじ。誰が教へけるぞ、と様々に御推問有れども、幾度も争ひぬ。年比にも似ぬ不敵なれば、疾く大なる袋の中へ押入れて口を御手づから封じ給ひ、柱に掛けさせ給ひ、事の由を有りの儘に申さざらん程は、何時までも斯くて候へ、と仰せけれども、猶詞を換へず。夜既に明けて常の御座を出させ給ふ。御臺所は早く心得させ給ひて、彼が幼き心にて身の悲しさを願みず、竹千代君

の仰なりと申さざる事を深く感じ給ひ、女房達に仰せ有りて、朝飯を召して食へ候へ、とて賜はりて、又口を封じ給ひてけり。晝程入らせ給ひて、又御推問有れども遂に其詞屈せず。御臺所御訖言有りしかば、さらば重ねてを愼めよ、と仰せ有りて御赦あり。御臺所に向はせ給ひ、彼が今の心にて生立ちたらんには、竹千代殿の爲には雙無き忠臣にてこそ候はめ、と殊の外に悦ばせ給ひけるとかや。されば諸國の大名の代々奉りし人質を返し、殉死を禁じ大佛を鑄て錢とし、明暦の火災、東都の城廓を始め悉く灰燼となり、諸人焦爛に苦しむ。殊に去年由井正雪の逆徒の騒有りし後なれば、人々心安からざりしに、信綱事に臨みて立所に執り行ひし事皆其所を得て、程なく世の人心も靜まり、昔に替らぬ時となりぬる事、古の賢輔にも恥づべからず、と申し傳ふる所なり。

常山紀談 卷之十九

○細川忠興胃の立物の説

細川忠興に、胃の物すきを如何にせばや、と言ふ方の有りしに、詳に書き記して使に與へられけり。使、立物の下地桐の木と書き給へるは折れ易き物にて、如何候はん、といへば、忠興色を變じ、汝は弓箭取の使とも覺えぬなり。軍に臨む者誰か生きて歸らんと思ふべき。一二つ無き命だに然り、何條立物の折るゝを厭ふべき。輕きこそよけれ。立物の折るゝばかりに働きたらば、何の見苦しき事有らん。ひと面目にてこそ有れ、といはれけり。

天正元癸酉年七月、信長淀の城を攻落されしに、岩成主税助を細川藤高の士下津權内打取りし時、忠興八つの年なりけるが、長岡監物が肩に乗りて、監物が立物鹿の角に取付き、見物して興に入りたりしを、人見て後年の生先を推計りけると也。

○忠興飯河豊前同肥後父子を誅せられし事

並肥後が妻節義に死する事

細川忠興豊前に在りし時、同州龍王の城に飯河豊前宗祐祿三千石、岩石の城に長岡肥後宗信祿六千石、宗祐の子寵せられて長岡の姓を與へられしに、父子とも罪有りて、慶長十一年七月二十一日二人とも誅せらる。宗祐は河北石見、逸見治左衛門を討手とし、宗信は増田藏人を討手とせらる。宗祐散々に戦ひて死傷多し。宗信が妻は米田助右衛門是政が女なり。宗信と睦しからず。對面せざる事三年に及べり。忠興、是政が後室の尼雲仙院と言へるを呼びて、豊前、肥後罪有りて誅すと雖も、汝が女と孫の女に罪無し。密に告知せて命を助けよ、となり。後室の尼聞きて、肥後が妻常に中よからず。然れども、夫を捨てて斯かる時に遁れんとは得こそ存すまじけれど、仰せの忝きをば告げ申さん、とて文して告げ遣りければ、誠に仰せは忝けれど、今はの際に夫を捨てて遁れん事人道にあらず。女子は東西を辨へざる者なれば、養育して給はれ、とて使に附けて尼の許へ送りけり。宗信是を聞きて大に悔み、我過を謝し、終に共に自害したりけり。

○黒田満徳丸袴著の時母里但馬舞をまひし事

黒田長政の嫡子満徳丸とて、四の歳袴著の祝有り。母里但馬はひき目親にて、常に爺と名づけられしが、其時但馬満徳丸の髪を搔撫でて、疾く成長して功名し、父上より克くし給へ、と申しければ、長政、何といふ事ぞや。我武略を貶するか。若き時は汝又備後山とも相謀りき。朝鮮に渡り、又關ヶ原の合戦も皆汝等が扶に依らず大敵に勝ちたり。其後世太平なれば立つべき武功もなし。満徳如何に思ふとも我を越ゆる事存じも寄らず、とて膝立直し、但馬を睨まれしかば、人々汗を流す處に、但馬側に向ひて、故無き怒かな。人の子に功名し給へと云ふは僻事か、とて物ともせざる體にて、長政の方を見向もせず。長政、否父より優れとは如何に、と怒られしかば、但馬打笑ひ、心を静めて聞き給へ。武功は幾度事に會ひても、仕澄したりと思ふ事は無く、度毎に不足なる者に候。他人は類無しと褒め立つれども黙して過ぎ候よ。良き軍兵を引具し地の利よく、幸に勝ち給へるを、自讃は以ての外の僻事にてこそ候へ。今まで勝軍に慣れて、毎度斯くの如くならんとならば必ず敗北有るべし。味方崩れたる時一足も引かず討死は、殿の得ものなり。其は大將の道にあらず候。味方を討たせず軍に勝つを良將と申し候。殿の武略進む

一途は得ものにて御座せ共、進退圖に中る一途は缺けて御座しまし候。此是非の論は備後老功の者にて候間、時々問はせ給へ。満徳殿、只一人駈け出でて討死する事は葉武者の業なり。死ぬ様は軍に勝つを大將の道にはする事に候。此詞よく覺えて疾くより能し給へ、と髪を撫でて長政の怒を物とも思はぬ氣色なり。備後守次の間に酒宴して有りしが聞きつけて、銚子土器取持ちて走り出で、長政の前に跪き、憚も顧みず進め奉り候、とて盃を差置き、若き時如水公の小姓たりしかば御酌は致し習ひし、小笠原の禮儀存じ出し候、とて酒を進めければ、長政打解け盃を傾けられしかば、夫を但馬に賜り候へ、とて、狂人よ、夫へ罷出でよ、と言ひければ、但馬進み寄り其盃を戴きて、三度引受け飲みて後、殿は由無きに怒り給ひ、今日の祝に興醒め候。少し酔ひ給へ、と云ひしかば、長政も又盃に十分引受けられし時、但馬、いざ肴よ、とて田村を諺ひ出し舞澄したり。鬼の如くなる男の稽古せしか、拍子も耳目を驚かせり。皆一同に、兵の交り、と諺ひて酒宴盛になりければ、備後守高聲に、若き人々能く聞かれよ。心掛り深きも殿、又思慮無きも殿なり。大戲者は但馬、又頼母しきは但馬なり。黒田の家は武勇目出度き時ぞよ、と皆々酒を酌交し、事有らん時鎗を台せ、爲すべき事を爲し置く時は何事も許し給ふぞ。人々諺へや舞へや、とて酒宴止みてけり。又長政或年の春歳初の祝に、栗山備後守が許に行かれしに酒宴有り。四つ



比に及んで長政、我居たらば、若き者共酒思ふ程得飲まじ。後にて打解けて酒宴せよ、とて歸られしに、但馬、今少し居て若き者共に懇に詞をかけ、人の悦ぶ様にこそ有りたけれ。兎角我儘の直らぬ殿なり。頂に大きな灸をしてこそ能かりなめ、と大音にて云ひしを、長政聞かぬ體にて歸られけり。

○龜田大隅江戸の石壁を築きし事

江戸の石壁を築かる時、淺野長晟仰を奉りて龜田大隅高綱を奉行とす。石壁成りて後崩るる事三度に及べり。台徳院殿打廻り御覽じて、何とて崩れしや、と仰せ有りしに、龜田謹んで、其事に候。大隅軍の時鴟の嘴の鎗を提げ先駈け候。陣遂に崩る事は無く候。石は無心物にて詮方無く候、と申す。事終りて鹿毛斑の馬を大隅に賜ひけるに、士の二毛の馬に乗る事や候。逃けたる事も無く候に口惜く候、と言ふを、土井利勝申上げられしかば、別の馬を換へて與へよ、と仰せられけり。龜田大剛の者にて、十文字の鎗下坂忠親が造にて、鞘は鴟の嘴に造り、栗色に塗り總螺鈿の柄なり。

○吉岡建法狼藉太田忠兵衛手柄並太田武技を論ずる事

慶長年中禁裡に散樂の有りし時、貴賤群參しけり。吉岡建法と言ふ染物屋、劍術の妙手にて有りしが、無禮の事有りしを雜色咎めければ、建法外に出で、羽織の下に脇差を隠し元の所に入り、先の雜色をたゞ一打に切つて、夫より縦横に斬廻る。元より飽まで手利なり。手負數を知らず。板倉伊賀守勝重日の御門に有りしが、眉尖刀の鞘を外し向はれしを、太田忠兵衛、何條手下させ給ふ事や有る、とて駈行くを、勝重、此長刀にて、とて與へられしかば、太田吉岡に向ひ、惡逆無禮の男子首を延べよ、と走り懸れば、吉岡は紫宸殿の階に息次居しが、我に太刀打せん者汝ならでは、と言ひて、階を下りて立向ふ。太田、己に眉尖刀は無益なり、と言ふ儘に刀を抜く。吉岡走り懸り様に倒れけり。太田大音あけ、倒れたるを切るは士の恥なり。立ちて勝負せよ、といふ。吉岡立上る所を飛懸り、一太刀に切殺しけり。勝重悦びて太田に祿を増し盃を與へて後、吉岡が倒れたるを切らざるは勇餘り有りと雖も、氣に驕の失有るに似たり。吉岡商賈賤しき身なれども、劍術は如何なる人も及び難し。倒れしは天の與へなり。然るを切らざるは虚を打つの理に暗しとも言ふべきにや、と云はれしに、太田、仰せ誠に辱く候。此處に一つ存する

故の候。多く敵の倒れ候を起しも立てず打たんとする故に、身を忘れ脚を切られて倒れたる者の勝になり候。倒れ候に虚實の二つ有り。吉岡が倒れ候は虚にて候。吉岡假令實に倒れ候とも容易く斬らるゝ男にあらず。倒れし時は身を防ぐ事虚に似て候へども、近附くならば切らんと存するは實にて候。虚にも實にも、倒れ候者の立上らぬと言ふ事は無く候。その立上る時は射を防ぎ、敵を切り拂はんと存する心虚になり候。其處を打つて容易く切り止め候ひき。誠に斯る小き業匹夫の事にて、殿の知し召す理にても候まじ。されども陣を分ち軍する道にも相叶ひ候事もやと、憚を省みずして申すにて候、と言へば、勝重大に感ぜらる。

○柳生宗矩劍術御師範の事並宗矩先見の事

柳生但馬守宗矩は、大和國にて世々柳生の庄の地頭なり。關ヶ原の戦の後徳川家に仕へ奉りて、父よりの劍術を受傳へ無雙の妙手と聞えてけり。大猷院殿御年若かりしより此技を好ませ給ひ、宗矩御師範に参りて御心を盡させ給ひ、頗る其妙を得させ給ひけり。只此藝に依りて其人を信じ敬せさせ給ふと人々思ひけるに、實に其技に依つて治平の政事を諭し申しけるにや、常に御側の人々に、天下の治めは但馬守に學びてこそ其大體を得たれ、と仰せられしとぞ聞えける。宗

矩年老病重かりし日も、辱くも家に入らせ給ひき。正保三年三月終に空しくなりけるに、其比例無き贈位の事を執し仰せられ、從四位下に上げさせ給ふとかや。宗矩死せし後事に觸れて、生きて世に在らば尋問ふべきものを、と深く慕はせ仰せられしは、誠に有難き事なりし。其中一事相傳ふるは、島原凶徒の亂江戸に聞えし頃は十一月十日なり。宗矩、有馬女蕃頭豊氏の家に散樂有りて行向ひしに、家隸尋ね來て但馬守を呼出し、肥前國島原に土民相集りて楯籠り候ひぬ。是切支丹宗門の者にて、松倉に叛き候ての事なり、と早馬來り、板倉内膳正追討の御使を承り、早や御發向候、とぞ申しける。宗矩さらぬ體にて元の所に歸り坐し、用人に向ひ、急ぎて宿所に歸るべき事出來ぬ。良き御馬を貸し給へ、と言へば、心得たりとて馬に鞍置きて牽立つ。宗矩打乗りて品川に馳著き、板倉は如何に、と問へば、遙に過ぎさせたり、と答ふ。川崎に馳著きて問へば、今は二三里も隔りたり、と申す。日已に暮に及べば引返して御城に上り、近侍の人々を以つて、申すべき旨有りて伺候し候ひぬ、と申せば、馳て御前に召して、何事にや、と仰有り。宗矩畏り、只今承り候へば、九州に切支丹宗門の逆徒發起し、内膳正重昌追討の御使を承り馳向ふ由、仰せと稱し、押しむべきと存じ追駈け候へども、追附かず候。此由申さん爲なり、と申す。何故に押しめんと思ふぞ、と御尋あり。さん候。君は只管の土民儕立籠り候と思召して、

追討の御使輕くこそ候へ。宗門に附きて起る軍は大事のものにて候。重昌一定討死仕り申すべし。如何にも計つて止めばやと存じ候ひし、と申す。以ての外御氣色損じ御座を立たせ給ふ。宗矩猶夜更くるまでも退出せず。此由聞召し、又御前に召して、重昌討死すべき子細は如何、と御尋有り。宗矩、さればこそ兵の道は勇を先とす。勇士は死を悲まず。三軍皆恐れざる事は今の名將の專一とする事にて候に、凡愚の輩宗門を深く信じ、其法を固く守りて死を以て身の悦とす。百千の人死を恐れざるの勇士となり候事は宗門の故にてこそ候へ。織田家の武威を以て一向門徒に勝つ事能はず。天子の命を假りて和平になり候ひぬ。三河國の一揆も近き御家の事にてこそ候へ。大坂の時、重昌年若く候へども數十萬人に撰ばれ、唯一人大事の御使承りたる者なれば、是等の土民打亡すべきに何事か有るべき。誰かは其下知を背くべきと思召したらんは、事の違ひにて候べし。重昌位高く祿も有りて、年頃重き職を司つて、常に人の敬ひ候はんには然るべく候。今の重昌が身にて城を攻候ひなんに、西國の諸侯如何は下知に従ふべき。思ふにも似ず攻厭みて候ひなんには、又御一門の人々か、さあらずば宿老の内重ねて追討の御使下され候べし。然らば重昌何の面目有りて生きて再び關東に歸るべき。可惜人を土人等に打たせ候ひなん事、誠に口惜くこそ候へ。是は御家の恥辱とも申すべきをや。御許を蒙りて候はば、追附け参りて兎角

押へ止めて具して歸るべき物を、と憚る所なく申しければ、御後悔の色顯れさせ給ひしが、夫も叶ひ難くや思召しけん、夜も更けたり、とて入らせ給ひしかば、宗矩も退出し、密に人に斯くと語りけるとかや。誠に宗矩が計りし事掌を指すが如くなりしかば、尤も深計遠慮有りとぞ申すべき。

○板倉重昌肥前國島原の賊追討の事並周防守重宗先見の事

島原にて寛永十四年切支丹一揆の時、討手に石川主殿頭忠綱、板倉内膳正重昌なるべし、と云ひけるを、石川聞きて、我年老いたり。板倉其器に當れり、と言はれしが、重昌仰を奉り、肥前に赴き、城落ちざりしかば、又討手の大將を下さるべし、と言ふを、石川聞きて、我始は其撰に合はん事をさのみ悦ばざりき。今思ふに、泰平の世に徒に死なんも志に非ず。天晴仰を奉りて西國に赴かばや、とぞ言はれける。重昌筑紫に向ふ時、京都にて所司代板倉周防守重宗に對面有りて、今度の仰せを承る事辱き由語られけり。重昌既に京都を立ちて後、重宗、一重昌が思ふ所を察するに必ず討死すべし。再會是迄なり、と言はれけり。松平伊豆守信綱肥前に進發せらると聞きて、信昌城を攻めて討死せられたり。人重宗に其謂を問ふ。重宗、城に籠る者は百姓

の身なる故に、内膳正忽ち攻落すべしと思へる色顯れたり。假令此城を攻落すとも、一揆の奴原さのみ功名とも言ふべからず。只今四方無事の時、一揆頼無き城に籠りて降参するとも、悉く打殺さん事を知つて其心一和すべし。容易く落つべからず。日數を経ば又他の大將を指向られんに、内膳何ぞ生きて歸るべき。吾是を以て討死せん事を知りぬ、と言はれけり。

○川北九大夫肥後國川尻を守る事

細川忠利の士川北九大夫と言ふ者有り。川尻の代官を勤めよ、となりしに、出陣の時供に連れられなば代官の職勤むべし、と言ひければ、尤とて、出陣の時供すべし、と定めらる。天草は稍もすれば一揆をなす所と西國の人の言ひける事なれば、心に掛けて、川尻は海邊、船の著く處にて細川家の米藏有り。天草へ海上七里と聞ゆ。川北兼ねて地鐵炮の數を調べ置けり。獵師の事也。天草の一揆起ると聞きて、川尻の海岸に一間に一本宛竹を立てさせ、一本毎に火繩を結び附け、五本に一人の地鐵炮を配りけり。後に天草にて生捕られし者の言ひけるは、其夜川尻の米を取らん爲に船を押出して見しに、川尻に幾何とも無く鐵炮を備へて見えたる故、諸は熊本より軍兵の早川尻に來れり、とて船を戻しけるとなり。川北無かりせば川尻の米を取られ、天草の糧容

易く破れまじかりしに、川北が謀にて天草の糧早く盡きてけり。

○天草一揆夜討の事

天草の一揆を圍み攻めらるゝに、城中糧米既に乏しくなれば、夜討して米を取らん、と本田但馬が謀にて、先諫早口の堀の外の水を汲ませける時、鐵炮を並べて寄手に見せたり。斯くする事三度に及びて、後には漸々に遅く夜に入つて汲ませけり。是は夜討に出づる時の鐵炮の火を見咎めさせじとの事なり。其後毎夜堀裏にて、切支丹の唱事天帝といふ事を數千人一同に喚く。是も夜討に出づる時の物音を紛らはさんとの謀なり。斯くて寛永十五年二月二十一日の夜、五百人をもて黒田忠之の陣所に押寄せ、二陣の兵二千人を二手に分ち、繩攀して額にはくるすを鉢巻にして、相辭は丸か丸と定め、首な取りそ、食物を取り來るを、第一の功名にせん、と下知し、諫早口より出て、出廓の側なる有江口に退き入るべしと定め、陣屋を焼かん爲に檜の木を削りかけにして腰に差させ、丑の刻ばかり月も朧に暗かりしを便に、黒田の陣所に押寄せ、同時に関の聲を上ぐれば、城中にも関の聲を合す。士大將黒田監物仕寄際に有りて、父子共に面も振らず支へ戦ひしが、流れ矢に中りて討死しければ、從兵四十三人枕を並べて討たれけり。一揆大に